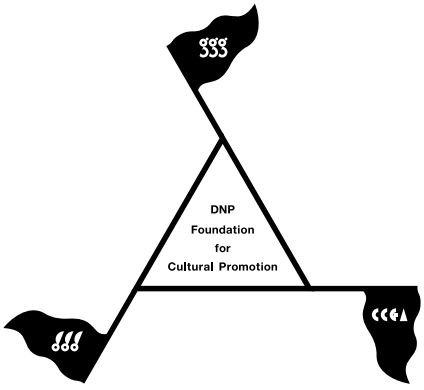
Graphic Art & Design Annual 12-13

DNP Foundation for Cultural Promotion

Graphic Art & Design Annual 12-13



［表紙デザイン］

表紙デザインの依頼を受けた時、すぐに思い出したのは、
どれほど日本のグラフィックデザインが私に刺激を与えてくれたか、ということです。
特に亀倉雄策さんと田中一光さんに大きな影響を受けました。デザインに境界はありません。
偉大な先達として、プロフェッショナルとしての尊厳を守ることに人生をかけたお二人に
敬意を表したいと思います。

ジヤンピン・ヘ

［Cover Design］

When ggg invited me to design the Annual cover this year,
it made me recall how Japanese graphic design's influenced me.
Without doubt, Mr. Yusaku Kamekura and Mr. Ikko Tanaka influence me the most.
There is no boundary in the design world, as a descendant,
we time to time pay our sincere tribute to the two predecessors
who make invaluable contributions in safeguarding professional dignity with whole life.

Jianping He

Graphic Art & Design Annual 12-13
ggg ddd CCGA

Publication: DNP Foundation for Cultural Promotion
DNP Ginza Building, 7-7-2 Ginza,
Chuo-ku, Tokyo 104-0061
Phone: +81 3 5568 8224
Planning & Editing: ginza graphic gallery
Art Direction: Shin Matsunaga
Design: Shinjiro Matsunaga, Moemi Kiyokawa
Photography: Mitsumasa Fujitsuka (ggg),
Ryota Sakai, Koji Takanashi (ggg gallery talk)
Translation: Rei Muroji, Simui International Inc.
Cooperation: Shoji Usuda, Koichi Kawajiri
Printing & Binding: Dai Nippon Printing Co., Ltd.

Contents

目次

はじめに — 5
北島 義俊（公益財団法人DNP文化振興財団理事長）

序論：
グラフィックデザインにいま何が求められているのか — 6
佐藤 卓（グラフィックデザイナー）

1 展示事業 — 13
ギンザ・グラフィック・ギャラリー（ggg）2012–2013 — 14
dddギャラリー 2012–2013 — 40
CCGA現代グラフィックアートセンター 2012 — 50

2 教育・普及事業 — 61
ggg, dddギャラリートーク — 62
CCGA版画工房ワークショップ — 72
出版活動 — 73

3 アーカイブ事業 — 75
DNPグラフィックデザイン・アーカイブ — 76

4 国際交流事業 — 81
ある展覧会が触発したグラフィックデザインのコレクションと出版への取り組み — 82
ワン・シュ（OCT Art & Design Gallery 館長）
「TDC展2012」巡回展 中国・深圳 The OCT Art & Design Gallery — 84
AGI総会香港2012 — 85
ddd企画展ドイツ巡回「phono/graph－音・文字・グラフィック－」展 — 86
デッサウ・バウハウス校舎における浅葉克己とバウハウス・ポスター展 — 87
Tokyo ADC Award 2011 ゲシュタルテン・スペース巡回 — 87

5 研究助成事業 — 89
2012–2013年度 助成実績 — 90

展覧会概要 — 91
展覧会一覧 — 96
ギャラリー概要 — 104

Foreword — 5
Yoshitoshi Kitajima (Chairman of the board of directors, DNP Foundation for Cultural Promotion)

Introduction:
What Is Demanded of Graphic Design Today? — 6
Taku Satoh (Graphic Designer)

1 Exhibitions — 13
ginza graphic gallery (ggg) 2012–2013 — 14
ddd gallery 2012–2013 — 40
Center for Contemporary Graphic Art (CCGA) 2012 — 50

2 Education & Enlightenment — 61
ggg, ddd Gallery Talk — 62
CCGA Print Studio Workshops — 72
Publications 2012–2013 — 73

3 Archiving — 75
DNP Graphic Design Archives — 76

4 International Exchange — 81
Collections and Publications Inspired by an Exhibition — 82
Wang Xu (Executive Director of OCT Art & Design Gallery)
"Tokyo TDC 2012" Traveling Exhibition
at The OCT Art & Design Gallery in Shenzhen, China — 84
AGI Congress Hong Kong 2012 — 85
"phono/graph–sound·letters·graphics–" at Dortmund U — 86
"Katsumi Asaba and the Bauhaus Posters Exhibition" at Bauhaus Dessau — 87
"Tokyo ADC Award 2011" at Gestalten Space — 87

5 Research Support — 89
2012–2013 Financial Support Activities — 90

Review of ggg, ddd and CCGA 2012–2013 — 91
List of Exhibitions 1986–2013 — 96
Galleries' General Information — 104

Foreword

はじめに

2012年度のギンザ・グラフィック・ギャラリー（ggg）では、12回の企画展、dddギャラリーでは6回の企画展を開催しました。
なかでも、gggで開催した中国出身のジヤンピン・ヘ氏の展覧会とシンガポール出身のテセウス・チャン氏の展覧会、およびdddギャラリーで開催したアジア7都市のデザイナー展「GRAPHIC WEST 5」では、グローバル化するアジアのグラフィックデザインの現状をご紹介することができました。また、国内作家では、永井一正氏、横尾忠則氏、松永真氏など日本を代表する巨匠たちの実験精神溢れる斬新な作品の数々に、大きな反響がありました。

現代グラフィックアートセンター（CCGA）では、3回の企画展と特別展を1回開催いたしました。また、地元の方々から要望が寄せられていた版画工房を昨年9月に開設し、3回のワークショップを開講しました。教育普及事業として、今後もさまざまな版画のワークショップを開催していく予定です。

アーカイブ事業としては、今後の有効活用を図るために、収蔵ポスター作品のデータベース化を着々と進めています。本年度は、石岡瑛子氏をはじめ、数多くの貴重な作品が新たにコレクションに加わりました。
また、田中一光氏、福田繁雄氏、永井一正氏のそれぞれの主要作品につきましては、ノイエ・ザムルング（ミュンヘン国際デザイン美術館）、奈良県立美術館、岩手県立美術館の3箇所に寄贈しました。

なお、DNP文化振興財団は、昨年の11月1日、公益財団法人に移行いたしました。これを機に、さらなる活動の充実を推進して参りたいと存じます。今後とも、皆さまのご理解とご支援をお願い申し上げます。

公益財団法人 DNP文化振興財団 理事長
北島 義俊

During the 2012 fiscal period a total of 12 exhibitions were mounted at ginza graphic gallery (ggg) and six were held at ddd gallery (ddd) in Osaka. Among the highlights of the year were exhibitions at ggg of works by Jianping He of China and Theseus Chan of Singapore, and a group exhibition at ddd titled “GRAPHIC WEST 5” that featured works by designers from 7 cities throughout Asia. These exhibitions provided an introduction to the globalization under way today in Asia’s graphic design realm. Among the exhibitions focused on Japanese designers, especially well received were innovative works by a number of Japan’s greatest masters of graphic design, including Kazumasa Nagai, Tadanori Yokoo and Shin Matsunaga.

The Center for Contemporary Graphic Art (CCGA) in Fukushima Prefecture mounted three regular exhibitions and one special exhibition during the year. In addition, in response to requests from its local community, in September 2012 CCGA opened a print studio. During fiscal 2012 three printmaking workshops were held, and future plans call for an array of workshops to be offered as an ongoing educational program for local citizens.

In archiving operations, progress continued to be made in creating a database of posters in the DNP Graphic Design Archives, to foster effective usage of these valued resources in the future. The past year also saw many new treasured works added to the collection: for example, works by the late Eiko Ishioka. Donations were also made during the year of major works by Ikko Tanaka, Shigeo Fukuda and Kazumasa Nagai to Die Neue Sammlung (The International Design Museum in Munich), Nara Prefectural Museum of Art and Iwate Museum of Art.

On November 1, 2012 the DNP Foundation for Cultural Promotion underwent a change in status to a “public interest incorporated foundation” – a significant shift that has further deepened our commitment to enhance our activities all the more. We ask for your sustained understanding and support as we proceed forward to carry out that commitment.

Yoshitoshi Kitajima
Chairman of the board of directors, DNP Foundation for Cultural Promotion

グラフィックデザインにいま何が求められているのか

佐藤 卓
グラフィックデザイナー

――まずはデザインの現状についてのご意見をおうかがいしてみたいと思います。

佐藤　仕事の領域が広がっていますね。グラフィックデザイナーだからと言って、グラフィックを作って納品するだけで完了する仕事は少なくなっています。しかし、考え方によってはこれはチャンスです。デザイナーは社会に出てからも、仕事を通じて表現力や判断力を磨き続けるわけですが、そこで培われたスキルや経験を活かしてお手伝いできる場はもっともっと広いと思うんです。都市計画、医療、教育、環境や資源の問題など、デザインを必要としないフィールドは社会に存在しないと言っても過言ではありません。そのアングルから言うと、デザインとは「あらゆる物事のあいだをつないでいくこと」だと私は考えています。

ただ、そういった認識がまだ世間的に広く浸透していないことも事実です。ポスターなど様々なメディアを用いて、そのデザイナーの個に由来する独特な表現で情報を届ける、デザインはそういった特殊な行いだと考えられがちです。

個に由来する表現で人の気持ちをつかむことはもちろん大切です。目に見えるデザインと見えないデザインの両極が存在することが望ましいと思います。かつては前者が必然でもありました。たとえば写真という技術がない時代なら、デザイナーは絵や文字も自分で描かざるをえません。すべて自分で準備しないといけないわけです。当然そこには個の表現が色濃く宿ることになるでしょう。しかし、テクノロジーが著しく進化した現代においては、個の表現に由来しない手法によって社会的に機能するものを作り出したり、様々な課題の解決にアプローチできることが明らかになってきており、私自身はそこにデザインの新しい可能性が拡がっていると感じています。

――いまおっしゃったデザインの可能性について、もう少しおうかがいしたいと思います。「つながり」は目に見えないものだと思うのですが、どうやればそれをデザインできるのでしょう？

佐藤　まず発想を転換する必要があります。ヒントは意識化されていない日常の仕組みにあると思います。世の中には気づいてもらえなくてもいいもの、つまり私たちが日常生活の中で意識せずに行っていることが山ほどありますよね？　しかし、そういった無意識の領域にも巧みに計算された技術や意図が働いています。たとえば政治の仕組みについて考えてみても、「なぜ二院制になっているんだろう?」というふうに日頃から考えている人はあまりいないと思うのですが、そこには民主的意思決定を円滑に進めようとする社会的機能が存在しています。そういった機能は大きな社会システムだけでなく、日常の中にもいくらでも見つかります。「ドアノブの形を見れば迷わずどうすればいいか、ふつうはわかる」というのもそうですね。いちいち「どう開ければいいか?」を意識することなく我々はドアを開けているのですが、そこにも実はデザインの働きがあります。

それらは所謂 “デザイン” という言葉で語られてこなかったことかもしれません。しかし、そう考えることで視野が広がります。実際デザイナーから見て、「この仕組みのここを変えれば、色んなことがもっとキチンと機能するのに」というケースはたくさんあると思うんです。まさしくそこが未開の領域で、それらをデザインの対象として捉えて我々が関与することで、スムーズな流れや心地よさを生み出し、無駄を省くこともできるかもしれません。いま社会が何を必要としているかを想像するところからデザイナーの仕事が始まる、そういう時代なのだと思います。

――これまでデザインとは無縁に思われた領域にデザイナーの視点が入ることで、ゴチャゴチャになっていた問題が整理されたり、課題解決に向けたプロセスがクリアになるケースは多そうです。

佐藤　実際そう感じ始めている人が一般的にも増えています。最近ではメディア等を通じて、「コミュニケーションデザイン」や「コミュニティデザイン」、「ソーシャルデザイン」といった言葉を耳にすることも多くなっており、「コト」のデザインに対する世間の関心も高まってきました。地元に入って地域の人たちとディスカッションしながら町おこしの施策に取り組んだり、その地域の人々のポテンシャルを引き出す活動を行うデザイナーもいます。デザインマインドはどんな人の中にも存在しますから、それを育むことで身の回りのことを少しずつよくしていくことも出来ると思います。

――「育む」といえば、佐藤さんも教育番組を手がけていらっしゃいますね。

佐藤　感受性豊かな幼少期からの教育が大切です。そういったことは以前より考えてきましたが、「デザインあ」というテレビ番組（NHK Eテレ）でそれがようやく形になりました。これがきっかけで培われた感覚を、大人になってからいろんな仕事に活かしてほしいと思ったんです。

――グラフィックデザイナーの仕事の領域が広がっているというお話もありましたが、やはり果実や枝葉だけでなく、根っこからデザインすることを時代が求めているという印象を受けます。

佐藤　いまはデザイナーも社会の本質的課題にコミットせざるをえません。多くの人びとが「日本はこのままでいいのだろうか？」という漠然とした不安を抱いています。社会には様々な問題が山積しており、特に東日本大震災以降は多くの方が発言されているように、私たちは「文明とはなんなのか？」「世界の中で、日本はどうあるべきなのか？」といったことまで考えざるをえない時代です。デザイナーはそういった時代背景もふまえて、人びとが歩むべき方向へ進むように補佐したり、舵取りをしていく必要があると思います。冒頭でもふれましたが、まるで水のようにあらゆる物事のあいだに入ってつないでいくことが求められているんです。

つまり、デザインとは「やるべきことをやること」ですね。「やるべきこと＝表現」であればそれは正しいと思います。その一方で「やるべきこと＝見えない仕組みや流れを生み出す」のケースもあって、自分の置かれた状況と課題によってその都度向かう方向は違いますから、どちらかにとらわれることなくニュートラルなスタンスで取り組む必要があります。

そもそもデザインとは、弾性ではなく塑性的行いだと思うんです。常に元の形に戻るのではなく、状況に応じてなるべき形になる。メタファーとしてまさに“水”ですね。必要なときには目に見え、必要ないときは見えない。そして我々の生活になくてはならない存在でもある。

――そう考えると、デザインが「やるべきこと」は多そうです。ここ数年、デザインだけでなくクリエイティブの領域全般で景気の悪い話を聞くことが正直多いのですが、ものの見方を変えればそこにはまだ見ぬ世界が広がっているということですね。

佐藤　そうなんです。もっとも根幹の部分で言うと、経済以外の豊かさの指標を探し、新しい方向性を提示することも我々の仕事になりうるかもしれません。景気が悪くなると気持ちに余裕がなくなり、不安も大きくなっていきますが、その一方で時間や空間というお金では手に入らないものの価値に気づく人たちも増えてきていますから。ある意味、江戸時代までは日本はもっと豊かだったと思うんです。近代化や西洋化で様々なものを得たぶん、失ったものも大きいんですね。

そういった状況に対して「デザイナーに何ができるのか？」を考え、これまでとは違うスタンスで世の中に関わっていけないだろうか？　と模索していく過程で、多くの気づきを得ることができました。不思議なことに、そういった活動をスタートして時間が経ってくると、同じような意識を持つ人たちがジャンルを越えて出会うことになります。

――「クロスディシプリン」（各ジャンルのエキスパートが領域を超えて協働すること）も重要なキーワードだと思います。デザインのプロフェッショナルがこれまでそういったことと無縁と思われたコミュニティに参加することで、ほかの参加者に新鮮な気づきを提供できたりするのでしょうか。

佐藤　自分では特に意識していないのですが、言われてみれば確かにそういったところもあるかもしれません。絵やマーク、図式等を用いて「自分たちがやろうとしているのは、こういうことですよね？」と目に見える形にすることで、関係者の意識を束ねたり、お互いの交差点にフォーカスしやすくなるでしょう。ある意味グラフィックデザインは見えないものに輪郭を作ることでもありますから、そのことで目標や問題点をクリアにする役割もあります。

多くの人たちが指摘するように、日本はもともとグラデーションを尊ぶ国で、いろんな物事をいい意味で曖昧なままにしておくカルチャーがあります。「滲み」や「ぼかし」の文化であるためか、明確な印がないままになんとなく存在している組織やプロジェクトも見受けられま

す。流動的な変化をよしとする風土にはすばらしいメリットもあるのですが、ときには家紋のように輪郭を示してみんなで共有することも必要だと思います。

――カンヌ国際クリエイティブフェスティバル（旧カンヌ国際広告祭）のデザイン部門では、日本からのエントリーに対する評価が毎年高いのですが、今年は特に絶賛でした。そして今日のお話のテーマにもなっているように、「デザインの力で社会をいかにつなげるか?」は世界的キートピックになりつつあります。

佐藤　グラフィックデザイナーは、紙質やフォントのデリケートな違いにも対応出来るセンサーを日々鍛え、その感覚を前提にしたコミュニケーションのスキルを磨いています。0.1mm以下の単位でジャッジする能力が求められる仕事です。その力をいろんなところで活用できないわけがないと思うんです。そういった微細なセンサーは本来あらゆる人が持っているものですが、頭で考えることが優先される脳化社会ではその力も衰えがちです。

私自身は個別のテクノロジーの進化そのものには特別な関心がなく、直接そこに関与しようとも思わないのですが、その結果起こりうる社会を想像することはできます。日常を取り巻くテクノロジーが劇的に変化することによって、人と人、人と物のコミュニケーションが希薄になっていくとすれば、そのあいだに入って、「感じる力」を活性化させることもグラフィックデザイナーの仕事だと思います。

「デザインあ展」を企画したのも、それがきっかけでした。展覧会は全身で体験するものだから、来場した方々にテレビを観ているのとはまったく違うセンサーを働かせてもらえるのでは？ と考えたのです。音楽のライブイベントをプロデュースするように、私たち作り手もからだ全体で取り組みました。展示というスタイルにすればデザインがより身近なものとして感じられるだけでなく、展示物にふれたり遊んだりすることで、それがどれだけ日常の中にとけ込んでいるかを体感してもらえます。

その意味では、ギンザ・グラフィック・ギャラリーが果たすべき役割は今後も大きいと思います。グラフィックデザインの新しい可能性をキュレーションし、その意義を世の中に発信する場としての取り組みに期待しています。

（聞き手・テキスト：河尻亨一）

What Is Demanded of Graphic Design Today?

Taku Satoh
Graphic Designer

– To begin, I'd like to ask you your view towards the current state of design.

Satoh: The work scope is expanding. There are fewer and fewer jobs today where the graphic designer works up and delivers some graphics and the job is complete. Depending on how you think about it, though, this offers opportunities. Even after a designer finishes school and starts working, he continues to polish his expressive and judgment capabilities, and now I think the places where he can help by making use of his cultivated skills and experiences are much, much broader. It's no exaggeration to say that today there are no fields in society in which design is unnecessary, whether it be urban planning, or medical care, or education, or issues involving the environment and resources, or whatever. From that aspect, I think design is what connects all things.

The fact remains, though, that a perception such as mine still hasn't penetrated deeply into the world in general. People still tend to think of design as a special undertaking in which a designer uses various media – posters and such – to convey information applying his own unique ways of expression.

Grabbing people's attention through one's individual form of expression is important, of course. What's desirable, I think, is for there to be two kinds of design at polar opposites of each other: design visible to the eye and design that's not visible. In the old days, the former was even a necessity. In the days when there was no photographic technology, for instance, a designer had to draw pictures and make lettering on his own. He had to prepare everything himself. It's only natural, then, that what he produced would vividly reflect his individual style of expression. Nowadays, though, given the remarkable progress in technology, it's become clear that something with a social function can be created and different approaches can be made to resolve all sorts of issues, all using methods that don't derive from individual expression. Personally, I feel this is opening up new possibilities in design.

– I'd like to ask a bit more about the possibilities of design you just spoke of. "Connections" are invisible to the eye, I would think. How is it possible to design them?

Satoh: To begin, you have to change your way of thinking. I think hints lie lurking, subconsciously, in the everyday workings of our lives. There are hundreds of things that don't have to be noticed by the world at large, in other words things we do unconsciously in our daily lives, don't you agree? But skillfully planned technologies and intentions are at work even in such unconscious realms. Consider how politics works, for example. There are things few people ever think about in their everyday lives: for example, why we have two houses in the Diet. But behind this lies a function of society aiming to promote smooth democratic decision-making. Such functions can be found not only in large social systems but even, in endless quantity, in our daily lives. One example is how doorknobs are usually shaped in such a way that we know what to do, without vacillation, just by looking at them. We open doors without consciously pondering in each case, "Now how does this open?" Design is at work here, too.

Things like this have perhaps never been discussed using the word "design." But when you look at it this way, your perspective broadens. There are many cases, I think, where from a designer's standpoint, if the existing setup of something were tweaked a bit, a host of other functions should be possible. It's precisely these that are undeveloped realms, and if we see them as targets of design and get involved, then perhaps things can flow more smoothly, or a greater sense of pleasure can be born, or waste can be eliminated. I think today we're in an age when the designer's work begins by imagining what it is that society needs today.

– If the designer's perspective enters into realms that until now were thought irrelevant to design, there should be many cases where problems that were all awry would get straightened out, or processes for solving problems become clear.

Satoh: I think there's an increasing number of people, even among the public, who are actually beginning to sense that. Recently, through the media and so on we've come to often hear such terms as "communication design," "community design" and "social design," and public interest toward designing concepts as opposed to designing things has increased. There are designers who go into local communities and, through discussions with the local people, get involved in creating ways to vitalize the community or who take actions to draw out the potential of people in a region. All people have a mind for design, so I think nurturing that ability can improve people's situations little by little.

– Speaking of "nurturing," you yourself are also involved in an educational TV program, aren't you.

Satoh: Education from a young age, when our sensitivity is in greatest abundance, is important. That's something I have long believed, and it finally took shape with the program "Design Ah!" on NHK's educational channel. I hoped that the feelings children cultivated as a result of this TV program would be put to good use in work of various kinds after they become adults.

– You've mentioned how the work scope of the graphic designer is expanding, and I get the impression what's in demand nowadays is to design not just the branches, leaves and fruit, but starting from the roots.

Satoh: Nowadays designers also have to be committed to essential social issues. A lot of people have vague misgivings as to whether the path Japan is on is OK or not. Japanese society faces a stack of social problems. Especially since the earthquake disaster, many people are asking what constitutes "civilization" and what Japan's role in the world should be – and today, as designers, we have to think even about things like that. In light of the times we live in, I think designers need to assist and steer the way toward moving in the direction that people should be going. As I said at the outset, we're being called on to connect things in the same way that water makes its way between all things.

In other words, design equates to doing what it is meant to do – and if what it's meant to do is to express something, I think that's correct. On the other hand, there are also instances when what design is meant to do is to create an invisible structure or flow. Since the direction one should move in differs each time, depending on the situation one is placed in or the issue at hand, it's necessary to adopt a neutral stance that isn't shackled by one or the other.

Inherently, I think that design is a plastic, not elastic, act. Instead of always reverting to its original shape, it becomes the shape it was meant to become, depending on the situation. The perfect metaphor is water. It's visible when necessary, and invisible when unnecessary. Plus it's also something indispensable to our lives.

– In that vein of thought, there would seem to be many things that design "should" do. These past few years, quite frankly on numerous occasions we hear how sluggish the situation is surrounding not just design, but the creative arts as a whole. But if you look at this from a different angle, it means that there are worlds of possibility that remain open.

Satoh: That's right. And at its most basic level, it may come to be our job to find indicators of "wealth" not of the economic kind, and to point in new directions. When the economy turns sour, people lose their resiliency and their fears grow. But at the same time, more and more people are coming to recognize the value of time and space – things money can't buy. In a sense, I think Japan was a "richer" place during the Edo period. The country gained many different things in the course of its modernization and Westernization, but many good things were lost along the way, too.

In the face of such circumstances, we've become aware of many things in the course of pondering what a designer is possible of doing and mulling over whether we can't be involved with the world from a stance different from the one we've embraced until now. Oddly too, as time passes after starting activities of that sort, people with the same sense of awareness become acquainted with people working in other fields.

– Another important key word, I think, is "cross-discipline." Do you think that when professional designers take part in communities dealing in areas which they all along assumed were irrelevant to them, they sometimes can cause other participants to make fresh new discoveries?

Satoh: I've never given it much thought, but now that you mention it, this may be part of it. By using pictures, marks, diagrams and the like to give form to things we can't see – saying, "This is what we're trying to do, isn't it?" – it becomes easier to bind together what different people involved feel about something, or to focus on mutual intersections. In a sense graphic design creates the contours of what can't be seen, so this also plays a role in clarifying goals or points at issue.

As many people point out, Japan is a country that has always placed high value on gradation. It's a culture that leaves many different things ambiguous, in a positive sense. Perhaps because it's a culture in which things bleed together or are left with blurred distinctions, we also find organizations and projects that somehow manage to exist without any clear indicators. There are wonderful advantages in a culture that allows for flexible changes, but I think it's also necessary sometimes to indicate the contours to be shared by everyone – like with Japanese family crest designs.

– Every year the Japanese entries in the Design category at the Cannes Lions International Festival of Creativity [formerly the International Advertising Festival] are highly acclaimed, and this year they received rave reviews. And like the theme of this Talk here today, how to harness the power of design to connect society is becoming a key topic everywhere.

Satoh: Every day, graphic designers are sharpening their sensors that enable them to respond to delicate differences in paper quality and fonts, and burnishing their communication skills premised on those perceptions. Being a graphic designer is a job that demands the ability to make judgments in increments down to below 0.1 millimeter. I think this ability can invariably be applied in many different places. Inherently all human beings have sensitive sensors like that, but in today's increasingly cerebral society where priority is placed on thinking, such

powers of sensitive intuition tend to weaken.

I personally don't have any special interest in the evolution of any individual technology per se and have no desire to get directly involved, but I can imagine what kind of society could come about as a result. If communication between people, or between people and things, is growing weak as a result of the dramatic changes occurring in the technologies that are overtaking our everyday lives, then I think it's one job of the graphic designer to get involved and vitalize the ability to be sensitive to things.

That's what inspired me to plan the "Design Ah!" exhibition. I thought that since an exhibition is something you experience with your entire body, then maybe it would be possible to get visitors to the exhibition to use sensors completely different from the ones they use when watching television. Those of us on the creative side got involved with our entire bodies, like producing a live music event. By adopting a display format, not only can design be appreciated more intimately; by touching and playing with the items on display, the visitor can experience the extent to which it's an integral part of everyday life.

In that sense, the role ginza graphic gallery should play will continue to be big going forward. I have high hopes for its initiatives at curating new possibilities in graphic design and demonstrating their significance to the world.

Interview and text by Koichi Kawajiri

1

展示事業

Exhibitions

April 2 – 25, 2012
Tokyo Type Directors Club Exhibition 2012

May 8 – 30, 2012
KIGI Exhibition: Ryosuke Uehara and Yoshie Watanabe

June 5 – 28, 2012
Jianping He Flashback

July 4 – 28, 2012
2012 Tokyo Art Directors Club Exhibition

August 2 – 28, 2012
THE POSTERS 1983–2012
–The Prize-Winning Works from The International Poster Triennial in Toyama–

September 3 – 29, 2012
Bunpei Yorifuji's Summer Homework Project

October 4 – 27, 2012
AGI (Alliance Graphique Internationale) Exhibition

November 1 – 27, 2012
Tadanori Yokoo The First Book Design Exhibition

December 3 – 25, 2012
Theseus Chan: WERK No.20 GINZA THE EXTREMITIES OF THE PRINTED MATTER

January 9 – 31, 2013
Shin Matsunaga Poster 100 Exhibition

February 6 – 28, 2013
Kari Piippo Posters & Drawings –Simple, Strong and Sharp–

March 6 – 30, 2013
DNP Graphic Design Archives Collection V
LIFE – Kazumasa Nagai Poster Exhibition

AGI
Alliance Graphique Internationale 国際グラフィック連盟
AGI展
AGI
Alliance Graphique Internationale 国際グラフィック連盟
AGI展
AGI展
2012年10月4日(木) - 10月27日(土)

Tokyo Type Directors Club Exhibition 2012

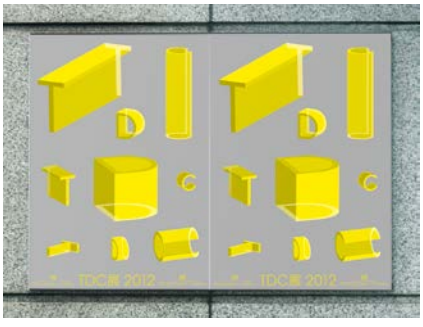
April 2 – 25, 2012

TDC展 2012

東京TDC賞は9つのカテゴリーがあるが、部門ごとに審査の後、最終審査では勝ち残った作品が部門を超えて同空間に並び、賞が決定される。この年はタイプデザイン4作品が受賞する快挙となった。いっぽう新旧異なるメディアのそれぞれの特性を極めデザインされた作品もフォーカスされ、振り幅の大きな展示内容となった。話題の中心は何といってもグランプリ「Comedy Carpet」。英国ブラックプールに設置された石を素材とするパブリックなタイポグラフィ作品で、コメディの歴史の調査と懐かしい時代の書体の研究・復刻からスタートした。5年の年月をかけた壮大なプロジェクトの制作過程も紹介され、多くの来場者の関心を集めた。

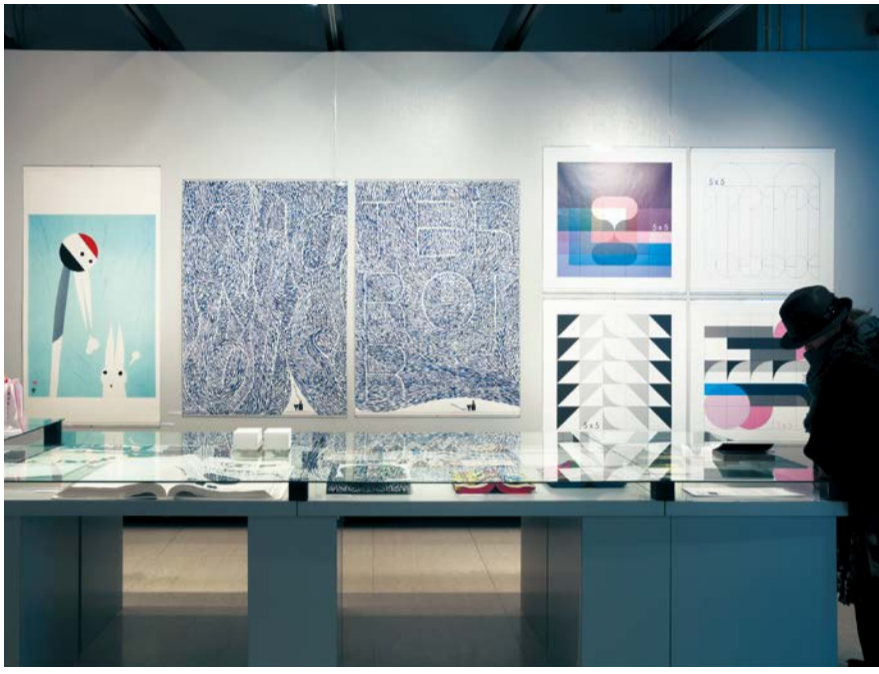
東京TDC 照沼太佳子

TDC annually awards prizes in nine categories. After judging has taken place for each category, the selected works are then subjected to a final round in which they are all lined up together, transcending category boundaries, and the prizes are decided. Remarkably, four works of type design won prizes this year. The exhibition also brought into focus works whose designs optimally reflected the characteristics of their respective medium, both the old and the new, making for a highly diversified exhibition. The five-year production process of the Grand Prix winner, "Comedy Carpet," a public work of typography made from stone, was also introduced at the show, attracting the interest of many visitors.　Takako Terunuma, Tokyo TDC



I BOUGHT A GREYHOUND ABOU
A FRIEND OF MINE SAID, "WHAT A
I SAID, "I'M G
HE SAID,
HE WASN'T HALF MA

TDC展
2012
TDC展
2012



PAUL KLEE
力

KIGI Exhibition: Ryosuke Uehara and Yoshie Watanabe

May 8 – 30, 2012

キギ展 植原亮輔と渡邉良重

長く勤めていたドラフトを退職し、キギを設立した4ヶ月後に展覧会を開催することになりました。
設立してすぐ、やるべきことは仕事をつくることですが、展覧会が近づくと、段々展示作業の比重が大きくなり、またいろんな心配事も増え、しかし、やるべきことは雪崩のようにやってきて……という状況下で開催した展覧会でした。
私たちが一緒に仕事を始めた1999年～2012年4月までのグラフィック、プロダクト、一部のプライベートワークを展示しました。最終日が近づくにつれ、もう少し展示していたいという思いが段々強くなり、私たちも会場によく足を運ぶようになりました。
キギという会社をご紹介できたこと、期間中沢山の方々にお越しいただいたことをとても嬉しく思っています。そして、展示に協力していただいた多くの方々に厚く感謝いたします。

キギ（植原亮輔・渡邉良重）

This exhibition came about only four months after we established KIGI after leaving DRAFT, where we had both worked for a long time. Having just set up our new company, we should have been creating works; but as the exhibition date drew near, gradually we gave increasing weight to preparing what we would show. Worries of various sorts piled up, but the list of things we had to attend to just kept building, like an avalanche about to hit us. That was our situation when the exhibition got under way.
We showed graphics, products and some private works we had created between 1999, when we started working together, and April 2012. As the last day of the exhibition approached, the desire to show a little bit more gradually built up within us, and we found ourselves going to the gallery quite frequently.
We are happy to have had the opportunity to introduce our company, and to have had so many visitors come during the exhibition's run. We wish to express our deep appreciation to the many people whose cooperation made our exhibition possible.

KIGI (Ryosuke Uehara + Yoshie Watanabe)

12
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11

12
6

JUNE
JULY
AUGUST
SEPTEMBER
NOVEMBER

ギンザ・グラフィック・ギャラリー第309回企画展

Jianping He Flashback

June 5 – 28, 2012

ジヤンピン・へ　フラッシュバック

私はホテルのロビーの巨大な窓から、東京タワーを眺めていた。夜はまだ更けてないのに、色とりどりの灯りが輝いている。車のランプが瞬時に二重の弧を描く。私が暮らす街とはだいぶ違う。ここに身を置くと、自分も早足で歩かねばならないような気がする。

展覧会を終えて、私はプロフェッショナルに対する畏敬の念を強くした。芳名帳にはよく知る同業者の名前が並んでおり、デザインに対する一途さが、同業者への関心となって表れているのを感じた。さらに言うなら、今後も自然にあふれ出る個性の表現を守り、グローバル化によって個別の違いがなくなりつつあるメインストリーム・カルチャーとは、少し違う所にいたい。　　ジヤンピン・へ

I stand in front of the huge glass window in the lobby of the hotel, gazing at Tokyo Tower from afar. The night is still young, but the lights are already twinkling, and the cars draw pairs of arcs with their headlights... All these things are so different from the city where I live.

This exhibition allowed me to experience and appreciate what professionalism really is. The familiar names of my peers and other artists written in the guest book reminded me of their sincere attitude towards design, shown here in their attention to the works of their peers. I would like to add that I wish to preserve my natural and individual personality in future works and distinguish myself from the mainstream culture of globalization.　　Jianping He

AGI
NEW VOICE

ONE BY ONE

AMNESTY

2012 Tokyo Art Directors Club Exhibition

July 4 – 28, 2012

2012 ADC展

2012年のADCは、震災から1年が経ち、実質的に震災以後の作品が応募されました。震災の影響を感じる作品もあり、元どおりの現実に戻ろうとするものもある中で、ADCグランプリには、本田技研工業の「負けるもんか」のポスターとTVCMが選ばれました。企業のメッセージでありながら、人々の心を鼓舞する力を感じさせる表現が、高く評価されました。僅差だったトヨタの「ReBORN」キャンペーンも、震災後のこの国に勇気を与える作品でした。人の幸福を設計する。それが私たちアートディレクターの仕事だとすれば、震災後の日本がどう復興していくのかに、ADCは大きく関わっています。リセットの時機を迎えたこの国にとって、われわれADCの役割がますます重要になるのではないでしょうか。

ADC展委員 副田高行

In 2012 the Tokyo Art Directors Club (ADC) attracted entries mostly created during the year following the Great East Japan Earthquake of March 2011. Some works were clearly influenced by the disaster while others attempted to return to pre-disaster realities, and the ADC Grand Prize was awarded to Honda Motor for its posters and TV commercials titled “We’ll never give in to defeat.” The winning works were highly acclaimed by the judges for their motivating and inspirational power even as they concurrently conveyed the automaker’s corporate message. A close runner-up was Toyota’s “ReBORN” ad campaign, a body of works that similarly inspired courage in the nation in the wake of the tragedy. If our job as art directors is to design people’s happiness, then the ADC is deeply involved in how Japan recovers from the disaster. At this time when Japan must “reset” and move forward, our role at ADC will surely become all the more important in the years ahead.

Takayuki Soeda, ADC Committee Member

JOMONESE

LIVING THINGS
TSUGUYA

ADC
ADC

ADC

THE POSTERS 1983–2012 –The Prize-Winning Works from The International Poster Triennial in Toyama–

August 2 – 28, 2012

THE POSTERS 1983 – 2012 世界ポスタートリエンナーレトヤマ受賞作品展

富山県立近代美術館が開催する日本で唯一の本格的なポスターコンテストとして知られる世界ポスタートリエンナーレトヤマ（IPT）。1985年から3年毎に開催し、昨夏、10回目を迎えた。本企画展はこれを記念し、グランプリ、金賞をはじめとする歴代の受賞作品を展示した。また、各回の審査の様子などを収録した映像も流し、IPT30年間の足跡を辿った。文化、社会、経済の状況が自ずと見えてくるのがポスターであるが、時代を超えて伝わるメッセージとともに、デザイナーの表現力を再認識できた。IPTの変遷をダイジェストで紹介する機会を与えていただいたDNP文化振興財団、監修の永井一正先生はじめ関係各位のご尽力に心より感謝いたします。

富山県立近代美術館 副館長　片岸昭二

The International Poster Triennial in Toyama (IPT), organized by The Museum of Modern Art, Toyama, is the only full-fledged poster competition held in Japan. The event, which has taken place every three years since 1985, marked its 10th occurrence in summer 2012; and to commemorate that milestone this exhibition was held to showcase the Grand Prix and other award-winning posters since the competition was launched. The IPT's 30-year history was also traced through video presentations recording the various judging sessions from the past. Posters invariably reflect the cultural, social and economic situations of their times, and in this respect the exhibition conveyed messages from earlier days while also enabling visitors to reaffirm the power of artistic expression manifested by poster designers. I wish to express our sincere appreciation to the DNP Foundation for Cultural Promotion for giving us this opportunity to present this overview of the IPT's history, to Kazumasa Nagai for his supervision of the event, and to everyone who contributed to bringing this show to fruition.

Shoji Katagishi, Vice Director
The Museum of Modern Art, Toyama

THE POSTERS 1983-2012
世界ポスタートリエンナーレトヤマ受賞作品展
2012.8.2(木)▶8/28(火)

PEACE
DEPARTURE

PEACE

Apartheid
Racisme

Bunpei Yorifuji's Summer Homework Project

September 3 – 29, 2012

寄藤文平の夏の一研究

1Fは、これまで興味のあった表現方法を試した。
また同時期に開発した紙、「ブンペル」を展示した。
B1Fは、装丁のプロセスで考えている内容をプロトタイプと共に解説した。
黒板とチョークを使い、画材には少し派手な学習発表会のような雰囲気をめざした。
自分としては、制作過程の中に得るものが多かった。
展示が完成したのは、開始から1週間後であったし、いろいろと勉強不足がたたったが、見た人が存外におもしろかったと言ってくださっているのを聞き、安心した。
やってよかった。

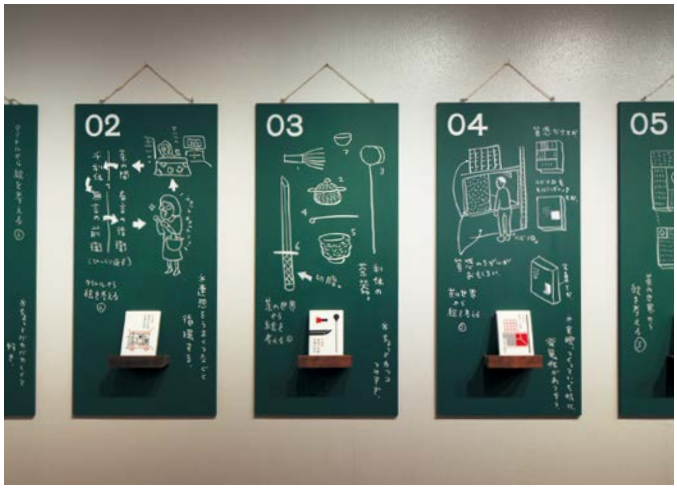
寄藤文平

On the ground floor of the gallery I attempted methods of expression I've previously been interested in. I also showed "Bunpel," a paper I developed around the same time. In the basement level I explained the content of my thought processes behind book design, together with prototypes. Using blackboards and chalks, for my subject matter I aimed for the atmosphere of a slightly overblown classroom presentation. Personally, I learned a lot from the production process. The displays were finalized a week after the start and some things weren't up to snuff; but people who saw them said, to my amazement, that it was quite interesting, which put my mind at rest. I'm glad I did it.

Bunpei Yorifuji

2012年
9月3日(月)
〜
29日(土)
ギンザ・グラフィック・ギャラリー
オミニ回企画展
寄藤文平の
百文の一研究

12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
VOTE
01
02
03
04
05


02
03
04
05

16
17
18
19

AGI (Alliance Graphique Internationale) Exhibition

October 4 – 27, 2012

AGI展

AGI国際デザイン会議は、毎年どこかの都市で開催されていて50年以上も続いている。原研哉さんがバルセロナで呟いた。「年一回どこかの都市でデザインについて語るのはいいことだ」。アジアでは東京で2回、北京で1回、そして6年ぶりに香港。テーマは「天国と地獄」だった。講演もアジア勢が多かった。開会式は超高層ビルの最上階で夜景を楽しんだ。閉会式は竹製の特別な小屋を公園に作った。正に天国と地獄を体験できた。そして10月にはgggにてAGI展が開催された。現在日本会員は29名。少しずつ増えてきた。2013年は成功裡に終わったオリンピックを受けてロンドンで開催される。
さあ、みんな揃ってロンドンAGI、デザインの旅に出発だ。　　AGI日本代表　浅葉克己

For more than half a century, AGI Congresses have taken place every year in some city around the world. In Asia, congresses have been held in Tokyo twice, in Beijing once and, in 2012, it was Hong Kong. The theme of the Hong Kong event was “Heaven & Hell.” Most of the speakers were from Asia. The opening ceremony took place atop a skyscraper, offering us spectacular views of Hong Kong’s night-scape. Last October, ggg mounted an “AGI Exhibition” for the first time in a long while. The number of AGI members from Japan has been gradually increasing and now stands at 29. Now, let’s set off on a design journey together to the AGI Congress London.

Katsumi Asaba, AGI Japan Representative

ARLES
PHOTOGRAPHIE
UNE ECOLE FRANÇAISE

Karl Prippo Kyösti Varis Jukka Veistola FRANCE
Pierre Bernard Michel Bouvet
Alain Le Quernec Anette Lenz
Frédéric Teschner Jean Widmer
Helmut Brade Helmut Feliks Büttner
Daniela Haufe Jianping He
Justus Oehler Nicolaus Ott Volker Pfüller
Niels Schrader Bernard Stein Andreas Uebele
HUNGARY István Orosz IRAN Majid Abbasi
Dan Reisinger David Tartakover Yarom Vardimon ITALY
Keiko Hirano Takenobu Igarashi Kaoru Kasai
Kazufumi Nagai Keisuke Nagatomo Hideki Nakajima
Taku Satoh Yasuhiro Sawada Shinnoske Sugisaki
Alejandro Magallanes Gabriela Rodriguez
Dick Bruna Alvin Chan Wim Crouwel
Jacques Koeweiden R.D.E. Oxenaar
Bob van Dijk Jan Van Toorn Hans Wolbers
Bruno Oldani Sarah Rosenbaum POLAND
Jorge Silva António Silveira Gomes RUSSIA
Isidro Ferrer Eduardo Manso Javier Mariscal
Dan Jonsson Björn Kusoffsky Gábor Palotai
Polly Bertram Erich Brechbühl Mayo Bucher
Fritz Gottschalk Ernst Hiestand Ursula Hiestand
Peter Meyert Peter Moser Lars Müller
Edgar Reinhard Jean Robert Rosmarie Tissi
Sadik Karamustafa Mehmet Ali Türkmen UK
Stephen Coates Jeanette Collins Paul Davis

Carlos

Tadanori Yokoo The First Book Design Exhibition

November 1 – 27, 2012

横尾忠則 初のブックデザイン展

本の装幀は副業ぐらいに考えていたがこうして展覧会場に50年以上にわたる全800点の作品を一堂に展示すると、自分自身に迫ってくる仕事の量に圧倒されてしまった。これじゃ副業とはいえない。
ぼくは装幀の仕事は副業といいたくなる程度に事を軽くみていたようだ。80年代に入ってグラフィックから絵画に転向してからはこの副業は本当の副業になった。装幀の依頼のほとんどは著者からのもので、出版社からの依頼は全体の中ではほんのわずかだ。もし著者からの依頼がなければ、多分100冊もない仕事の分量で正に副業といえよう。

横尾忠則（美術家）

I used to think of book design only as a sideline undertaking, but when I displayed my 800 works in this sphere spanning more than 50 years, I myself was overwhelmed by the sheer volume of my work. I could hardly call it a sideline.
I appear to have thought lightly of my book design work, long considering it nothing more than something I do on the side. In the 1980s, when I shifted from graphics to painting, it truly did become a sideline.
Nearly all requests for me to design books came from their authors; commissions from publishers number relatively few. Had I not received requests from authors, in total my book designs would likely not reach 100 – in which case I could say in truth it was a sideline endeavor.

Tadanori Yokoo, Artist

KAAAA
KWRT.

TADANORI YOKOO

TADANO
THE FIRST
横尾忠則
2012年11

TADANORI YOKOO
TADANORI YOKOO

Theseus Chan: WERK No.20 GINZA
THE EXTREMITIES OF THE PRINTED MATTER

December 3 – 25, 2012

テセウス・チャン：ヴェルク No.20 銀座 THE EXTREMITIES OF THE PRINTED MATTER

先日、私は個展の様子を記録した写真を見返していました。そのときになって、ようやくわかってきたのです。自分がグラフィックデザインの聖地、gggにたどり着いたのだということに。

田名網敬一、永井一正、浅葉克己、井上嗣也の各氏ら、日本を代表するデザインの巨匠たちに認められたことは、自分の心にしたがって旅を続ける力となりました。しかし、これは孤独な旅ではありません……私を励まし、妥協することなく完璧を追求するその姿によって私を導いてくれる田名網敬一氏には、感謝してもしきれません。

私が今、ここに立っていられるのは、今回協力いただいたASHUやZEALの方々、そしてWORKの仲間たちのおかげです。何をおいても感謝したいのは、gggのスタッフです。彼らなしでは、すべては空想でしかありませんでした。　　テセウス・チャン

Just the other day, I was examining the photographs documenting the exhibition. And it finally dawned upon me that I have arrived at graphic design's holy ground called ggg.

With acknowledgements by Japanese design masters like Keiichi Tanaami, Kazumasa Nagai, Katsumi Asaba, Tsuguya Inoue, I have renewed energy of continuing my journey to my own heartbeat. But I cannot be alone in this journey... I am infinitely grateful to Keiichi Tanaami for his encouragements and leading the way through his example of relentless pursue of perfection.

I would like to share this stage with Taka & Daisuke Nakanishi of ASHU, Narumi of ZEAL and my colleagues at WORK.

Very importantly I want to thank the staff of ggg, without which this would only be a fantasy.

Theseus Chan

THESEUS CHAN
WERK No.20
GINZA
THE 316th GINZA GRAPHIC GALLERY EXHIBITION
ギンザ・グラフィック・ギャラリー第316回企画展
ginza graphic gallery
THE EXTREMITIES OF THE PRINTED MATTER

Shin Matsunaga Poster 100 Exhibition

January 9 – 31, 2013

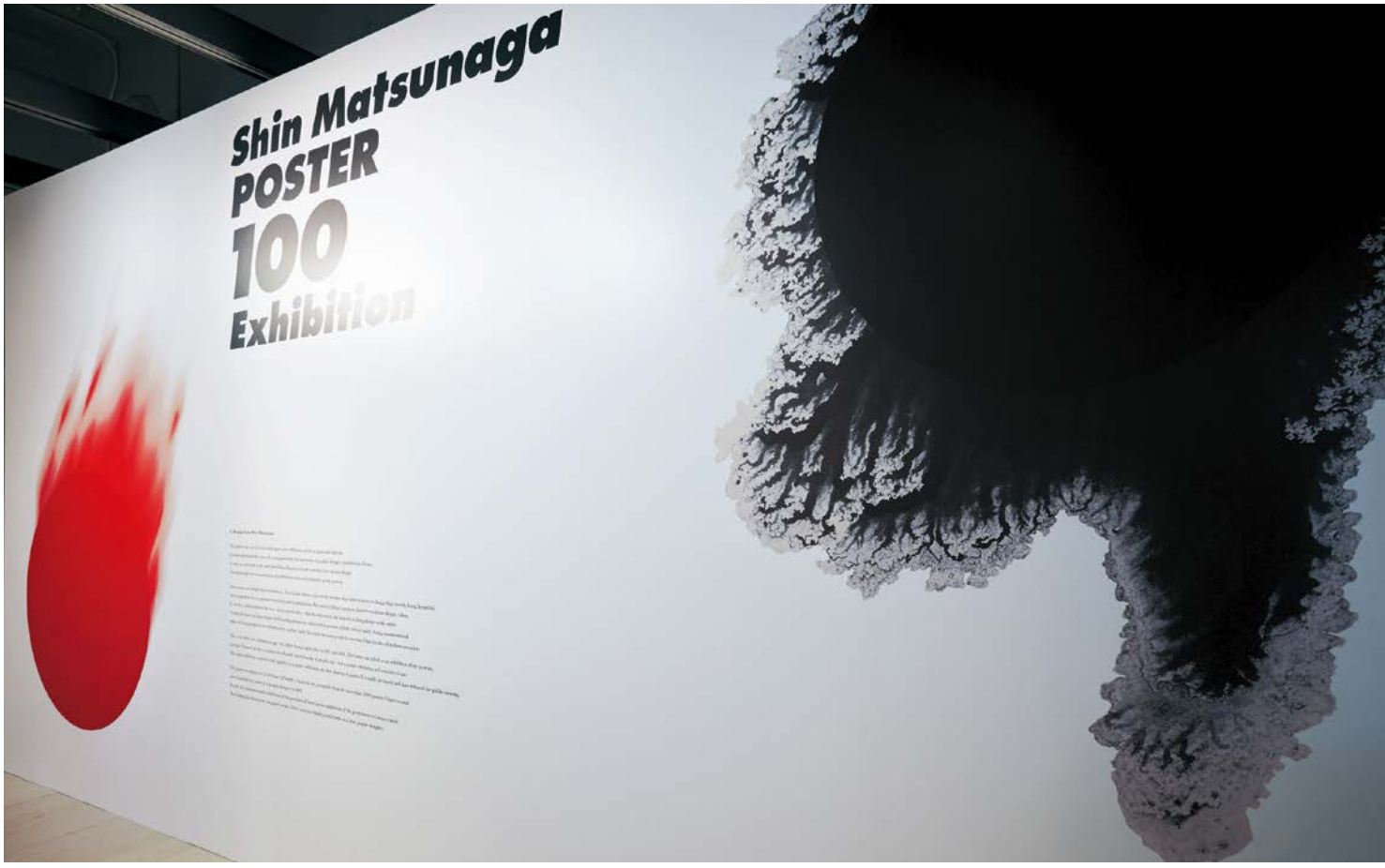
松永真ポスター 100展

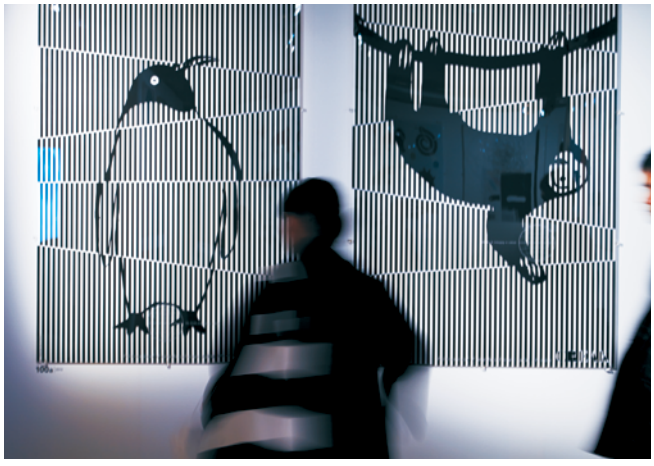
私は国内外で数多くの個展を経験してきた。しかし、「生活全てがデザインである」という信条も手伝い、内容はいずれもグラフィックデザイン縦断形が多く、ポスターだけの個展は意外に少なかった。それは、デザインが社会や生活者に対して持たねばならない合目的性という意味において、ただ美しいだけではまだデザインではないというアンチテーゼもあった。しかし、ただ目的が通じればデザインというわけでもない。そのせめぎ合いの中にこそデザインの楽しみや苦しみがある。gggでの個展は3度目だが、今回初めて、私がこれまでに制作し、実際に使用された1,000点あまりのポスターの中から、100種類(127点)のポスターを自選し、自分史としても有意義な展覧会となった。合わせてエッセイ集『ggg Books 別冊-9 松永真』も出版され、とても充実した節目となった。

松永 真

I've held numerous solo exhibitions both in Japan and overseas, and partly owing to my creed that everything in our lives involves design, the content of my previous exhibitions has tended to be a traversal of all graphic design's various modes. Surprisingly few have focused exclusively on my posters. That's because I have always believed that being beautiful alone doesn't qualify as being design, in the sense that design must suit a purpose for people or for society. At the same time, though, just serving a purpose doesn't qualify as being design either. It's in the conflict between the two that the fun and pain of design exist. This was my third solo exhibition at ggg, and for the first time I personally selected 100 types of poster (127 items) from among the more than 1,000 I have created and that have actually been used up until now. In this sense, the exhibition had significance as a record of my personal history. A volume on my works was also published in the ggg Books series (Special Edition Vol. 9), making this event a highly satisfying milestone for me.

Shin Matsunaga


Shin Matsunaga
POSTER
100
Exhibition



Shin Matsunaga
POSTER
100
Exhibition
「松永真ポスター一〇〇展」

333
Shin Matsunaga
POSTER
100
Exhibition
2013年1月9日(水)—1月31日(木)
ギンザ・グラフィック・ギャラリー 第三七回企画展
「松永真ポスター一〇〇展」

Kari Piippo Posters & Drawings −Simple, Strong and Sharp−

February 6 − 28, 2013

カリ・ピッポ　ポスターとドローイング　シンプル・ストロング・シャープ

フィンランドに、「十分に練られた計画は、すでに半分成功しているようなものだ」という格言があります。これは、日本の文化にも通じるのではないでしょうか。緻密な計画、正確な行動、細部への情熱 ── gggとの仕事を思い返すと、そんな言葉が浮かんできます。設営はたちまちのうちに完了しました。彼らが、最高の仕事をする能力とそのための意思を兼ね備えたプロフェッショナルであることは、すぐにわかりました。トーク、オープニング、友人たちとのディナーはどれも和やかな雰囲気の中で進み、記憶に残る初日を過ごすことができました。

デザイナーにとって、gggに招かれることは大変な名誉であり、大きな喜びです。私の夢はかないました。本当にありがとう！　　カリ・ピッポ

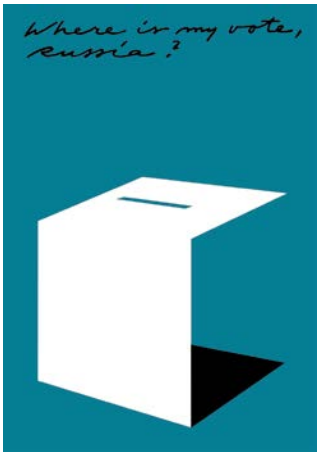
Finnish proverb says "well planned is half done." I believe that this same principle is familiar also in Japanese culture.

Careful planning well in advance, precise action, and passion for the very smallest details characterized the work of the ginza graphic gallery. The construction of the exhibition in the gallery proceeded quickly. It was easy to see that I was dealing with professionals who were able and willing to do their very best.

The warm atmosphere during the lecture, opening ceremony and dinner with friends and colleagues made the opening day unforgettable.

Invitation to the ginza graphic gallery and the ggg Books is a great honor and joy for a graphic designer. My dream has come true. Thank you very much!　　Kari Piippo

Plakate
Kari Piippo, Finnland
Ostholstein-Museum
Schlossplatz 1
23701 Eutin
20.7–14.9.2008
Di–So 10–13/14–17
Do bis 19


where is my vote, russia?

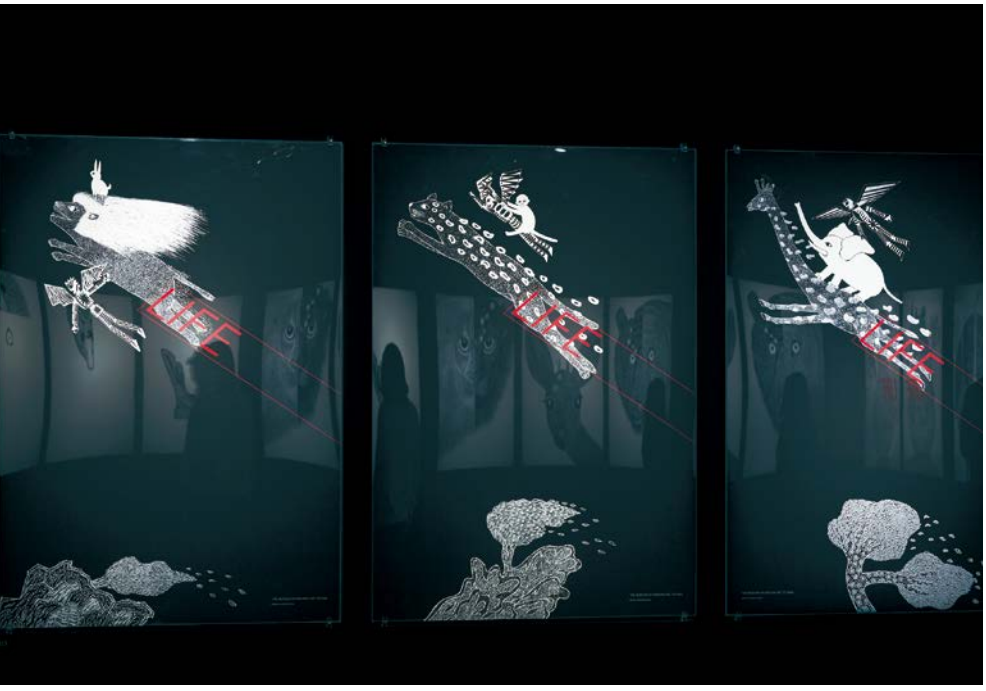
MARIANA PINEDA

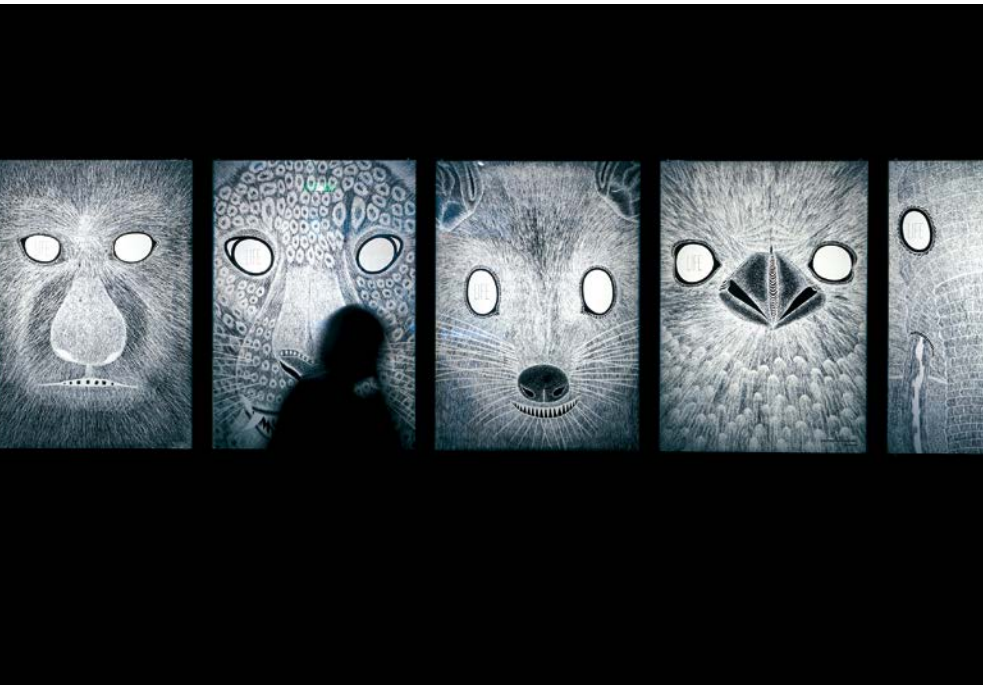
MENETETTY MAINE
KAUPPAMATKUSTAJAN KUOKEMA

DNP Graphic Design Archives Collection V
LIFE – Kazumasa Nagai Poster Exhibition

March 6 – 30, 2013

DNP グラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展 V　LIFE 永井一正ポスター展



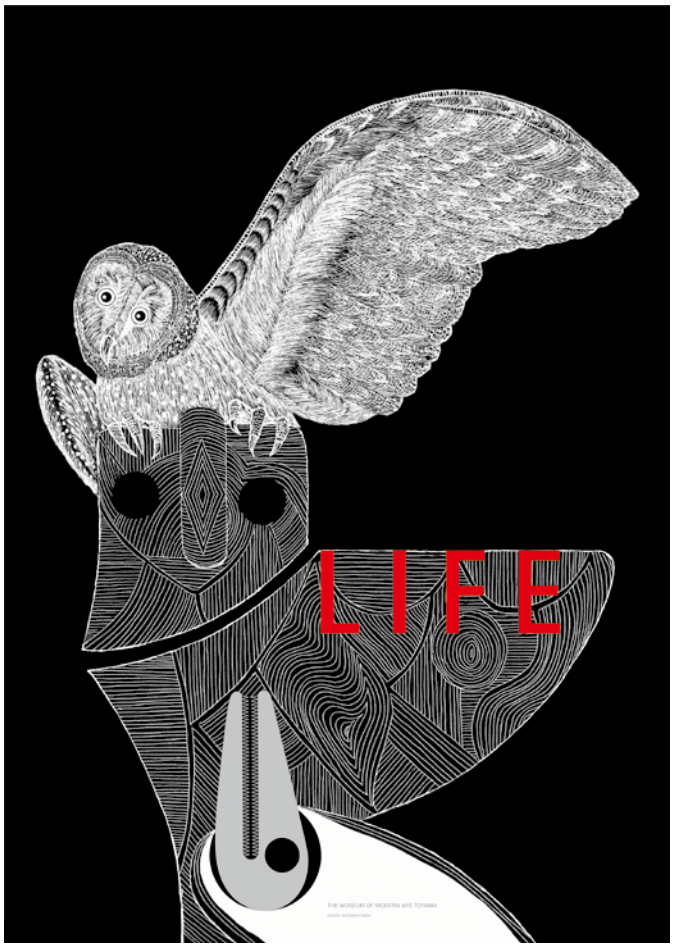


永井一正氏はデザインが果たす使命への確とした信念にもとづいて、国内外から熱いまなざしを注がれる清新な表現世界を半世紀余にわたって究めてきた。その永井氏が1980年代後半から、意欲的に取り組んでいるのが手描きによる「LIFE」を中心とするポスターシリーズ。動植物をモチーフに命の根源を見据える自然讃歌は、地球環境との共生という世界共通の課題への真率なメッセージを内包している。本展は精選した139点によってシリーズを初めて一望。揺るぎないコンセプトと、現役最長年となってなお、絶えざる自己更新を課すみずみずしい創造力があらためて浮き彫りに。3.11.大震災を経てさらに深い時代性を帯びる作品群は、春の息吹薫る会期に訪れた人たちを魅了してやまなかった。

デザインジャーナリスト　臼田捷治

For more than half a century Kazumasa Nagai has, under the eager gaze of admirers both in Japan and abroad, plumbed the very depths of the realm of fresh creative expression based on his staunch belief in the mission that design was meant to fulfill. Beginning in the late 1980s Mr. Nagai began actively concentrating his attention on posters, particularly his hand-drawn “LIFE” series. As paeans to Nature focused on the underlying sources of life, using animals and plants as his motifs, Mr. Nagai’s posters contain frank messages about the globally shared issue of our coexistence with the Earth’s environment. This exhibition, featuring a selection of 139 posters, offered the very first broad overview of Mr. Nagai’s “LIFE” series. It brought into sharp relief this designer’s unwavering concept as well as the fresh creative power that enables Mr. Nagai to continuously reinvent himself even in his position as the longest active graphic designer in Japan today. His works, which are imbued with even greater contemporaneous relativity since the multiple disasters of March 2011, enthralled the many visitors who came to the gallery during the fragrant breath of spring.

Shoji Usuda, Design Journalist


LIFE

LIFE

LIFE
LIFE

LIFE
LIFE

ddd gallery 12-13

January 18 – March 2, 2013
GRAPHIC WEST 5
type trip to Osaka typographics ti: 270

March 21 – May 11, 2012
DNP Graphic Design Archives Collection IV
The 10th Memorial to Ikko Tanaka: Ikko Tanaka Posters 1980–2002

May 22 – July 6, 2012
Tokyo Type Directors Club Exhibition 2012

July 17 – September 5, 2012
Fumio Tachibana Exhibition

September 13 – October 26, 2012
2012 Tokyo Art Directors Club Exhibition

November 6 – December 21, 2012
THE POSTERS 1983–2012
–The Prize-Winning Works from The International Poster Triennial in Toyama–

ddd gallery 190th exhibition
GRAPHIC WEST 5
type trip to Osaka
typographics ti: 270
2013.1.18 Fri — 3.2 Sat
Talk Event
InterView
01 02 03 04 05 06 07
Singapore Hong Kong Bangkok Seoul Shenzhen Taipei Beijing
Chris Lee
Asylum
1.18 Fri
16:00–17:30
Javin Mo
Milkxhake
1.26 Sat
16:00–17:30
Santi Lawrachawee
Practical Design Studio
2.2 Sat
16:00–17:30
Sulki & Min
2.8 Fri
18:30–20:00
Hei Yiyang
SenseTeam
2.16 Sat
16:00–17:30
Aaron Nieh
Aaron Nieh Workshop
2.23 Sat
16:00–17:30
Xiao Mage & Cheng Zi
3.2 Sat
16:00–17:30

GRAPHIC WEST 5
type trip to Osaka typographics ti: 270

January 18 – March 2, 2013

GRAPHIC WEST 5 type trip to Osaka typographics ti: 270

日本タイポグラフィ協会発行の広報誌『typographics ti:』が、2年間8号にわたって特集してきた、アジアのグラフィックデザインの今を探る旅“タイプトリップ”。その旅の最終目的地・大阪に、アジア7都市から7組のデザイナーを迎え、それぞれの街の状況を表す展示と“インタビュー”トークを行った。

誌面をdddギャラリーに立体的に展開するという試みだったが、アジア各都市のデザイナーの活動はもちろん、それぞれの置かれた状況や考えを、経験として共有することができた。

本展でうまれたつながりは、香港での巡回展や、ソウルでの国際タイポグラフィ展「タイポジャンチ」などに、着実に拡がってきている。

typographics ti:編集長　後藤哲也

Over a span of two years, eight issues of “typographics ti:,” the public relations magazine published by the Japan Typography Association, carried a special feature titled “Type Trip” introducing current trends in Asian graphic design. The final destination of the “trip” was Osaka, and it was here that seven designers or design groups from seven Asian cities gathered for an exhibition portraying their respective cities, accompanied by a series of talk events called “InterView.” At ddd gallery an innovative three-dimensional format was adopted to display the magazine articles, and the event enabled us to share in knowledge not only about the activities of designers in each city, but also about their respective situations and philosophies. The ties born through this exhibition have subsequently been spreading steadily: traveling to Hong Kong, for example, and then to “TYPOJANCHI,” the International Typography Biennale in Seoul.

Tetsuya Goto, Editor of “typographics ti:”

No flammable goods
No durians
Fine $5000

Chris Lee / Singapore

设计与生活之间发生的故事/你的剧情是什么
Stories between design and life / what's your view
SHENZHEN
OSAKA

Hei Yiyang / She

OSN

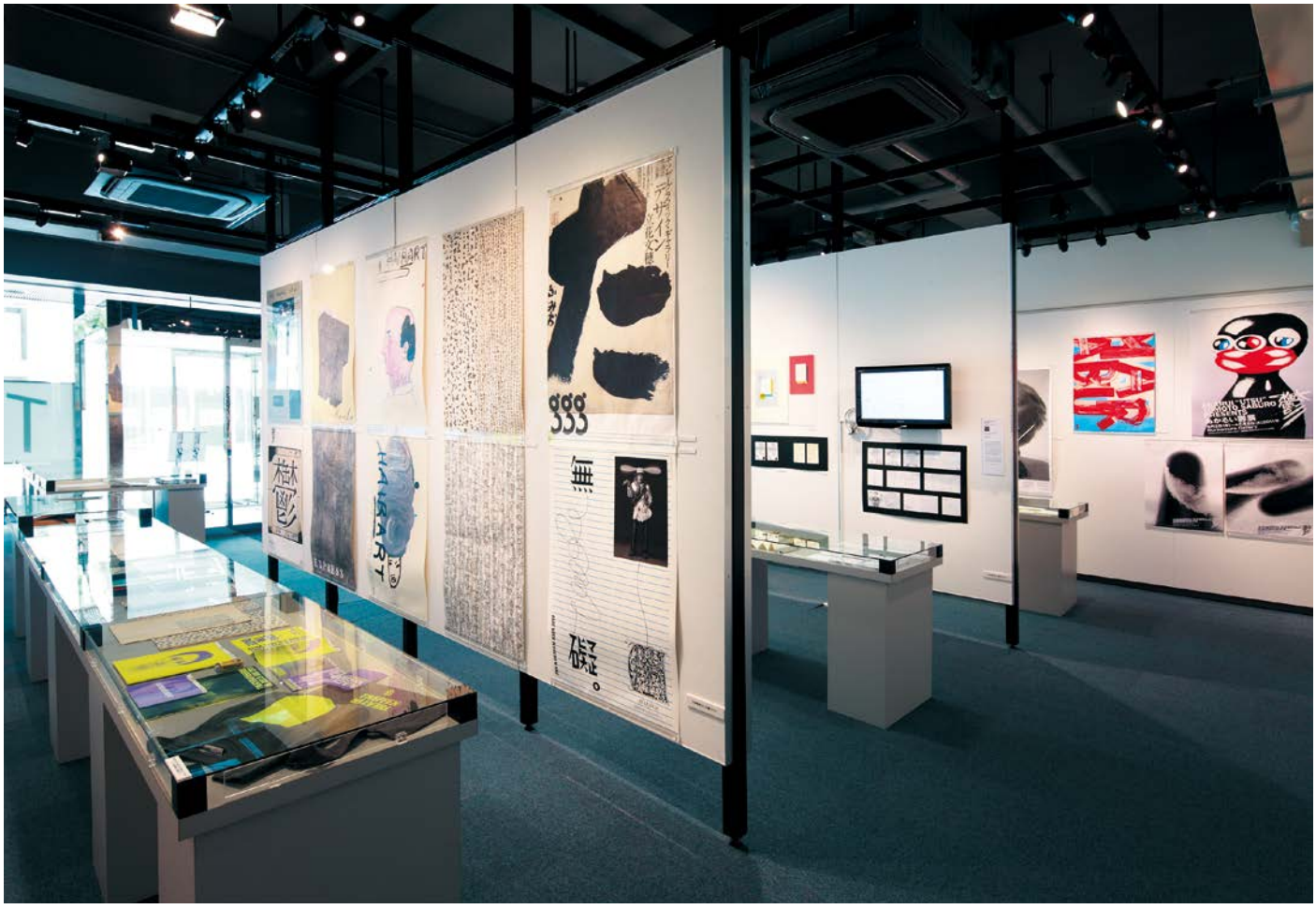
DNP Graphic Design Archives Collection IV
The 10th Memorial to Ikko Tanaka: Ikko Tanaka Posters 1980–2002

March 21 – May 11, 2012

DNP グラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展 IV　没後10周年記念企画：田中一光ポスター 1980–2002

Tokyo Type Directors Club Exhibition 2012

May 22 – July 6, 2012



Fumio Tachibana Exhibition

July 17 – September 5, 2012

立花文穂展

これまでずっと「本」の可能性を探ることを主軸にやってきた。前年のgggでは、「印刷物と紙」を主題に展示をしたが、この展示では、「本」に焦点をあてた。印刷物に限らずコラージュによる日記だったりタブローだったり立体やインスタレーションだったりムービーだったりと、さまざまなメディアによる「本」で会場を埋めた。単に、デザインという切り口ではなく「本」そのものの意味や意義を思考してきた成果を並べた。考えを記述したテキストやインタビュー記事などをそれぞれの作品に添えてより理解を深めてもらうことに努めた。紙々でできた森や山を迷いさまようような体験をしてもらえる空間ができていたならば嬉しい。

立花文穂

Throughout my career I have always concentrated on probing the possibilities of books. In 2011, at ggg I focused my exhibition on publications and paper, but for this show my focus was books. I filled the exhibition space not only with publications but with “books” fashioned from an array of media: a diary constructed from collages, tableaux, three-dimensional works, installations, movies, etc. I lined up “books” not merely from the perspective of design, but as the result of my thoughts on the meaning and significance of “books” themselves. I tried to win deeper understanding by accompanying my works with text or interview articles recording my thoughts about them. What I hope is that I succeeded in creating a space where visitors could experience what it would be like to wander lost in a forest or mountain made of paper.

Fumio Tachibana

FUMIO TACHIBANA
7.17-9.5

2012 Tokyo Art Directors Club Exhibition

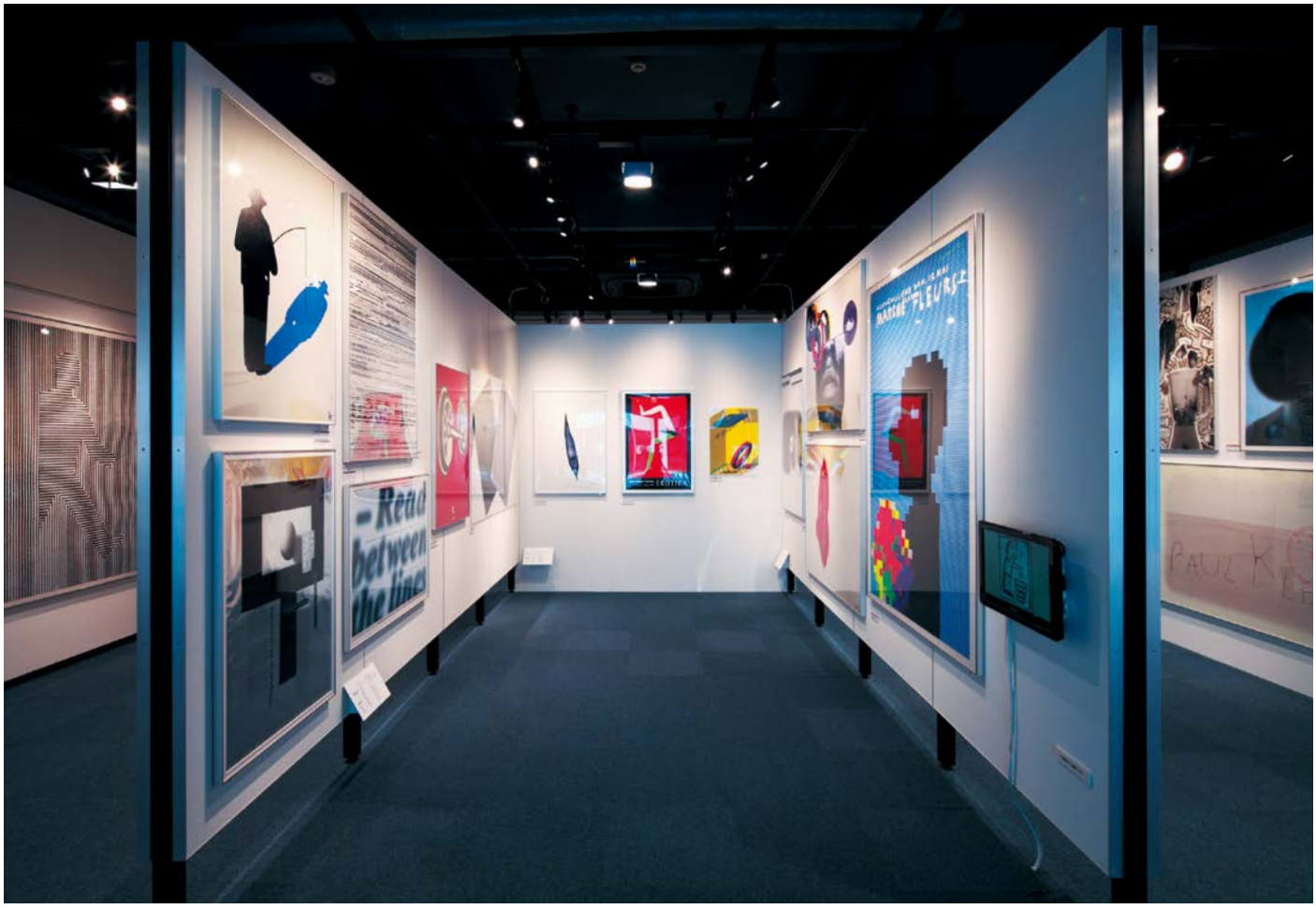
September 13 – October 26, 2012

2012 ADC展

THE POSTERS 1983–2012 –The Prize-Winning Works from The International Poster Triennial in Toyama–

November 6 – December 21, 2012

THE POSTERS 1983 – 2012 世界ポスタートリエンナーレトヤマ受賞作品展



March 1 – June 3, 2012

The Artists Who Express through Prints: after 3.11

June 9 – September 9, 2012

DNP Graphic Design Archives Collection IV
The 10th Memorial to Ikko Tanaka: Ikko Tanaka Posters 1980–2002

September 15 – December 2, 2012

The Expressive Appeal of Copperplate Prints:
24th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection

February 10 – 16, 2013

The 24th Denzen Print Award Exhibition

CCGA

The Artists Who Express through Prints: after 3.11

March 1 – June 3, 2012

日本ポルトガル交流　版で発信する作家たち：after 3.11

本展は、2002年から10年間にわたって毎年「版で発信する作家たち」展を組織してきた福島県の版画家たちと、2006年から彼らと交流を続けてきたポルトガルの版画家たちによるグループ展である。2011年3月11日に発生した東日本大震災とそれに続く福島第一原発の事故は、私たち現代人に社会や文明のあるべき姿を再考させるきっかけになり、同時に、福島に生きる版画家たちにとっても、自らの創作活動の意味や目的の問い直しを迫られる出来事だった。福島の復興支援を願って開催された本展には、震災後に制作された新作も含まれ、困難な状況の中でも版と向き合い続けてきた作家たちの姿を展覧した。

This was a group exhibition featuring prints by artists from Fukushima Prefecture, who have held a print show annually since 2002, and print artists from Portugal, with whom the Fukushima artists have engaged in close exchanges since 2006. The Great East Japan Earthquake of March 11, 2011 and the subsequent accident at the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant have made those of us alive today rethink what forms our society and civilization should take. At the same time, these recent events have also made print artists who live in Fukushima question anew the meaning and purpose of their creative activities. This exhibition, which was organized with the hope that it might support Fukushima's recovery, included works created after the disaster, affording visitors an insightful view into the minds of these artists who have continued to pursue their art even amidst difficult circumstances.

AFTER 3.11
2012年3月1日(木)—6月3日(日)

DNP Graphic Design Archives Collection IV
The 10th Memorial to Ikko Tanaka: Ikko Tanaka Posters 1980–2002

June 9 – September 9, 2012

DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展IV　没後10周年記念企画：田中一光ポスター 1980–2002

日本グラフィックデザイン界の巨星、田中一光の逝去から10年目となる2012年。DNP文化振興財団が2008年に設立した田中一光アーカイブから、作家の没後10年の節目を飾る本展を開催した。2010年の「田中一光ポスター 1953–1979」展に続く回顧展第二弾でもある本展では、1980年から亡くなる2002年までの後半期の代表作150点を紹介した。田中一光の業績の中でも特記されるのがポスター作家としての歩みであるが、とくに脂の乗り切った後半期は、彼の世界的な評価が名実ともにゆるぎないものになった時代である。「Nihon Buyo」をはじめとする優品を通して、みずみずしい感性を終生失わず、旺盛な活動をまっとうした田中一光の軌跡を明らかにした。

The year 2012 marked the tenth anniversary of the passing of Ikko Tanaka, one of the luminaries of graphic design in Japan. This exhibition was held to commemorate this anniversary through works gleaned from the Ikko Tanaka Archives, which was established by the DNP Foundation for Cultural Promotion in 2008. As a follow-up to a previous retrospective of Mr. Tanaka's poster works created between 1953 and 1979, this exhibition introduced 150 of his representative works from his later period, spanning from 1980 until his death in 2002. Among his many achievements, Mr. Tanaka is especially noteworthy for his poster art, and it is in this later, highly prolific period in particular that he firmly established his reputation on global scale. Via "Nihon Buyo" and his many other outstanding works of this period, the exhibition demonstrated clearly how, through to the very end of his life, Mr. Tanaka remained robustly active and never lost his creative freshness.

Homage to Katzumie masaru
ISSEY MIYAKE
A UN
ISSEY MIYAKE 1989
ISSEY MIYAKE 1987
JAPAN

没後10周年記念企画
田中一光ポスター1980—2002
2012年6月9日[土]—9月9日[日]

PLEATS PLEASE
ISSEY MIYAKE

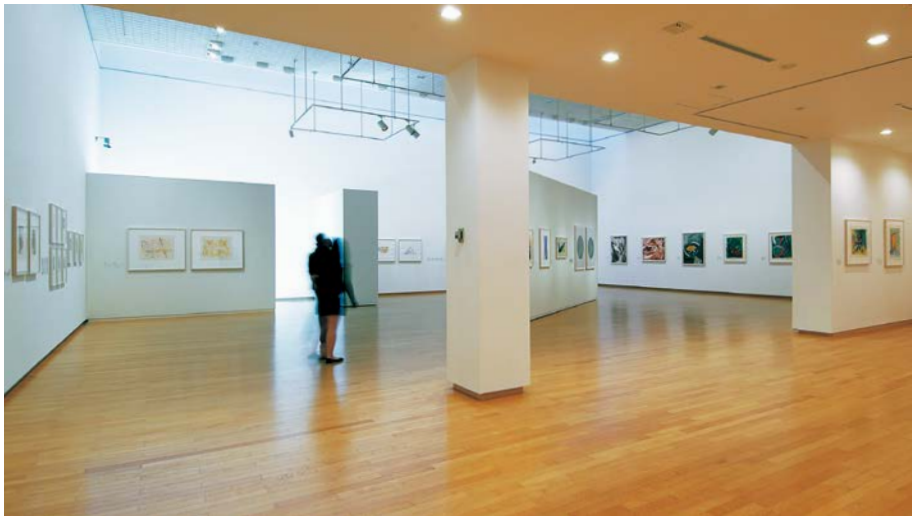
CONCERT
PROJECTION DE FILMS

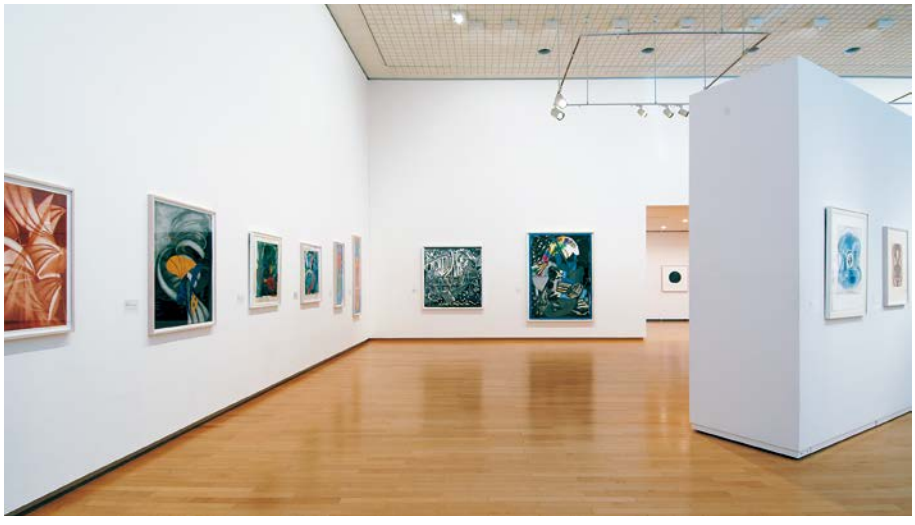
GIO PONTI
富山県百年
1990年代

The Expressive Appeal of Copperplate Prints: 24th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection

September 15 – December 2, 2012

銅版の表現力：タイラーグラフィックス・アーカイブコレクション展 Vol.24





銅版画は、銅の板の表面に溝や窪みを作り、そこにインクを詰めて紙に刷りとる版画技法で、ドライポイントやエッチング、アクアティントといった技法が含まれる。それぞれの技法によって線描や色面に多彩な表情をつけられ、幅広い表現が可能なことから、銅版画は具象・抽象を問わず多くの作家に愛され、数々の名作が生み出されてきた。本展はCCGA所蔵のタイラーグラフィックス・アーカイブコレクションから、スタンリー・ボクサーやヘレン・フランケンサーラーなど現代美術を代表する作家たちによる銅版画を展示し、作風や技法の違いによってさまざまな表情を見せる作品を通して、銅版の豊かな表現力に迫った。

Copperplate prints are artworks made by creating grooves and indentations within the surface of a copper plate, filling them with ink, and transferring the resulting design to paper. Among the technical variations of copperplate printmaking are drypoint, etching and aquatint. Because a wide variety of artistic expressions can be created by the line drawings and color planes enabled by these diverse techniques, through the years copperplate prints have been favored by many artists, whether their focus is representational or abstract art, resulting in a wealth of masterpieces. This exhibition featured copperplate prints from CCGA's Tyler Graphics Archive Collection by such leading contemporary artists as Stanley Boxer and Helen Frankenthaler. The breadth of expressive possibilities derived from the featured artists' chosen styles and techniques gave visitors a vivid demonstration of the rich expressive appeal of copperplate prints.

銅版の表現力
26th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
The Expressive Appeal of Copperplate Prints
September 15–December 2, 2012
タイラーグラフィックス・アーカイブコレクション展 Vol. 24
2012年9月15日[土]—12月2日[日]

The 24th Denzen Print Award Exhibition

February 10 – 16, 2013

特別展　第24回田善顕彰版画展

須賀川が生んだ江戸時代の画家、亜欧堂田善（あおうどう·でんぜん）は、江戸で苦労を重ねながら西洋式の銅版画技法を研究し、わが国初の銅版画による解剖図や世界地図などを残したことで知られている。とくに遠近法を駆使した写実的な風景銅版画は、葛飾北斎などの浮世絵にも大きな影響を与え、2012年にはその価値が認められて国の重要文化財に指定された。本展は田善の功績を顕彰するために、須賀川商工会議所青年部が主催し、平成元年から続く小中学生の作品による版画展である。東日本大震災により従来の会場が使用できなくなったため、今年度よりCCGAでの開催となった。3,000点を超える応募作から選ばれた田善賞をはじめとする入賞作および入選作、計234点を展示した。

Aodo Denzen (1748-1822), who was born in Sukagawa (where CCGA is located), was an artist who, in spite of the difficulties presented by his times – the Edo era of Japan's national "seclusion," studied Western copperplate print-making techniques and produced Japan's first anatomical drawings, world maps and other artworks in the copperplate print genre. His realistic landscapes applying the laws of perspective in particular had a major impact on Katsushika Hokusai and other ukiyo-e print artists, and in 2012 the value of his contribution was finally recognized and his works were designated Important Cultural Properties of Japan. This exhibition, organized by the Youth Division of the Sukagawa Chamber of Commerce and Industry to shed light on Denzen's achievements, showed copperplate prints created by elementary school students. It was the 24th in a series of annual events tracing back to 1989. Starting this year the exhibition venue was shifted to CCGA because the former site could no longer be used as a result of the 2011 earthquake. A total of 234 works, selected from more than 3,000 entries, were on display, including the Grand Prize winner and other prize-winning works.

第24回
田善顕彰版画展
平成25年2月10日(日)—2月16日(土)

2

教育・普及事業

Education & Enlightenment

ggg, ddd Gallery Talk Overviews

ギャラリートーク概要

キギ展 植原亮輔と渡邉良重

出演者：植原亮輔＋渡邉良重＋
竹村真一＋伊藤総研

著書『宇宙樹』を読んで、植原、渡邉両氏がぜひ会いたかったという、京都造形芸術大学教授、文化人類学者の竹村真一氏をゲストに、編集者の伊藤総研氏を司会進行に迎えてのトーク。アートディレクションの役割を木に例えて語る植原氏は、自身の考えともリンクする竹村氏の著書に大いに触発されたという。渡邉氏も、読んでいるとほんとうに美しいイメージが次々と浮かぶ、とその感動を語る。それを受けて竹村氏も、木や森のテーマから、さまざまな民族と木との関わり、哲学、古代神話など、話は宇宙的なスケールで膨らんだ。展示会場についても、森にいるときの気持ち良さを感じたと語り、初対面とは思えない息の合った話を展開した。渡邉氏の "新会社の名前をキギにしてよかった" という言葉が印象的。新たにスタートした「キギ」の方向性、両氏のクリエイションの根の部分にある考え方が伝わるトークとなった。

ジャンピン・ヘ　フラッシュバック

出演者：ジャンピン・ヘ＋浅葉克己＋葛西薫＋
中島英樹＋ワン・シュ＋グアン・ユー

グラフィックデザインという言葉、概念を中国にもたらした世代のワン・シュ氏、中国の若い世代を代表するグアン・ユー氏に、ジャンピン氏が影響を受けたという日本のデザイナーも加わり、ジャンピン氏と熱心なトークを繰り広げた。杭州郊外に生まれ、厳格な父の躾で書道に打ち込んだ幼少時代、美術学院時代、卒業後のドイツ留学など、自らの生い立ちに始まり、その間の中国のデザイン界の急速な変化などが、ワン・シュ氏やグアン・ユー氏も交えて語られた。ドイツ（西洋）と中国（東洋）を行き来する現在については、自ずと双方の影響を受けており、東西の架け橋の役割も担えているのでは、と語る。その一方で、ドイツで効率性や方法論を学んだが、精神面での中国的な影響は骨の髄まで浸透していて、やはりアイデンティティは中国人、という。世界で活躍する中国系デザイナーのトップランナーとしての実感が興味深い。

2012 ADC展

出演者：澁谷克彦

クリエイションギャラリー G8、資生堂「澁谷克彦グラフィックデザイン展」のポスターおよび環境空間でADC会員賞を受賞した澁谷克彦氏が登場。まずは受賞作のG8での亀倉雄策賞受賞展の会場を紹介。毎年制作している資生堂のシリーズポスターやそれを3D化したもの、CG映像などユニークな展示の様子を見せながら、話は自然に "唐草" を中心とした資生堂の歴史へ。作る人の数だけ唐草にも個性があるが、みんなが同じ方向に向かって、同じモチベーションで努力することで、資生堂のスタイルが出来てきたのではないか。山名文夫氏らの仕事を紹介しながらの話に140年の伝統の重みを感じる。そして澁谷氏が手がけることになった『花椿』など最新の仕事にも触れた。"資生堂のエネルギー、自分の持っているエネルギーを合わせて伝えていきたいという思いがある。" 伝統ある企業の中で、新たな伝統を積み上げていこうとするデザイナーの気持が伝わるトークだった。

テセウス・チャン：ヴェルク No.20 銀座
THE EXTREMITIES OF THE PRINTED MATTER

出演者：テセウス・チャン＋田名網敬一＋
伊藤弘＋クリス・リー＋ジャクソン・タン

クリス・リー氏とジャクソン・タン氏、田名網敬一氏とグルーヴィジョンズの伊藤弘氏がゲストとして参加した。雑誌『WERK』などテセウス氏の仕事に加え、シンガポールのデザイン状況が大きなテーマ。豊かな層が増え、デザイン教育が受けられる環境が整い、シンガポールは現在 "デザインの時代" にあるという。政府省庁もクリエイティブ産業をサポートしている状況を背景に、新しい世代のクリス氏やジャクソン氏が行っている活動が紹介された。伊藤氏はシンガポールのデザインについて、国のデザイン全体を良くして行こうという健全なベクトルを感じたと語る。しかし、どんなにテクノロジーが進歩してもアーティストとしてのハンドワークは続けるというテセウス氏。田名網氏も彼の五感を使ったデザインから、日本のデザイナーが失ったものを学べるのでは、と語った。

松永真ポスター100展

出演者：松永真＋北沢永志（DNP文化振興財団）

DNP文化振興財団の北沢が聞き役になり、書家である父親、疎開した九州、当時見て強い印象を受けた映画のタイトルバック、京都にいた時代などの話を始め、資生堂時代の海外ロケ、独立後の実績である「スコッティ」や「カンチューハイ」のコンペのエピソードなど、興味深い話が次々に飛び出した。中でも、今回の展覧会でこだわったポスターについては特に熱く語った。ポスターは死なないと思う、メディアとしてはほとんど死んでいるけれど、グラフィックデザインがある限り、ポスターはその中で非常に核になるものではないか。過去の展覧会はパッケージやアート作品も含むジャンル縦断型のものが多く、一度ポスターだけの展覧会をやりたかったという松永氏。今回は今までに制作した約1,300点から100種を自選した。"ポスター展を初めて開催して、一人前のデザイナーになった気がする" 半世紀におよぶキャリアを誇る松永氏の言葉にポスターへの思いがこもる。

カリ・ピッポ　ポスターとドローイング
シンプル・ストロング・シャープ

出演者：カリ・ピッポ

フィンランドの風土や、自然からの影響がとても大きいというフィンランドのクリエイターの特徴を紹介し、自身の表現もまた生まれ育ったフィンランドの文化に根ざしている部分があるというピッポ氏。また一方で、マティスやピカソ、ミロ、モンドリアンなどの巨匠から影響を受け、ポスターでは1967年に初めて見たヘンリク・トマシェフスキの作品が、自分のグラフィックデザインの方向性を決めるほどの大きな存在だったと語る。一つのアイデアだけで十分、less is more、少ないことが豊か。印象的な言葉で、展覧会タイトルでもある "シンプルで、力強くて、シャープ" な自身のポスターデザインにおける哲学を披露した。また主に旅先で撮影された写真や、スケッチブックに描かれたドローイングも数多く紹介。デザイナーはよき観察者であり、日々の生活の中での気づきがデザインのもとになっていると語った。

THE POSTERS 1983-2012
世界ポスタートリエンナーレトヤマ受賞作品展

出演者：永井一正＋松永 真＋片岸昭二

世界ポスタートリエンナーレトヤマ（IPT）の創設にも関わり第1回から実行委員を務める永井一正氏、第2回に銅賞を受賞し第3回からは審査員を務める松永真氏、30年間IPTに携わってきた富山県立近代美術館副館長の片岸昭二氏によるトーク。海外のコンペティションで日本人が活躍する中、日本でもポスターの公募展をという機運が高まりIPTが誕生した経緯や、その後の30年の歴史、数々の受賞作品を紹介した。また徹底的に議論を交わすという審査の模様、世界中から集まったポスターを審査する難しさ、面白さも語られた。ポスターはデザインの故郷のようなもので、一定の枠の中で宇宙を表現するという、根源的なものがある、という言葉が印象に残った。メディアとしての機能が衰えてきているのは事実だが、世界40ヵ所で公募展が開かれている状況の中、ポスターの果たす役割、新しいあり方を感じさせる内容となった。

寄藤文平の夏の一研究
ワークショップ「装丁をつくろう！」

講師：寄藤文平

「装丁をつくろう！」と題し、参加者が装丁デザイン（表紙）を制作するというワークショップを開催した（定員25名）。参加者はまず「休日のガンマン」「ヒョンヒョロ」「自分会議」「ポケット小僧」など本のタイトルを与えられ、そこから自由に発想を膨らませる。使用するのは今回の展覧会の展示にも使用したカラフルな黒板とチョーク。タイトルから本の内容を想像し、表紙イメージを描いていく。手描きされたイメージは、1枚ずつスキャンされ、寄藤氏が参加者と相談しながら、タイトルや著者名として参加者の名前をレイアウトし、表紙カバーとして完成させて出力。実際に書店に並んでいそうな力作が揃った。参加者は束見本に巻いた各自の装丁デザインを、原画を描いた黒板と共に持ち帰った。通常のギャラリートークとは違い、講師と参加者が深く関わることができ、和やかな雰囲気だが、充実したイベントとなった。

AGI展

出演者：浅葉克己＋三木 健

前月に香港で開催されたAGI総会に参加した浅葉克己氏と三木健氏によるトーク。総会でのプレゼンテーションをそれぞれ再現。三木氏は、大阪芸術大学で取り組み始めた一年生向けの授業プログラム「リンゴ」を紹介。リンゴをテーマに、デザインを始めて学ぶ人にデザインとは何かを体感してもらうという内容で、香港での反響も大きかったという。浅葉氏は、自身の個展が開催されたドイツのバウハウスへ行った時の様子を紹介した。また“天国と地獄”をテーマに開催された総会で、両氏が参加した地獄ツアーの模様をレポート。これはクジで割り当てられた地元の学生が、自身に所縁のある場所を案内してくれるというユニークなイベント。両氏が訪れたのは学生ガイドの祖母が暮らす老人ホーム。その他、地元の人で賑わう食堂や市場、葬儀用品店などを訪れた様子が楽しく語られ、毎年の開催地が趣向をこらして国際交流を行う総会の臨場感が伝わってきた。

横尾忠則 初のブックデザイン展

出演者：横尾忠則＋南嶌 宏

美術評論家の南嶌宏氏をゲストに迎えた。ちょうど直前、11月3日に横尾忠則現代美術館が神戸にオープンしたばかりで、オープニング展「反反復復反復」も大きな話題となっていたが、gggは初となるブックデザインのみの展覧会。横尾氏が南嶌氏の質問に答えるという形式でブックデザインについて語った。“展示に選んだ作品だけでも約800点、来るもの拒まずで全部引き受けていた” “著者自身からの依頼が90%、出版社からは少ない” “中身は読まない、ストーリーは編集者に聞けばいい”など、独自のデザイン哲学を始め、『不道徳教育講座』のデザインをした際の三島由紀夫氏とのエピソード他、興味深い話題が次々と飛び出した。他の人の本でも横尾さんがデザインすると横尾さんの本に見えるというマジックがある、という南嶌氏に対し、でも印税は入らないですよ、と横尾氏。展示だけではなく軽妙なトークでも、満席の聴講者を横尾ワールドへと引き込んだ。

DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展V
LIFE 永井一正ポスター展

出演者：永井一正＋永井一史

ゲストはHAKUHODO DESIGNの永井一史氏。デザインすることは生きることと語る一正氏の、まさにライフワークとなったLIFEシリーズポスターについて、熱いトークが繰り広げられた。創造は破壊がないところからは起こりえないの言葉通り、毎年表現のスタイルを変えながら20年以上続く同シリーズ。生きること、生命、共生などをテーマに、主に動植物が描かれてきたが、最新作に登場したロボットについて、“これだけ世の中のテクノロジーが発達すれば、それと共生していくことも必要でしょう”と語る。常に時代を見据えつつ、ますます深化を続けているLIFEシリーズ。“LIFEはこれからも続けていきたい”現役最年長デザイナーである一正氏の言葉が力強い。進行役がいない二人だけの対談は初めてという貴重なギャラリートークとなり、親子ならではの突っ込んだ話や絶妙なやりとりに、会場は大いに盛り上がった。

GRAPHIC WEST 5
type trip to Osaka typographics ti: 270

出演者：クリス・リー＋原田祐馬＋後藤哲也

初日に開催されたギャラリートークでは、参加デザイナーの中からシンガポールのクリス・リー氏が登場。国際的に活躍するクリエイティブファーム「アサイラム」の幅広い活動や、デザイナーによる自主的なコミュニティの設立などの話を通じて、シンガポールのデザインの現況を紹介した。途中からは同じく参加デザイナーである香港のジェイヴィン・モ氏、バンコクのサンティ・ロウラチャウィ氏も加わり、各都市のデザイン事情、特に若い世代の新しい動きに関して語った。また会期中にはソウルのチェ・スルキ氏とチェ・ミン氏、深圳のヘイ・イーヤン氏、台北のアーロン・ニエ氏、北京のシャオマグ・アンド・チャンズの両氏らを招いて、毎週会場内でインタビュートークを開催。参加デザイナーと観客が直接話し合い、アジアの最新グラフィックとの交流の場となった。

DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展IV
没後10周年記念企画：
田中一光ポスター 1980-2002

出演者：喜多俊之

TDC展 2012

出演者：伊藤ガビン＋いすたえこ

立花文穂展

出演者：立花文穂＋尾澤あずさ（ggg）

2012 ADC展

出演者：河合雄流＋藤本宗将＋小野総一＋羽鳥貴晴

THE POSTERS 1983-2012
世界ポスタートリエンナーレトヤマ受賞作品展

出演者：片岸昭二＋北沢永志（DNP文化振興財団）

gggのギャラリートークはUstreamにてライブ配信を行いました。
（寄藤文平の夏の一研究、LIFE永井一正ポスター展は除く）

KIGI Exhibition: Ryosuke Uehara and Yoshie Watanabe

Participants : Ryosuke Uehara + Yoshie Watanabe + Shin'ichi Takemura + Soken Ito

The guest participant for the talk was cultural anthropologist Shin'ichi Takemura, professor at Kyoto University of Art & Design. Mr. Uehara and Ms. Watanabe were both eager to meet Mr. Takemura after reading his book *Cosmic Tree*. Editor Soken Ito served as moderator. Mr. Uehara, who compares the role of art direction to a tree, said he was greatly inspired by Mr. Takemura's book, with which he sees a link with his own way of thinking. Ms. Watanabe related how she too was moved reading his book, which she described as a succession of truly beautiful images. In response, Mr. Takemura expanded the discussion to cosmic scale, touching on such topics as trees and forests, the relationships various peoples have with trees, philosophy, ancient mythology and shamanism. Although there was no discussion concerning individual works, the gallery talk conveyed well the directions in which the newly launched KIGI will move as well as their philosophy towards creativity.

Jianping He Flashback

Participants : Jianping He + Katsumi Asaba + Kaoru Kasai + Hideki Nakajima + Wang Xu + Guang Yu

This was an exciting gallery talk international in scope, bringing together Wang Xu, of the generation that introduced the vocabulary and concept of graphic design to China, Guang Yu, a leading force in China's young generation of designers, and three Japanese designers whom Jianping He respects and who have had an influence on his work. Mr. He spoke about his childhood, about his days studying at an art academy in China and of his time spent studying abroad in Germany. Together, they discussed the rapid changes that took place in China's graphic design realm during those times. Mr. He went on to talk about how he was influenced by both Germany and China, and how he is playing a role in connecting the two. Concerning his personal identity, however, Mr. He stated that in spirit he is steeped "to the core" by Chinese influences. It was interesting to hear episodes and remarks from him as one of the leading Chinese designers globally active today.

2012 Tokyo Art Directors Club Exhibition

Speaker : Katsuhiko Shibuya

The guest speaker was Katsuhiko Shibuya, who won a 2012 ADC Members Award for his posters and installations of his graphic design solo exhibitions. To begin, Mr. Shibuya gave an introduction to his exhibition held in honor of his having won the Yusaku Kamekura Design Award, for which he was given the ADC's accolade. As he showed his unique poster series created annually for Shiseido, the same works in 3D, computer graphics videos, etc., his topic naturally flowed into a discussion of Shiseido's history, especially its connection with arabesque design. Mr. Shibuya suggested that although arabesque patterns come in as many different styles as the number of people who create them, a "Shiseido style" has been possible as a result of everyone striving with the same motivation toward the same direction. Mr. Shibuya also touched upon his newest work that he does for Shiseido's "Hanatsubaki" magazine. "What I have in mind , is to convey Shiseido's energy in combination with my own energy."

Theseus Chan: WERK No.20 GINZA THE EXTREMITIES OF THE PRINTED MATTER

Participants : Theseus Chan + Keiichi Tanaami + Hiroshi Ito + Chris Lee + Jackson Tan

In addition to talking about Mr. Chan's involvement in "WERK" magazine, the major topic of discussion was the general situation of design in Singapore. The speakers said that Singapore today is experiencing an "era of design" now that more Singaporeans are becoming more affluent – a situation that has created an environment that offers education in good art and design, resulting in the steady emergence of young designers. The Singapore government is also supporting its local creative industries, and Mr. Lee and Mr. Tan, both representative of the new generation, introduced the various activities they are involved in. Mr. Ito, who has previously collaborated with Mr. Chan, spoke about design in Singapore, saying how he sensed a healthy trend toward making local design better as a whole. Mr. Chan noted, however, that no matter how much progress might be achieved technologically, his own intention is to continue his handwork.

Shin Matsunaga Poster 100 Exhibition

Participants : Shin Matsunaga + Eishi Kitazawa (DNP Foundation for Cultural Promotion)

With Eishi Kitazawa of DNP Foundation serving in the role of interviewer, this gallery talk covered a host of topics of great interest. Mr. Matsunaga spoke about his father, who was a calligrapher; about his wartime experience; about the period he spent in Kyoto; about his location shooting done overseas when he worked for Shiseido; about his entry in competitions, after going freelance, and about many other impressive topics. Mr. Matsunaga was especially enthusiastic talking about the posters he had selected for this exhibition. He said he believes that posters will not die – that although they have nearly died out as a media form, he thinks that as long as graphic design continues to exist, posters will play an extremely central role. "Having now held my very first exhibition showing poster works only, I feel I too have finally joined ranks as a true graphic designer." Such were the sentiments expressed by this luminary of graphic design boasting a career stretching over half a century.

Kari Piippo Posters & Drawings –Simple, Strong and Sharp–

Speaker : Kari Piippo

Mr. Piippo talked about how Finland's creative artists are greatly influenced by their country's natural features and by nature itself, adding that his own methods of artistic expression are also deeply rooted, in part, in the culture of Finland, the land where he was born and raised. But he also described how he has been influenced too by masters like Matisse, Picasso, Miro and Mondrian. Insofar as his posters are concerned, he said the works of Henryk Tomaszewski, which he saw for the first time in 1967, were instrumental in setting his course in the realm of graphic design. Mr. Piippo revealed the philosophy behind his own poster design work, as reflected in the subtitle of his exhibition: "Simple, Strong and Sharp." He described how a single idea is sufficient, in an impressive phrase "less is more." He said that a designer must be a good observer, that the basis of design comes from what one notices in the course of everyday life.

THE POSTERS 1983-2012 –The Prize-Winning Works from The International Poster Triennial in Toyama–

Participants : Kazumasa Nagai + Shin Matsunaga + Shoji Katagishi

The participants discussed how the IPT came about, the result of an escalating trend to hold open poster competitions in Japan at a time when Japanese designers were increasingly active in competitions overseas, and they also introduced the IPT's 30-year history and numerous prize-winning works. The participants also talked about the IPT's judging process and its solid reliance on exhaustive debate, and about the difficulty – and enjoyment – of judging posters that emanate from all over the world. One comment that left a particularly powerful impression was the comparison of posters to the "spiritual birthplace" of design, saying posters contain something fundamental in the way a universe is expressed with in a uniform framework. Although posters' function as a medium of information has weakened, the fact that 40 poster competitions are still held today worldwide offered an insightful view of the role posters now play.

Bunpei Yorifuji's Summer Homework Project

Speaker : Bunpei Yorifuji

This event took the form of a workshop in which its 25 participants were asked to design a book cover. Each participant was assigned the title of a particular book and given total freedom in deciding what to create. The "tools" put at their disposal were the blackboards and chalks used for Mr. Yorifuji's exhibition displays. The participants proceeded to draw their cover images based on what they imagined the content of their assigned book would be like. Upon completion, the drawings were then scanned and Mr. Yorifuji, in conversation with each participant, added the book's title and the author's name to the layout. The result was then printed out and wrapped on a book dummy. Taken together, the 25 original "books" were all terrific works that one could imagine actually lined up in a bookstore. At the end, the participants were given their books and blackboards to take home. The speaker and participants were able to have a close rapport in a friendly atmosphere, with very rewarding results.

AGI (Alliance Graphique Internationale) Exhibition

Participants : Katsumi Asaba + Ken Miki

The speakers Katsumi Asaba and Ken Miki were both fresh back from having participated in the AGI Congress in Hong Kong the previous month. Here they reproduced the presentations they had given at the Congress. Mr. Miki introduced his "Apples" class for freshmen at Osaka University of Arts commencing this spring. Using apples as its theme, the course aims to teach students learning design for the first time what design is all about. Mr. Asaba spoke about his recent visit to the Bauhaus Dessau in Germany, where a solo exhibition of his works was being held. The two speakers also talked about the "Hell Tour" they took part in at the Congress, the theme of which was "Heaven & Hell." A local university student took Mr. Asaba and Mr. Miki to his hometown market, funeral home, temple, and finally a home for the aged where his grandmother lives. They talked about the experience with great enjoyment, vividly conveying the atmosphere of the annual AGI Congress.

Tadanori Yokoo The First Book Design Exhibition

Participants : Tadanori Yokoo + Hiroshi Minamishima

For his gallery talk, Tadanori Yokoo invited art critic Hiroshi Minamishima as his guest participant. The exhibition at ggg was Mr. Yokoo's very first to be dedicated exclusively to his book design work. Mr. Yokoo spoke about his book designs in a format of answering questions posed by Mr. Minamishima. Approximately 800 of his works were on display, a manifestation of Mr. Yokoo's willingness to accept all job offers that come his way. He said 90% of the time he is asked by the author; relatively rarely does he get work from the publisher. He doesn't read the books he is assigned to design; instead, he says it's enough to hear the gist of the content from the book's editor. The talk covered a great number of interesting topics, including Mr. Yokoo's design philosophy and an anecdote relating to Yukio Mishima and creating the design for his *Lectures in Immoral Education*. The audience, filled to capacity, was enthralled not only by the works on display but also by the lighthearted banter between the two speakers.

DNP Graphic Design Archives Collection Ⅴ LIFE–Kazumasa Nagai Poster Exhibition

Participants : Kazumasa Nagai + Kazufumi Nagai

The guest participant for this gallery talk was Kazufumi Nagai. He and Kazumasa Nagai engaged in a brisk discussion about the "LIFE" poster series, the very lifework of Mr. Nagai, who says that to design is to live. The "LIFE" series has continued for more than 20 years, each year undergoing a change in expressive style in keeping with the belief that nothing can be newly created unless it starts from an act of destruction. Until now Mr. Nagai had developed the series on such themes as living, life and living together symbiotically, his focus being on animals and plants. But his latest work features a robot, which caused great excitement among the audience. Given the great degree to which technology has developed in our world, living together with it, symbiotically, will surely be necessary. This talk turned out to be the first opportunity for these two designers, father and son, to hold a public talk of this kind just between themselves. Their probing exchanges and clever interplay made this an extremely arousing event.

GRAPHIC WEST 5 type trip to Osaka typographics ti: 270

Participants : Chris Lee + Yuma Harada + Tetsuya Goto

This talk featured Singapore's Chris Lee, one of the participating designers. By way of introducing the current situation of design in Singapore, Mr. Lee spoke about the diverse activities of Asylum, the internationally active creative farm, and about establishing Design Society, a voluntary community of designers. The discussion was later joined by Javin Mo of Hong Kong and Santi Lawrachawee of Bangkok. They spoke about the design situation in their respective cities, focusing on new movements by the young generation. During the exhibition run, a series of weekly events titled "InterView" was also held, variously featuring Sulki Choi and Min Choi of Seoul, Hei Yiyang of Shenzhen, Aaron Nieh of Taipei, and Xiao Mage & Chengzi of Beijing. Through direct interaction with the participating designers, audiences were afforded opportunities to acquire firsthand knowledge about the latest graphic design trends in cities all around Asia.

DNP Graphic Design Archives Collection Ⅳ The 10th Memorial to Ikko Tanaka: Ikko Tanaka Posters 1980-2002

Speaker : Toshiyuki Kita

Tokyo Type Directors Club Exhibition 2012

Participants : Gabin Ito + Taeko Isu

Fumio Tachibana Exhibition

Participants : Fumio Tachibana + Azusa Ozawa (ggg)

2012 Tokyo Art Directors Club Exhibition

Participants : Takeru Kawai + Muneyuki Fujimoto + Soichi Ono + Takaharu Hatori

THE POSTERS 1983-2012 –The Prize-Winning Works from The International Poster Triennial in Toyama–

Participants : Shoji Katagishi + Eishi Kitazawa (DNP Foundation for Cultural Promotion)

The live video of the gallery talks at ggg were distributed via Ustream.
* Except the talks of Bunpei Yorifuji and LIFE (Kazumasa Nagai).

Gallery Talk

キギ展　植原亮輔と渡邉良重

植原亮輔・渡邉良重（キギ）
竹村真一、伊藤総研

伊藤総研　実は植原さん、渡邉さんおふたりと人類学者である竹村さんとは初対面なんですね。なぜ竹村さんをお呼びしたのか、その話からお聞きしようと思います。

植原亮輔　僕は学生時代からものづくりについて考えることがあり、感覚だけでつくることはもうしんどいなと思うようになって、いろいろ方法論を模索してきました。30歳前後からは、たとえば人間の存在そのものを考えるようになったんです。その考え方の延長線上で、生物や宇宙にたどり着いた。それで生物学とか福岡伸一さん、茂木健一郎さんなどの本を読むようになりました。そして今年（2012年）1月に「キギ」を設立した後に、たまたま渡邉から竹村さんの書かれた『宇宙樹』を貸してもらった。興味深かったし、僕の考えとリンクするところがあり、ぜひお会いしてみたいと思ったのがこの間の経緯です。

伊藤　キギという名前を命名した由来をここで植原さんから説明してもらいましょう。

植原　2年くらい前にあるブランドのアートディレクションをする仕事がありました。担当者の人は僕のことを理解してくれているけれど、その先の上の人たちはそうではなかったので、自分たちはどういう役割をするのかを説明しなければならなかった。そのときに木を描いて話をさせてもらった。木が下に根を伸ばして成長して実がなるまでを、たしかなコンセプトに裏付けられた商品を送り出すまでの仕組みになぞらえたんです。キギにした由来はこのように1本の木をひとつのクリエーティブとして考えた結果です。徐々に増やして森にしていきたいという思いも込めています。

伊藤　竹村さんは、竹村さんの本から触発されているという植原さんの木とアートディレクションをめぐるお話をどう受け止めましたか？

竹村真一　木の絵を描くときに、地下の見えない部分までいきなり描いている人って、そんなに見たことないです。とても素敵だと思いました。「樹林気功」って経験されたことあります？　気を整える気功には脱人間化していこうという感覚がどこかにあって、その究極が「木になって立つ」です。人間って地上の部分しか感じないんですが、根が生えているような感覚が自分の中に芽生えてくると、すごく楽に立てるようになるんです。

伊藤　竹村さんの本を読むと、たとえば「人間は逆立ちした樹木である」とあります。このように木が人にインスパイアを与えるという考えは他の地域にもあるのですか？

竹村　その考えは古代の神話やシベリアのシャーマニズムにもあるし、オーロラが見えるあたりの北欧の北極圏の森の民にも共通しますね。木を通じて天界とコミュニケーションをとる宇宙樹のイメージは、今もシャーマンの人たちの伝統に生きています。

伊藤　良重さんは良重さんでまた別に竹村さんに来てほしい理由があったのですね。

渡邉良重　はい。坂本龍一さんの「森の生命の交響曲」というETVの番組を見ていたときに、その中で「木は立ち上がった水だ」という竹村さんのコメントが流れていて、それでワーッと感動したのが最初でした。それですぐにご著書の『宇宙樹』を買って読みました。序文のところに「サクラ」という文章が出てきます。これは大和言葉で、「サ」は穀神＝田の神を意味し、「クラ」はその座、つまりちょうど山桜が色づくあたり、山と里の中間領域での、しばしの休息の場所と記されています。私の実家は山の中にあり、春になると山のあちこちがフワッと明るくなってくるのを見て育ちました。そんな時期を「生命力が山から降りてくる兆し」とする記述を読み、あ、そうだったのだなと思いました。読んでいるとほんとうに美しいイメージが次々浮かびますし、その竹村さんが出席してくださったということでうれしく思います。私たちの事務所名もキギでよかった（笑）。ほんとうに名前が気に入っています。

伊藤　おふたりから竹村さんに今日来ていただいた理由をお聞きしましたが、ここからは逆に竹村さんが作品展をご覧になった感想をお聞きしたいですね。

竹村　とてもカラフルな作品なのに、ある種のモノトーンな静けさ、あるいは森に入ったときに落ち着く感覚に近いものを感じたのです。一言でいうと作為でデザインしていないということかな。余白感があるのも気持ち良さと通じます。

植原　いろいろなケースがありますが、自分の中では想像させる余地を残すこともクリエーションに大切なことではないかと思っているので、これは作為的になってしまうところもあるのですが、ある意味分かりづらくすることも、ときどきテクニックのひとつとして試みているところはあります。

渡邉　私はイラストを描くのですが、人工物はあまり描く気がしなくて、とにかく人、動物、虫、花、木といったものが描きたい。いちばん行ってみたいのは、花がじゅうたんのように咲き乱れているところ。なかなか行けないのですけれども……。

伊藤　そもそも、男女のユニットでやっているって不思議ではないですか？

植原　そうですね。僕らのチームは宮田識さんが社長のDRAFT時代に急に結成されたのですが、こういうユニットがあまりなかったので大丈夫かなと不安もありました。年も離れているので。でも、逆にやりやすかったという面はあります。

渡邉　私だけがやっている仕事もよく植原に意見を聞くのですが、「うーん、つまらない」と言われたりもします。自分なりには新しいものをつくっていきたいので、つまらないということは既視感があることだと思って反省して、判断基準にすることはよくあります。ですから私のグレーゾーンを少しずつ広げてくれている感じはしています。

植原　これからは、ほんとうは「キギらしさ」を壊していきたいんですよ。もっと変なことをやりたい。

渡邉　そう、じょじょに広げていきたいというところはありますね。

Gallery Talk

KIGI Exhibition: Ryosuke Uehara and Yoshie Watanabe

Ryosuke Uehara, Yoshie Watanabe, Shin'ichi Takemura, Soken Ito

Soken Ito I understand this is the first time you two have met Mr. Takemura, who is an anthropologist. I'd like to begin by asking you why you asked him to join you here today.

Ryosuke Uehara I've been interested in making things ever since I was a student, but I came to feel it was a drain making things relying on my senses alone, so through the years I've tried my hand at a variety of methodologies. Since I was around 30, for example, I've begun thinking about human existence itself, and as an extension of thinking about that I arrived at life forms and the universe. Then shortly after establishing KIGI this January, Watanabe-san lent me a book written by Mr. Takemura, *Cosmic Tree*. I found it very interesting, with connections to my own ways of thinking, and it was from that that I began wanting to meet him.

Ito Could you please tell us why you decided to name your company "KIGI"?

Uehara Two years ago I was hired to do the art direction for a particular brand. The person in charge understood me, but the people superior to him didn't, so I had to explain what role we play. On that occasion I illustrated what I was saying with a drawing of a tree. I compared how a tree sets down roots, grows and ultimately bears fruit to the process by which a product is sent out into the world backed by a solid concept. The reason we decided on the name "KIGI" came from this conception of a single tree as a creative act. We made it plural with the intent of gradually increasing our "trees" until they become a "forest."

Ito Mr. Takemura, what was your reaction when you heard how Mr. Uehara had been inspired by your book, and about what he said about a tree and art direction?

Shin'ichi Takemura I'd never seen anyone before who drew a tree and right off included the parts that are invisible below ground, and I thought this was quite nice. Have you ever experienced "forest breathing exercises"? It's a kind of qigong breath control that's somehow meshed with a desire to achieve a "release" from our human form, with the ultimate goal being to "stand as though you'd become a tree." We humans sense only the part of us that's above ground, but when the perception like having roots awakens within you, you can stand quite effortlessly.

Ito In your book, you make statements like, "A human being is a tree standing on its head." This way a tree inspires a person – is this notion also found in other regions of the world?

Takemura Thinking of this kind is also found in ancient myths and in the shamanism of Siberia, and it's also common among the people who inhabit the forests of the Arctic region in northern Europe, in those areas where the Northern Lights can be seen. Even today, the image of a "cosmic tree" through which man can communicate with the heavens is alive within the traditions of people who follow shamanism.

Ito Yoshie-san, you had a different reason for wanting Mr. Takemura to be here today, didn't you?

Yoshie Watanabe I did. I was watching a program on NHK's educational channel, Ryuichi Sakamoto's "Forest Symphony," and it quoted a comment by Mr. Takemura saying that "a tree is water that has stood up." "Wow!" I thought. That was my first encounter with Mr. Takemura, and I immediately bought his *Cosmic Tree* and read it. The introduction contains a passage titled "Sakura" – a word [referring to cherry trees or cherry blossoms] of ancient Japanese origin [i.e. not a loan word]. "Sa" refers to the god of grains or rice paddies, and "kura" refers to its location, in other words precisely where wild cherries take on their color – a place to rest, the passage says, between the mountains and villages. The place where I grew up was in the mountains, and as a child I would watch the mountains turn bright with pastel colors each spring. Mr. Takemura referred to this time as "a sign of life forces descending from the mountains," and those words struck me as being so true. Reading his book arouses one truly beautiful image after another, and I'm so happy he agreed to join us here today. I'm also glad we decided to name our company "KIGI" (laugh). I really like the name.

Ito OK, now that we've heard why both of you asked Mr. Takemura to be here today, now I'd like to ask Mr. Takemura his impressions after seeing your exhibition.

Takemura The works are very colorful, yet I got a sense of monotone tranquility, a feeling akin to the sense of calm one feels on entering a forest. In a nutshell, there's no sense of contrived design. The sense of leaving some "breathing space" also lends a pleasant comforting feeling.

Uehara There are many different cases, but I think with creative work it's always important to leave room within you to imagine. This is where contrivance comes in, but making something in some sense difficult to understand is a technique that I try to use sometimes.

Watanabe I do a lot of illustration work, but I don't have much desire to depict artificial things; what I want to draw are things like people and animals, insects, flowers and trees.

Ito Isn't there something odd in your working together as a unit, one male and the other female?

Uehara I guess there is. We were teamed up very suddenly when we were both working for DRAFT, the company where Satoru Miyata is president. Since there weren't many units like ours, I was apprehensive and wondered how it would work out, since there's also a gap between us in age. But there are also ways in which working together has been very easy.

Watanabe I often ask Uehara-san's opinion on work I'm doing alone, and sometimes he'll say something like, "Pretty uninteresting, if you ask me." Since my aim is to create something new, I equate being told it's uninteresting with a sense of having seen it before, which gets me to reflect on what I've done. That often serves as my criterion for making a judgment, so I feel Uehara-san's inducing me, little by little, to expand out of my "gray zone."

Uehara Going forward, what I'd really like to do is to break out of the mold of what KIGI has come to be characterized for. I want to do things that are even more unusual.

Watanabe I agree. Gradually I'd like to broaden our horizons, too.

Gallery Talk

横尾忠則　初のブックデザイン展

横尾忠則、南嶌宏

南嶌宏　11月3日に神戸に横尾忠則現代美術館が開館しました。併せて、私が文章を書かせていただいた『横尾劇場』という、演劇と映画、コンサートのポスターを収めたgggBooksの別冊、アメリカを巡回しているコラージュの展覧会のカタログにもなる作品集（国書刊行会）、それから『ユリイカ』での特集、そして今回のブックデザインの展覧会というように、常にお忙しい横尾さんに変わりないのですが、ここに来て今までの活動の総まとめとのタイミングを迎えられている感じがします。

横尾忠則　東京に作品を収蔵している倉庫があるのですが、作品がどんどん増えて倉庫代がもう大変なのです。どこかいい倉庫がないか、兵庫県立美術館の方に相談したのです。そうしたら県には空いた建物がたくさんあるので知事に相談したら、と軽く言うのです。それで知事に話を持ちかけたら、「いや、美術館がいい」と。そう言われても、僕がつくりたいと言ってできるはずがない（笑）。そうしたら、「改修中の県美王子分館の一角が空いている。そこはどうや」と言われて、見に行ったら空間的にちょうどいいと思った。それから6年間かかって今年、オープンという形になったのです。

南嶌　岡本太郎さんもそうですが、亡くなられてしばらくして記念の美術館ができるのはよくある話です。横尾さんの場合、もちろんお生まれになった西脇市にもありますが、「Y＋T」と大きく銘打ったご自身の美術館ができるというのはどのような感じですか。

横尾　僕の場合、生きながらに美術館を与えられてしまった。それでオープニングの挨拶で「僕は半ば死んだ気分です」という話をしたのです。死んだつもりになれば、浮世の義理も果たさなくてもいい。これからはほんとうにやりたいことをやっていきたい、と。

南嶌　横尾さんにとって「死」というのは非常に重いキーワードになっていて、死を前面に出すことによってひとつの表現の回路を見いだしてきた作家でもある。死そのものは絶対に死にませんから、ある種の永遠性を獲得した生命を生きているのが横尾さんではないかという感じがします。今回のオープニングの展覧会名は「反反復復反復」と反復をテーマにしています。その心は？

横尾　僕の創作の核というのは、1個からいろいろなスタイルをつくっていくことにあるわけです。この作品を描くのは飽きたからとか、もう飽和点に達したからとか、いろいろな理由があってその作品からいったん退く。そういう意味で全部、未完成です。だから、過去のある時点でつくった作品が時々、気になる。「あの未完成の作品の続きを描いてみたい」という発想から、同じモチーフで描いたり、そのまま模写してみたりと、未完成ゆえの反復が繰り返されていく。たとえば「お堀」というピンクガールが泳ぐシリーズは何点かあるけれども、これからも描いていくと思う。とにかく一生泳ぎ続ける、これからも反復を続けるという、自分に対する宣言ですよね。

南嶌　今回、初めてというので僕も驚いたブックデザイン展。800点ぐらい展示されている。それもまだ全部ではない。横尾さんのすごさを改めて感じました。ブックデザインの注文を受けるときに何か心掛けることとか、ポスターとは違う意識はあるのでしょうか？

横尾　ポスターもブックデザインも一緒です。あのころは来るもの拒まず式で、どんな仕事でも全部引き受けるというかたちでやっていました。今はほぼ90％の本は著者からの要望で、出版社側からの依頼は10％あるかないかです。瀬戸内寂聴さんをはじめとする著者のみなさんに好かれているので、今日まで続いているわけですよ。本のストーリーの中身は編集者に聞くんです。「どんなこと書いてあるの？」と。それを聞いて、そのうちのどこか引っ掛かるところをヒントにする。非常に横着なやり方をしていますね。

南嶌　そうなんですか。その注文してきた人たちというのは、ほんとうにディープな人たちが多いですよね。その中のいちばんディープな才能のひとりは三島由紀夫さんだと思うのです。三島さんとのエピソードは何かありますか？

横尾　三島さんとの最初は『不道徳教育講座』だったと思います。デザインを三島さんに見せたら気に入ってくれない。やり直してくれと言われたけれども、何をやっていいか分からない。それを三島さんが察知して、僕の作品の中から一生懸命探してくれた。それは2人の女性の裸に僕が花札の絵を描いた写真。篠山紀信が撮ったんですが、「これを表紙にして欲しい」と。その通りにしたら三島さんは「いい出来だ」と喜んでくれましたね。

南嶌　横尾さんはいろいろなところで「芸術は迎術だ」ということをよく書かれていますが、「それを使いましょう」というそうした提案を素直に受け止めているのですか？

横尾　ええ、そうですよ。ポスターのときでも、クライアントに何を入れたいのかと聞くわけです。「何でもいいです」と言われるのがいちばん困る。

南嶌　地下の会場の横は横尾さん自身の著作でしたが、それ以外は他の人の本。けれども、横尾さんの特別なところは、そのように受けに回ったとしても、それが全部、横尾さんの著作に見えること。つまり中身をすり替えてしまうマジックがあって、全部、横尾忠則の作品として君臨しているという不思議なスイッチが働いていることに驚かされます。

横尾　そうは言っても印税は入らないですね。僕の著書に見えるのだったら、その作家と折半するとか…（笑）。まあ、そんなふうに見えますかね。

南嶌　いや、見えます。もうひとつ、僕がよく行く神田の古本屋さんは、そこのおばちゃんがいろんな古本市に出かけて、横尾さんがデザインした本を一生懸命探してくるんだそうです。それを並べると端からどんどん売れていく、と。そういうふうに横尾さんを支持する層がいるんだということを、そのおばちゃんが教えてくれたことが印象に深いですね。

Gallery Talk

Tadanori Yokoo The First Book Design Exhibition

Tadanori Yokoo, Hiroshi Minamisima

Hiroshi Minamishima As always, I see you're very busy these days. First, the opening of the Yokoo Tadanori Museum of Contemporary Art in Kobe on November 3rd. Along with that, publication of *Yokoo Theatre*, the special edition of ggg Books for which I wrote some of the text. Then there's your new book on your collages [Kokushokankokai Corporation], which doubles as a catalogue for the traveling exhibition of your collages in the U.S. Plus the special feature in *'Eureka'* magazine, and now this exhibition on your book design work. All this gives me the feeling the time's come around for a comprehensive look back on all your artistic activities to date.

Tadanori Yokoo I have a warehouse in Tokyo where I store my works, but the number of works just keeps growing and the storage costs have become enormous. So I approached the people at the Hyogo Prefectural Museum of Art and asked whether there wasn't someplace that would make for a suitable warehouse. Rather casually, they said that there are lots of vacant buildings in the prefecture, and they suggested I consult with the governor. So I went to see the governor, but he felt that an art museum would be the best place. A good idea perhaps, but I joked that even if I wanted to make a museum, there's no way it would be possible. At that point the governor said that part of the Oji Branch of the Hyogo Prefectural Museum of Art, which was under refurbishment, was vacant. "How'd that do?" he said. So I went to see it, and in terms of space it seemed just right. It took 6 years since then, and finally opened this year.

Minamishima We often hear about museums created for an artist shortly after his death. In your case, there's already a museum containing your works in Nishiwaki City, where you were born. But what does it feel like to now have an art museum named for you?

Yokoo Yes, in my case I've been given an art museum while I'm still alive. In my remarks made at the opening ceremony, I told the audience I now felt as though I had one foot in the grave. And since I feel half-dead, I said, now I no longer need to perform my social duties here on earth, so from now on I'm going to do what I truly want to.

Minamishima Death is an extremely weighty key word for you, as an artist who has found an expressive niche by putting the matter of death in the center spotlight. Since death itself never dies out, you strike me as living a life that has acquired a kind of permanence. The title of the opening exhibition at your museum – "HAN-HAN-PUKU-PUKU-HAN-PUKU" – is all about repetition. What did you have in mind?

Yokoo At the core of my creative work is the process of starting with one thing and then creating a variety of different versions of it. I may set aside a particular work for a while for a variety of reasons – because I got tired of making it, or perhaps because I'd reached a saturation point with it. In that respect, all my works are unfinished, and for that reason I sometimes start thinking about a work that I'd created at some point in the past. I get the urge to "continue" the work, and precisely because it's unfinished, the process of repetition begins, over and over again – whether I draw using the same motif, or make a copy without changing anything, or whatever. Take my "Moat" series, for example, which depicts a pink girl swimming. I've already created a number of versions, and I'll likely make more in the future. It's a declaration to myself that I just intend to keep swimming all my life, repeating what I've done over and over again.

Minamishima Here now, you're doing your first exhibition of your book design works, which surprised me. About 800 items are on display, and yet there's even more, I understand. When you're asked to design a book, is there something you always keep in mind, and do you approach such work differently from your posters?

Yokoo My approach is the same, whether it's posters or book design. In those days I would accept any job offer that came my way, never refusing a thing. Now, about 90% of my book designs are done at the request of the author; only 10%, if that, on request from the publishing firm. I continue this work to this day because authors – Jakucho Setouchi, for example – like what I do. To understand what a book is about, I ask the editors. "What's it say?" I ask them. Then I take what they tell me and focus on one point that catches my attention as my creative hint. It's an extremely cheeky way of doing things, wouldn't you say?

Minamishima So that's how it's done, is it? Many of the people who come to you with work requests are quite profound individuals – and the most profound of them all, I would say, was Yukio Mishima. Can you share any recollections about him?

Yokoo I think my first encounter was about his *Lectures in Immoral Education*. When I showed him my design, he didn't like it and asked me to do it over again. I was at a loss as to what I should do, though, and somehow Mishima-san picked up on that and he spent a lot of time looking for the answer in my earlier works. What he ultimately came up with was a photo of two women on whose nude bodies I had drawn floral designs taken from traditional playing cards. It had been shot by Kishin Shinoyama. "Use this as the cover," Mishima-san said. When I did just that, he was quite pleased. "A nice job you've done," he told me.

Minamishima In the gallery's downstairs hall, the works off to the side were your own books; all the rest were books by others. Even though you readily accept what others suggest to you, everything ends up looking as though they were your own books. It's as if there's a magical switch at work that, like magic, replaces the content and gives the upper hand to being a work by Tadanori Yokoo. It's amazing.

Yokoo Even so, I don't collect any of the royalties. You'd think that if it looks like a work by me, the author would split the royalties with me (laugh)! But do you really think they look that way?

Minamishima I do, yes. One other thing. There's a used bookshop in Kanda that I often go to, and the woman who works there told me she goes to a lot of used book fairs and hunts for books you designed. She said that as soon as she puts them on the shelf, they immediately sell out. I must tell you, I was very impressed to learn from her just how many fans of yours are out there supporting what you've produced.

Gallery Talk

テセウス・チャン：ヴェルク No.20 銀座
THE EXTREMITIES OF THE PRINTED MATTER

テセウス・チャン、田名網敬一、伊藤弘、クリス・リー、ジャクソン・タン

テセウス・チャン　今日は私がやっている仕事、そしてシンガポールにおけるデザイン状況について皆さんとお話しできることを大変うれしく思っております。

私は1997年にオフィス「WORK」を立ち上げ、現在は2000年に創刊した『WERK（ヴェルク）』に力を注いでいます。

シンガポールは現在、「デザインの時代」にあります。豊かな層が増えてきたこと、それによってより良いアートとデザイン教育が受けられる環境が整い、若者が着実に育ってきたことが背景にあります。たとえば「デザイン・シンガポール」という政府省庁の一機関が設置されるなど、長期的なヴィジョンを持ってクリエイティヴな産業に対するサポートが行われています。デザイン認知度も高まり、関係者が一致団結して、シンガポールのデザインが国際レベルに匹敵するような、そして願わくはそれを超えるようなものにするために努力を重ねています。

さて、Asylum（アサイラム）を主催するクリス・リーさんは「シンガポール・デザイン・ソサエティ」の会長も務めています。ソサエティはさまざまなプロジェクトをとおしてデザインの発展をキメ細かく見守っていこうとする独立した機関であります。

クリス・リー　私たちはこの業界で互いに10年以上かかわっていて、それぞれ自分のオフィスを構えています。4年ほど前に社会のために何か還元すべきではないかと話し合い、非営利法人の慈善団体のような独立したソサエティを立ち上げました。私たちはまず、歴史を伝えなければ未来はないと感じてさまざまなものをアーカイブする作業に取り組みました。二つ目はプロモーション、そして新世代の教育です。三つ目は、お互いがやってきたことを認め合うこと。アーティストが一体となっていくことが最後の目的として挙げられます。経済的に困窮している学生に奨学金を提供する活動も行い、出版活動では『The Design Society Journal』という雑誌を年2回、出しています。そして、さまざまなプロジェクトも行っています。たとえば昨年、日本で大震災が起きた際には、Tシャツをつくりました。オンラインで売って、その売上金を赤十字社に寄付しました。

テセウス　クリス、ありがとう。同じように自由を求めてフリーダム・ファイターになったもうひとりにジャクソン・タンさんがいます。主宰しているPHUNK（ファンク）においての、デザインとアートのクロスオーバーについて話していただければと思います。

ジャクソン・タン　PHUNKを設立したのは1994年です。はじめは何をやりたいのか分からず迷いました。ロックンロールの音楽活動にも手を染めましたが、その才能に限界を感じ、ビジュアルデザインに移ることにしたわけです。

当時のシンガポールは、デザイナーの仕事といえば商業的なパンフレットをつくったり、アニュアルレポートのデザインをしたりするぐらいしかなかった。国際的に活躍しているデザイナーはテセウスさんぐらい。ですから、クリエイターとして自己表現をする機会はほとんどありません。そんなときに図書館で田名網先生の本を見つけて、デザインとアートをクロスオーバーする作品をつくっていることに啓発されるわけです。また、groovisionsの伊藤さんたちの作品、とくにオリジナル・キャラクターに惹かれました。

テセウス　私たちが尊敬してやまない田名網先生、そして伊藤さんに、シンガポールでコラボレーションをしたときの印象についてお聞きしたいと思います。

田名網敬一　僕は2010年にシンガポールで、PHUNKとテセウスのふた組と連続してコラボレーション作品をつくりました。最初にPHUNKの4人組と一緒に作ったのは、日本で言うところの立版古（たてばんこ）という、紙を切り抜いて組み立てて歌舞伎舞台や建物などをつくる伝統的な技法です。次はテセウスのスタジオで、テセウスのギター演奏と僕の映像のライブをしたんです。非常に面白かった。その後に、『WERK』をいっしょにつくりました。最近の仕事ではセレクトショップの「オンペダー」のカタログ。僕の60年代のものと近作を使ってテセウスがデザインした。非常に素晴らしい出来で、僕もうれしかった。

『WERK』の僕の特集号では、表紙や背から裏表紙まで、彼がコンテや鉛筆やクレヨンで全部塗って、文字をフロッタージュで浮かび上がらせるという手法をとった。手で触った痕跡が付着することで、長い時間を経て本がその人固有のものとして成立するというのがテセウスのアイデア。今、僕の机の上にあるその号は、刻々と変化していく様が実に面白い。

僕はシンガポールのデザインの現状をそれほどよく知らない。でも、テセウスのように五感を使ったデザインは日本にあまりない。日本のデザイナーが失ってしまったものを、テセウスの仕事から学べるのではないかと思っています。

伊藤弘　僕は2回ほど展覧会をする機会がありました。最初に紹介してもらったのがテセウスさん。テセウスさんのスタジオに遊びに行ったり、その後でテセウスさんがプロデュースし、準備していた「コム・デ・ギャルソン ゲリラストア＋65」に僕らの商品を置いてもらったりしました。そのとき、行った先々で強い印象を受けたグラフィックがあって、それが実はジャクソンさんたちのPHUNKの作品だったことをよく覚えています。

2回目の展覧会のときに、クリスさんにもお会いできました。なかなか僕らだけで会場をうまく見せることができなかったので、3人に協力してもらって何とか持たせることができたという経験があって、とてもうれしかったですね。

シンガポールのデザインの印象は、ここにいる3人の活動に代表されるように、国のデザイン全体を良くしていこうとする情熱に健全なベクトルを感じて、僕は羨ましいものを感じます。非常に前向きで健康的なムーブメントです。しかもシンガポールは、よりアジア的な部分とインターナショナルでグローバルな部分との使い分けがとても上手でシームレスな感じを受けますね。

テセウス　田名網先生、伊藤さん、ありがとうございました。今回、最新の『WERK』20号を持ってまいりました。この「GINZA（銀座）」特集号でもさまざまな実験的なことをやっております。日本の折り紙からインスピレーションを受けてカバーを折るといったことも。どんなにテクノロジーが進歩しても、アーティストとしてのスキルを使い、ハンドワークを続けていかなければならないと強く思っています。

Gallery Talk

Theseus Chan: WERK No.20 GINZA
THE EXTREMITIES OF THE PRINTED MATTER

Theseus Chan, Keiichi Tanaami, Hiroshi Ito, Chris Lee, Jackson Tan

Theseus Chan It's a tremendous pleasure and honor to be able to be here to share both my work and views of the design scene in Singapore.

I set up my office, WORK, in 1997, and today I focus my creative effort on "WERK," the publication I launched in 2000.

Singapore today is in the age of design. There are a number of reasons for this. First, increasing affluence and the environment it has created have enabled better educational opportunities in art and design, resulting in a steady increase in the number of talented young artists and designers. Also, today there is strong support for the creative industries based on a long-term vision – one example being the establishment of the Design Singapore Council as a national agency for design. Initiatives are now being taken to enhance public recognition of design and to have all those involved bond together to elevate design in Singapore to the global level or, if possible, above that level.

Chris Lee, the founder and creative director of Asylum, is also the president of Singapore's Design Society. The Design Society is an independent organization that seeks to promote and protect developments in design through a variety of projects.

Chris Lee Each of us has been in this industry for more than 10 years, and we all have our own offices. About 4 years ago we got together and discussed how we might pay back what we see as our debt to society, and with that in mind we set up the Design Society as an independent non-profit organization, sort of like a philanthropic group.

First of all, we felt there could be no future in design unless we conveyed what had transpired historically, so we began work in documenting and archiving. Second, we aim to promote Singapore design and to educate the next generation. Third, we want to celebrate and recognize each other's achievements. And our fourth goal is community and outreach, to promote greater connectedness among designers. The Design Society today awards scholarships to students with economic needs, and twice a year we publish a magazine called "The Design Society Journal." We're also undertaking a variety of projects. Last year, for example, at the time of the earthquake disaster here in Japan, we made T-shirts and sold them online, and donated the proceeds to the Red Cross.

Theseus Thank you, Chris. Another freedom fighter on a quest for freedom is Jackson Tan. I would like to ask him to say something, as director of PHUNK, about the crossover trend between design and art.

Jackson Tan I set up PHUNK in 1994. In the beginning I wasn't sure exactly what I wanted to do with my life. I got involved in rock 'n' roll for a while, but then felt that my talent in that area was limited, and I switched to visual design.

In Singapore in those days, about the only work available as a designer was making commercial pamphlets, designing annual reports and things like that. The only designer who was active on the international scene at the time was Theseus. So as creative artists we had almost no opportunities to express ourselves. Then one day I came across a book of Tanaami-sensei's in the library, and I discovered how he creates works that cross over between design and art. I was also attracted to the works of Ito-san and his colleagues at groovisions, especially their original mascot characters.

Theseus I'd like to ask Tanaami-sensei and Ito-san, both of whom I respect deeply, to tell us something about their impressions of their collaborative work in Singapore.

Keiichi Tanaami In 2010 I collaborated with PHUNK in Singapore, and then right after that with Theseus. Together with the four members from PHUNK I created what's known here in Japan as "tatebanko," a traditional art form in which paper cutouts are made and assembled together to re-create a Kabuki stage, a building, and other things like that. After that, at Theseus's studio I collaborated in a live performance by Theseus playing guitar while a video I created was being shown. It was really interesting. After that I collaborated on "WERK." Most recently Theseus and I worked together on a fashion catalog for "On Pedder." Theseus did the design work using recent drawings of mine along with works from the 1960s. He did a truly brilliant job, and I'm happy to have been part of it.

For my special issue of "WERK," Theseus used Conté, pencil and crayon for the whole front cover, spine and back cover, and used frottage to bring the title and other words into relief. Since traces are left each time someone handles the magazine, Theseus believes that over time each copy of the magazine becomes unique to its owner. The volume I have on my desk changes moment by moment, which I find quite interesting. It's Theseus at his very best.

I'm not all that familiar with the current state of Singapore's design scene. What I do know, though, is that there aren't many design works in Japan like Theseus's, which make us use all five of our senses. I think Japanese designers could learn from Theseus's work what's been lost here in Japan.

Hiroshi Ito I had the opportunity to hold an exhibition in Singapore twice. The first person I was introduced to was Theseus. I visited him at his studio, and then later we had our works featured in "Commes des Garcons Guerrilla Store +65," which Theseus produced and prepared. At the time, I was deeply impressed by the graphics I saw at each venue, and I remember well that they were works by Jackson-san and his colleagues at PHUNK.

At the time of my second exhibition, that's when I met Chris. Since we weren't able to show the place off well just on our own, with the cooperation of these three we were able to pull things off, an experience I'm very pleased to have had.

As for my impression of Singapore design, as the activities of these three designers with us today demonstrate, I sense a strong passion to improve Singapore's design as a whole, a stance that fills me with envy. It's an extremely forward-looking and healthy movement. I also get the impression that Singapore is very good at separating its more Asian elements and its international, global elements.

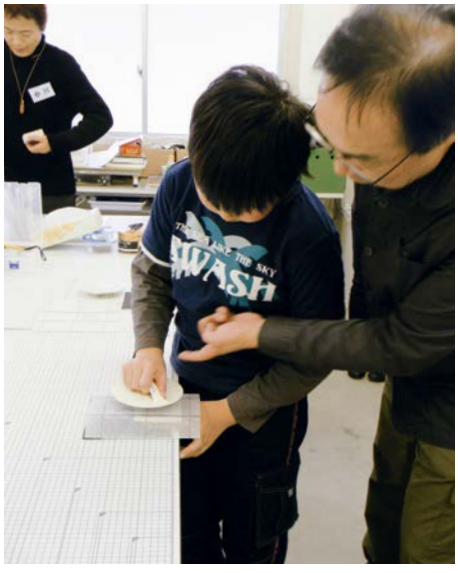
Theseus Tanaami-sensei, Ito-san, thank you both very much. I've brought along the latest edition of "WERK," No.20. In this special feature on the Ginza also, we do a variety of experimental things, like folding the cover – which was inspired by Japanese origami. I strongly believe that no matter how much technology might advance, we have to continue using our skills as artists and work by hand.

CCGA Print Studio Workshops

CCGA 版画工房 ワークショップ

CCGAが立地する須賀川市は、日本で初めて西洋式銅版画の制作を試みた一人である亜欧堂田善ゆかりの地として従来より版画をテーマにした町興しを行なってきたが、専用の設備を要する銅版画制作を体験できる施設が市内にないため、CCGAでの版画ワークショップ開催を求める声が市民から寄せられていた。CCGAでは版画教育の拠点としての機能を強化し、グラフィックアートの普及振興に貢献するために、小規模ながらも本格的な版画制作を行うことのできる工房を2012年に開設、市民向け版画ワークショップの定期開催を開始した。版画工房にはエッチング用プレス機のほか、大日本印刷の前身である秀英舎で100年以上前に実際に使われていたアルビオン・プレス（活版用手動平圧印刷機）を再生して導入し、複数の版種に対応している。ワークショップは1講座で4週連続という日程にもかかわらず定員を超える応募があり、受講した方々からは高い評価をいただいた。

Sukagawa, where CCGA is located, has a long history of vitalizing its economy through art prints owing to the city's connections to Aodo Denzen (1748-1822), one of the first artists in Japan to experiment in the creation of Western-style copperplate prints. The city, however, has lacked the kind of facility needed to enable production of copperplate prints, which require special equipment, so local citizens approached CCGA with a request to organize print workshops. In response CCGA, eager to strengthen its function as a base for education in prints as well as to contribute to the expansion and promotion of graphic art, established a studio of modest scale in 2012 where print production can be undertaken in earnest, and began hosting print workshops on a regular basis. The studio is equipped to accommodate the production of various print types: besides an etching press it also has a refurbished Albion press – a manually operated platen letterpress – that was actually used more than 100 years ago at Shueisha, the forerunner of today's Dai Nippon Printing. The newly launched workshops each consist of four weekly sessions.



2012年度 第1回 エッチング講座

日程：2012年9月29日（土）、10月6日（土）、
10月13日（土）、10月20日（土） 全4日間
講師：三浦麻梨乃（銅版画家）
受講者数：9名

2012 Workshop No.1: Etching

Dates : September 29 (Sat), October 6 (Sat),
October 13 (Sat), October 20 (Sat)
Instructor : Marino Miura, copperplate print artist
Number of students : 9

2012年度 第2回 木口木版講座

日程：2012年11月10日（土）、11月17日（土）、
11月24日（土）、12月1日（土） 全4日間
講師：野口和洋（木口木版画家）
受講者数：11名

2012 Workshop No.2: Wood Engraving

Dates : November 10 (Sat), November 17 (Sat),
November 24 (Sat), December 1 (Sat)
Instructor : Kazuhiro Noguchi, wood engraving artist
Number of students : 11

Publications 2012–2013

出版活動

■ Graphic Art & Design Annual 11-12

■ ggg Books 101　ジャンピン・ヘ（電子書籍版も刊行）
■ ggg Books 102　テセウス・チャン
■ ggg Books 103　カリ・ピッポ
■ ggg Books 別冊8　横尾劇場 演劇・映画・コンサート ポスター
■ ggg Books 別冊9　松永 真

■ KIGI Graphic papers & stickers

■ THE POSTERS 1983-2012
世界ポスタートリエンナーレトヤマ受賞作品

■ ALLIANCE GRAPHIQUE INTERNATIONALE JAPAN 2012

■ Shin Matsunaga POSTER 100 Exhibition　作品解説

■ DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品 V
LIFE 永井 一正ポスター展

■ ggg Books 101　Jianping He　* Published along with e-book version.
■ ggg Books 102　Theseus Chan
■ ggg Books 103　Kari Piippo
■ ggg Books Special Edition-8　Yokoo Theatre:
Tadanori Yokoo's Performance, Film, and Concert Posters
■ ggg Books Special Edition-9　Shin Matsunaga

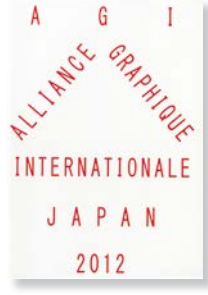
■ KIGI Graphic papers & stickers

■ THE POSTERS 1983-2012
–The Prize-Winning Works from The International Poster Triennial in Toyama–

■ ALLIANCE GRAPHIQUE INTERNATIONALE JAPAN 2012

■ Shin Matsunaga POSTER 100 Exhibition Pamphlet

■ DNP Graphic Design Archives Collection V
LIFE – Kazumasa Nagai Poster Exhibition



3

アーカイブ事業

Archiving

DNP Graphic Design Archives

DNP グラフィックデザイン・アーカイブ

◆ポスターアーカイブ（2013年3月現在）

① 収蔵作家：214名（国内作家：108名、海外作家106名）
② 総点数：10,972点
③ 2012年4月～2013年3月の受入れ状況

＜日本＞

・五十嵐 威暢	1点
・石岡 瑛子	354点
・葛西 薫	1点
・勝井 三雄	2点
・K2	1点
・佐藤 可士和	5点
・U.G. サトー	1点
・澤田 泰廣	2点
・杉崎 真之助	2点
・田名網 敬一	85点
・新島 実	1点
・服部 一成	1点
・原 研哉	1点
・松井 桂三	2点
・松永 真	68点
・三木 健	2点
計	529点

＜海外＞

・マジド・アバッシ	1点
・フィリップ・アペロワ	1点
・ピエール・ベルナール	1点
・ミシェル・ブーヴェ	1点
・ウラジーミル・チャイカ	1点
・アイヴァン・チャマイエフ	1点
・シアン	2点
・ジヤンピン・ヘ	44点
・キット・ヒンリック	1点
・シーモア・クワスト	1点
・フリーマン・ラウ	1点
・トミー・リー	2点
・ウーヴェ・レシュ	1点
・ワン・ミン	1点
・ラース・ミュラー	1点
・イストバン・オロス	1点
・カリ・ピッポ	82点
・グンター・ランボー	3点
・ヤン・ライリッヒ	1点
・レオナルド・ソノリ	1点
・ステファン・サグマイスター	1点
・ポーラ・シェア	1点
・ラルフ・シュライフォーゲル	1点
・カン・タイクン	1点
・デイヴィッド・タルタコーバ	1点
・ニクラウス・トロックスラー	1点
計	154点

◆アーカイブ作品寄贈

① ノイエ・ザムルング（ミュンヘン国際デザイン美術館）
2012年10月
田中 一光ポスター 418点
永井 一正ポスター 418点
福田 繁雄ポスター 418点

② 奈良県立美術館「田中一光デザインの世界－創意の軌跡－」展
2013年1月12日（土）～3月20日（水）
主催：奈良県立美術館、産経新聞社
協賛：大日本印刷株式会社
ポスター・版画 130点（版画・原画等資料 36点 貸出）

③ 岩手県立美術館
2013年3月
福田 繁雄ポスター 400点

◆アーカイブ作品貸出

① 21_21 DESIGN SIGHT「田中一光とデザインの前後左右」展
2012年9月21日（金）～2013年1月20日（日）
主催：21_21 DESIGN SIGHT
公益財団法人三宅一生デザイン文化財団
特別協力：公益財団法人DNP文化振興財団
大日本印刷株式会社
ポスター 80点、版画 26点、書籍 111点、
その他、版下・原画資料等 250点

② 埼玉県立近代美術館「日本の70年代 1968–1982」展
2012年9月15日（土）～11月11日（日）
田中 一光ポスター 11点
浅葉 克己ポスター 1点

◆Poster Archives (as of March 2013)

① Artists represented: 214
(108 domestic, 106 from overseas)
② Items in collection: 10,972
③ Items received between April 2012 and March 2013

＜Domestic＞

・Takenobu Igarashi	1
・Eiko Ishioka	354
・Kaoru Kasai	1
・Mitsuo Katsui	2
・K2	1
・Kashiwa Sato	5
・U.G.Sato	1
・Yasuhiro Sawada	2
・Shinnoske Sugisaki	2
・Keiichi Tanaami	85
・Minoru Niijima	1
・Kazunari Hattori	1
・Kenya Hara	1
・Keizo Matsui	2
・Shin Matsunaga	68
・Ken Miki	2
Total	529

＜Overseas＞

・Majid Abbasi	1
・Philippe Apeloig	1
・Pierre Bernard	1
・Michel Bouvet	1
・Vladimir Chaïka	1
・Ivan Chermayeff	1
・Cyan	2
・Jianping He	44
・Kit Hinrichs	1
・Seymour Chwast	1
・Freeman Lau	1
・Tommy Li	2
・Uwe Loesch	1
・Wang Min	1
・Lars Müller	1
・István Orosz	1
・Kari Piippo	82
・Gunter Rambow	3
・Jan Rajlich sen.	1
・Leonardo Sonnoli	1
・Stefan Sagmeister	1
・Paula Scher	1
・Ralph Schraivogel	1
・Kan Tai-Keung	1
・David Tartakover	1
・Niklaus Troxler	1
Total	154

◆Donations to the Archives

① Die Neue Sammlung
(The International Design Museum, Munich)
October 2012
418 Ikko Tanaka posters
418 Kazumasa Nagai posters
418 Shigeo Fukuda posters

② "The Design World of Ikko Tanaka –The Ridge of Ingenuity–"
Exhibition at Nara Prefectural Museum of Art
January 12 – March 20, 2013
Organizers: Nara Prefectural Museum of Art
Sankei Shimbun Co., Ltd.
Support: Dai Nippon Printing Co., Ltd.
130 posters and prints
36 original drawings and other materials (loan)

③ Iwate Museum of Art
March 2013
400 Shigeo Fukuda posters

◆Loans of Archived Works

① "Ikko Tanaka and Future / Past / East / West of Design"
Exhibition at 21_21 DESIGN SIGHT
September 21, 2012 – January 20, 2013
Organizers: 21_21 DESIGN SIGHT
The Miyake Issey Foundation
Special Cooperation: DNP Foundation for Cultural Promotion
Dai Nippon Printing Co., Ltd.
80 posters, 26 prints, 111 books,
250 pasteups, original drawings and other materials

② "The '70s in Japan: 1968-1982"
Exhibition at The Museum of Modern Art, Saitama
September 15 – November 11, 2012
11 Ikko Tanaka posters
1 Katsumi Asaba poster

The Design World of IKKO TANAKA –The Ridge of Ingenuity–
Nara Prefectural Museum of Art

January 12 – March 20, 2013

田中一光 デザインの世界 –創意の軌跡–　　奈良県立美術館

Ikko Tanaka and Future / Past / East / West of Design
21_21 DESIGN SIGHT

September 21, 2012 – January 20, 2013

田中一光とデザインの前後左右　　21_21 DESIGN SIGHT

DNP Graphic Design Archives

Eiko Ishioka Poster Archives

石岡瑛子ポスターアーカイブ

姉貴の他界後、作品整理をしていて現物が発する力強さを再認識しました。それは、印刷されたモノの中に、制作者の魂が閉じ込められているからでしょう。表現の厚み、深さ、繊細さは、作品集でも、ましてやデジタルでは決して読み取れないものです。アーカイブは、時代の記録である以上に、普遍的なクリエイティブの意味を感じさせてくれる貴重な場です。メッセージは時代を超え、時間とリンクしながら新たな発想を生みだす起爆剤になりえるからです。現物に触れるチャンスを作っているアーカイブで、同時体験をしていない次世代の人が受ける刺激は、計りしれない程大きいはずです。

石岡怜子

As I set about organizing my sister's works after she passed away, I became aware again of the powerful strength exuded by her originals. I imagine it's because printed works are imbued with the spirits of those who produce them. Depth, density and delicacy of expression cannot be perceived from published anthologies, no less from works in digital form.
Archives, more than serving as a record of their times, are a precious venue that enables us to understand the universal meaning of creativity. The messages they convey, though linked to a certain period, transcend that time and have the power to trigger new concepts. This archive, by offering the opportunity to come in touch with the works of Eiko Ishioka in their original form, will surely provide an immeasurable stimulus to the next generation who did not experience her work in real time.

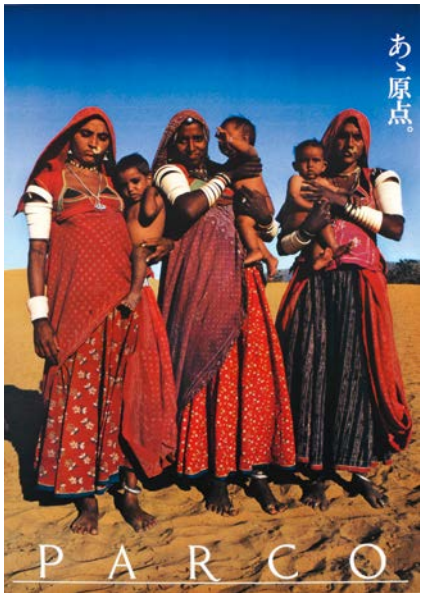
Ryoko Ishioka

1975

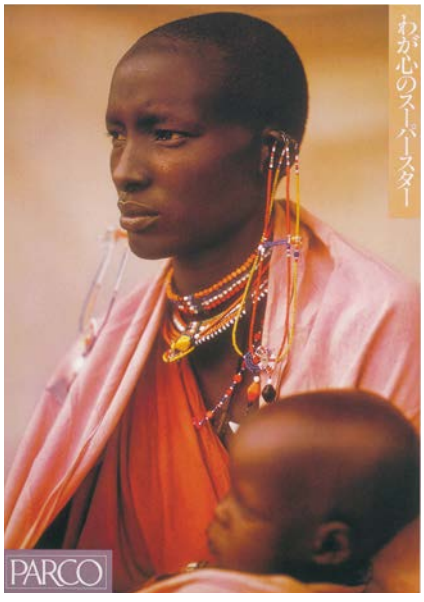
1975

1976

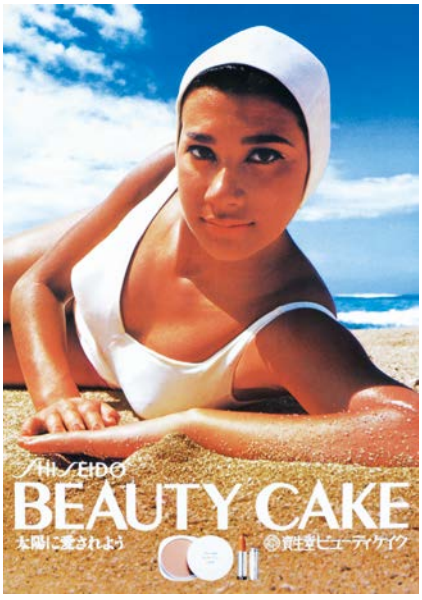
1977



1977

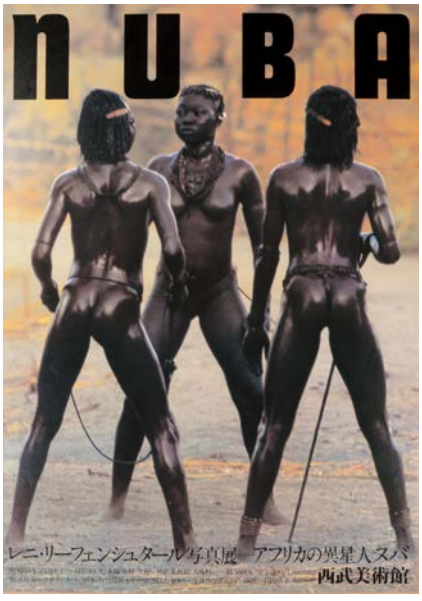


1978



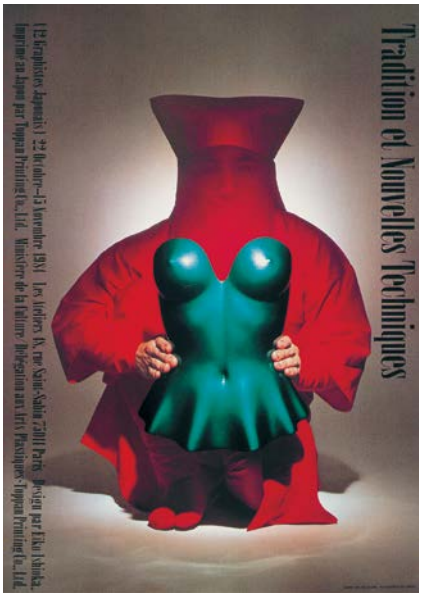
1966

1973



1980

1978



1984

1979

4

国際交流事業

International Exchange

ある展覧会が触発したグラフィックデザインのコレクションと出版への取り組み

ワン・シュ
OCT Art & Design Gallery 館長

今年の6月12日から、第7回国際グラフィックデザイン・ビエンナーレ（IGDB7）が寧波市で開催されます。今回のビエンナーレでは、「リミックスト・ペンタグラム」に捧げる回顧展など、さまざまな展示が予定されていますが、そこに流れるテーマは、「独立と協調」です。

このイベントを担当している学芸員、ジアン・ホアとパン・チンは、独立系のグラフィックデザイナーであり出版者でもある私に敬意を表して、私が1980年代からデザインしてきた出版物を紹介する回顧展を企画しており、その展覧会に私を招待してくれました。ペンタグラムに関する展覧会に参加することは、私にとっては大変名誉なことですが、これは一切本を書かない、また展覧会に出品しないという私自身の誓いを破ることでもあります。

1986年に、私は幸運にも、ただひとりの中国人グラフィックデザイナーとして、香港で仕事をすることになりました。その頃、デザインに関する情報を入手するには、中国よりも香港にいる方が有利でした。そういうわけで、私は『デザイン・エクスチェンジ』というデザインを紹介する雑誌の編集・出版を始め、不定期に中国にいる仲間たちに郵送していました。1980年代から1990年代のことを思い起こすと、私は今でも興奮を覚え、まったく後悔することのない充実した生活を送ったと感じて、実に幸福な気持ちになります。21世紀の到来とともに、私の情熱も落ち着きました。そして世界中に広がる新しいデザインの革命を私はただ静かに見ていましたが、それはあまりにも凄まじいものだったので、傍観し続けているわけにはいかなくなったのです。

2011年7月9日、OCT Art & Design Galleryで、「プッシュピン・パラダイム展」が開催されました。この展覧会はもともとギンザ・グラフィック・ギャラリー（ggg）で企画・開催されたものでした。そして、ポール・デイヴィスの妻であり、この展覧会を実現した立役者であるマーナ・デイヴィス夫人が、この展覧会を中国でも開催したいという手紙をくれました。この「プッシュピン・パラダイム展」を通じて、私はgggとの関係を深めることができました。

開会式典でポール・デイヴィス氏はこう述べました。「この展覧会は1960年代、1970年代の作品を紹介しています。この時期、アメリカの文化と考え方には大きな変化がありました。人々は新しいスタイルの音楽、新しいヘアスタイル、新しいファッションを求めました。今日ご来場いただいている若い方々にとっては、私たちの作品はすでに遠い歴史の一部になっているのかもしれません。しかし、これらの作品を見るときに、創作を始めたときの私たちのエネルギーと喜び、そして身震いするほどの興奮を感じてもらえたら幸いです」。

このポール・デイヴィス氏の言葉は、私をおおいに触発しました。私はまるであの頃に戻ったような気持ちになりました。そして、これまでのグラフィックデザイン作品のコレクションを始めたいという衝動に駆られました。この思いは、すでに1970年代後半に、グラフィックデザインの仕事をしていて、『グラフィス』誌を見て感動したときに芽生えていたものです。私はこの『グラフィス』誌の中国版を2刊発行しましたが、残念ながら、『アイデア』誌のようには生き延びることができず、数年前に廃刊になってしまいました。1990年代には、gggの『ggg Books』を全シリーズ購入しましたが、いずれも素晴らしい作品で心からの称賛に値するものです。

2012年、長い間休眠状態だった私は、ようやく活動を開始し、まるで運命に導かれるかのようにOCT Art & Design Galleryの館長になりました。2010年秋にポルトガルのポルトで開催されたAGI（国際グラフィック連盟）総会の際に、私は浅葉克己氏とDNP文化振興財団の北沢永志氏と率直かつ実り多い話し合いをし、将来的に交流プログラムを実施する可能性について意見交換しました。そのとき、東京TDC展を中国で開催したいという希望を伝えましたが、それがやがて現実のものになるとはそのときは思ってもいませんでした。

2013年3月2日、東京TDC展が東京タイプディレクターズクラブとDNP文化振興財団の協力のもと、ついにOCT Art & Design Galleryで開催されました。展覧会初日には、浅葉克己氏が卓球のボールを卓球台にサーブして開会を宣言しました。この展覧会は、古くからの仲間と集い、新たな交流の輪を広げる楽しい機会となりました。このような楽しい光景も、これから何年も経てば、やがては過去の出来事に変わるのかもしれませんが、そのことを思い出すとき、人々はきっととても楽しい気持ちになることでしょう。このOCT Art & Design Galleryでの東京TDC展の会期中に、私は北沢氏に、『ggg Books』シリーズの特別版を中国で出せないだろうかと申し出ました。

実は1998年の上海でのある嵐の夜、私はグラフィックデザイン界の巨匠である田中一光氏を夕食にお招きする機会に恵まれました。その席で私たちは将来の中国・日本間のグラフィックデザインの交流について話し合いましたが、2002年、私は田中氏の突然の訃報を知らされました。私が今年、北沢氏に『ggg Books』シリーズの中国版を出版したいと打ち明けたのは、私個人の希望でもありますが、田中一光氏を追悼する気持ちがあったからです。

2013年5月10日

Collections and Publications Inspired by an Exhibition

Wang Xu

Executive Director of OCT Art & Design Gallery

On June 12th this year, the 7th International Graphic Design Biennial (IGDB7) will be held in Ningbo City. This Biennial will feature a series of exhibitions including a review exhibition devoted to the Remixed Pentagram. The theme of the exhibition series is independence and coordination.

Jiang Hua and Pan Qing, the two curators for the event, invited me to join the exhibition, which is planned to showcase the publications I have designed since the 1980s and serve as a review exhibition in honor of me as an independent graphic designer and independent publisher. Being a part of the exhibition with Pentagram would certainly be a huge honor for me, but it would also breach my own vow of not writing any books or being on any exhibitions.

Back in 1986, I was lucky to be the only Chinese graphic designer assigned to work in Hong Kong. The design information then in Hong Kong was better than that of the Mainland, thus I began to edit and publish a magazine called "Design Exchange" and mailed them to my colleagues in the Mainland at irregular intervals. Now, whenever I think of the days in the 1980s and 1990s, I would still revel in ecstasy and utter happiness, feeling that I have lived a fulfilled life without any regrets behind. With the advertent of the 21st century, my passion cooled down. I quietly observed another design revolution sweeping across the world, a revolution so fierce that I myself couldn't stay away from it.

On July 9th, 2011, Push Pin Paradigm Exhibition was staged in OCT Art & Design Gallery. The exhibition was originally held at ginza graphic gallery. However, Paul Davis's wife, Mrs. Myrna Davis, who was a key figure in making the exhibition possible, wrote to me and told me that she wanted to travel the exhibition to China. Through Push Pin Paradigm Exhibition, I have developed more intimate ties with ginza graphic gallery.

At the opening ceremony, Mr. Paul Davis said, "This exhibition is to showcase works from the 1960s and 1970s. This period witnessed a big change in the cultures and ideas of the Americans. People began to chase after new music styles, new hairstyles and new fashion. To most young friends here today, our works may point to a part of a distant history. But when you see these works, I hope you can still feel our energy, joy and thrill at the outset of their creation."

Mr. Paul Davis's words at the opening ceremony inspired me deeply. I felt like returning to those years. I was seized by an urge to start collecting historic graphic design works. Such an idea can be traced back to the late 1970s, when I was first amazed by the "Graphis" magazine in my graphic design work. I even published two issues of Chinese edition of "Graphis," which, to my regret, stopped circulation several years ago, unable to survive to this day like the "IDEA" magazine. In the 1990s, I purchased a whole set of ggg Books from ginza graphic gallery. It brought me such immense joy and admiration.

In 2012, I began to wake up from dormancy. As if summoned by destiny, I became the Executive Director of OCT Art & Design Gallery that year. I recalled that at the AGI Congress held in Porto, Portugal in the autumn of 2010, I had a candid and rewarding discussion with Mr. Katsumi Asaba and Mr. Eishi Kitazawa, General Manager of ginza graphic gallery. We exchanged ideas on the possibility of future exchange programs. I expressed my hope to see a Tokyo TDC exhibition in China. I never thought that such a proposal would translate into reality some day.

On March 2nd this year, Tokyo TDC Exhibition was finally staged at OCT Art & Design Gallery thanks to the joint efforts of Tokyo TDC and ginza graphic gallery. On the opening day, Mr. Katsumi Asaba declared the opening of the exhibition by serving a ball (a ping-pong ball on the table). The exhibition was a happy gathering of both old and new friends. Maybe, such a happy scene would eventually become history many years from now, but people will still find it quite rejoicing when recalling it. During the Tokyo TDC Exhibition at OCT Art & Design Gallery, I informed Mr. Eishi Kitazawa of my intention to build a collection of ggg Books.

On a stormy evening in Shanghai in 1998, I had the privilege of inviting Mr. Ikko Tanaka, a towering figure in graphic design, to join me for dinner. During the dinner, we kept discussing the future of graphic design exchanges between China and Japan. In 2002, I was informed of his sudden demise. It was in memory of him and also out of my personal will that I unveiled to Mr. Eishi Kitazawa my plan of publishing a Chinese edition of the ggg Books this year.

May 10, 2013

“Tokyo TDC 2012” Traveling Exhibition at The OCT Art & Design Gallery in Shenzhen, China

March 2 – May 21, 2013

「TDC展 2012」巡回展　中国・深圳 The OCT Art & Design Gallery

TDC（東京タイプディレクターズクラブ）主催による「東京TDC賞」は、その20年以上にもおよぶ堅実な活動により、今や日本のみならず、世界各国のデザイナーから注目される唯一無二の国際コンペティションとなった。本年、その個性豊かな受賞作品の数々を紹介するTDC展が、王序（ワン・シュ）氏［The OCT Art & Design Gallery館長］の強い要望により、はじめて中国へ巡回された。

3月2日のオープニング当日、浅葉克己氏［東京TDC理事長］、照沼太佳子氏［東京TDC事務局長］をはじめ、カン・タイクン氏、アラン・チャン氏、スタンリー・ウォン氏他、中国の第一線で活躍するデザイナーによるレクチャーおよびグループ・ディスカッションが開催され、教育関係者や学生を中心に、中国各地から大勢の聴講者が来館し、盛大な開会イベントとなった。

The Tokyo TDC Awards, sponsored by the Tokyo Type Directors Club, today, as a result of the organization’s more than 20 years of solid and steady activity, constitute an international competition unequaled in the field, accolades that are a focus of attention among designers not only from Japan but around the world. This year the Tokyo TDC Exhibition, introducing many of the unique works that have won these coveted awards, traveled to China for the first time in response to a strong request from Wang Xu, Executive Director of The OCT Art & Design Gallery. On March 2, the opening day, lectures and group discussions were held by TDC Chair Katsumi Asaba, TDC Secretarial Director Takako Terunuma and some of China’s foremost designers, including Kan Tai-Keung, Alan Chan and Stanley Wong. The event was a great success, drawing a large number of attendees, especially educators and students, from all over China.

AGI Congress Hong Kong 2012

September 24 – 29, 2012

AGI総会香港2012

本年のAGI総会は、2006年の東京／京都大会以来、6年ぶりのアジア地域での開催となった。Heaven & Hell（天国と地獄）というテーマの下、東西の文化が交差し、新旧混じりあいながら多種多彩な面々をみせるエネルギーに満ち溢れた香港に、世界各国のデザイナーが集結した。例年、丸2日かけて行われる会員によるレクチャーは、今回アジア地域のスピーカーが充実し、日本からも浅葉克己代表をはじめ、勝井三雄氏、佐藤晃一氏、三木健氏、杉崎真之助氏の5名が各々の観点からの「デザインにおける天国と地獄」を語った。非英語圏の会員が年々増加するにつれ、問題となりつつある“言葉の壁”を解決するため、AGIレクチャーに、はじめて同時通訳システムが導入されたのは、画期的であった。
2010年より3年間会長を務めたポーラ・シェア氏は、この総会で任期を終え、スイスのラース・ミュラー氏へ引き継ぎを行った。今年、日本から新たに会員となったのは、廣村正彰氏と福島治氏の2名。

This year's Alliance Graphique Internationale (AGI) Congress took place in Asia for the first time in six years, the previous occasion having been the event in Tokyo and Kyoto in 2006. The venue was Hong Kong, crossroads of Eastern and Western cultures, where the old mixes with the new, a city brimming with energy and diversity. Designers gathered from all over the world for this event held under the theme of “Heaven & Hell.” As always, two full days were dedicated to lectures by AGI members, only this time the focus was clearly on speakers from the Asia region. Japan was represented by five speakers, including Katsumi Asaba, who serves as representative of the Japanese members, along with Mitsuo Katsui, Koichi Sato, Ken Miki and Shinnoske Sugisaki, and they each spoke about “heaven and hell in the context of design” from their personal perspectives. An epoch-making change was the introduction, for the first time, of a simultaneous translation system for the AGI lectures – a move taken to overcome the burgeoning language barrier arising as more and more AGI members are drawn each year from countries outside the English-speaking realm. Paula Scher, who has been the AGI president since 2010, finished her three-year tenure at the Congress, where she passed the baton on to Lars Müller of Switzerland. From Japan, two new members were welcomed into AGI this year: Masaaki Hiromura and Osamu Fukushima.

AGI日本会員［2013年4月現在：現役会員］（入会年順）

永井 一正（1966）	中島 英樹（1998）	松下 計（2003）
五十嵐 威暢（1981）	新島 実（1998）	葛西 薫（2006）
勝井 三雄（1984）	U.G.サトー（1998）	立花 文穂（2006）
中村 誠（1985）	佐藤 卓（1998）	服部 一成（2011）
浅葉 克己（1987）*日本代表	蝦名 龍郎（2001）	平野 敬子（2011）
松永 真（1988）	原 研哉（2001）	永井 一史（2011）
佐藤 晃一（1988）	北川 一成（2001）	佐藤 可士和（2011）
サイトウ マコト（1994）	長友 啓典（2001）	廣村 正彰（2012）
松井 桂三（1997）	澤田 泰廣（2001）	福島 治（2012）
三木 健（1998）	杉崎 真之助（2001）	

Japanese members of AGI [as of April 2013]
(listed by date of induction)

Kazumasa Nagai（1966）	Kenya Hara（2001）
Takenobu Igarashi（1981）	Issay Kitagawa（2001）
Mitsuo Katsui（1984）	Keisuke Nagatomo（2001）
Makoto Nakamura（1985）	Yasuhiro Sawada（2001）
Katsumi Asaba（1987）*Japan representative	
Shin Matsunaga（1988）	Shinnoske Sugisaki（2001）
Koichi Sato（1988）	Kei Matsushita（2003）
Makoto Saito（1994）	Kaoru Kasai（2006）
Keizo Matsui（1997）	Fumio Tachibana（2006）
Ken Miki（1998）	Kazunari Hattori（2011）
Hideki Nakajima（1998）	Keiko Hirano（2011）
Minoru Niijima（1998）	Kazufumi Nagai（2011）
U.G. Sato（1998）	Kashiwa Sato（2011）
Taku Satoh（1998）	Masaaki Hiromura（2012）
Tatsuo Ebina（2001）	Osamu Fukushima（2012）

“phono / graph – sound · letters · graphics –” at Dortmund U

September 8 – October 21, 2012

ddd 企画展ドイツ巡回「phono / graph ― 音・文字・グラフィック ―」展

1

2

3

4

5

6

7

藤本由紀夫氏をはじめとする5組のアーティスト・クリエーターたちが、視覚表現、聴覚表現といったジャンルにこだわることなく、軽やかに音・文字・グラフィックの表現を繰り広げたdddギャラリー第178回「phono/graph」展。大好評を博したこの展覧会に注目したドイツの2大学で、授業の一環としてphono/graph研究がスタート。展示プラン、告知デザイン、ワークショップなど、現地学生と日本側のアーティスト達との絶妙なコラボレーションで今回の巡回が実現した。多彩なワークショップが話題を呼ぶなど、8,000名の来場者を迎え、日本とドイツの文化交流を深めた。

日独の創造的な文化交流とコラボレーション
フィリップ・トイフェル
（デュッセルドルフ応用科学大学 教授）

このプロジェクトは、日本とドイツのアーティストとデザイナーの創造的かつ文化的な交流に貢献したと同時に、2007年に始まったデュッセルドルフ応用科学大学とDNP文化振興財団の “design is attitude展”、”Helvetica Forever展”に続く継続的な実り多きコラボレーションとなりました。
あらゆる可能な方向への越境、これが当プロジェクトの核をなす思想です。聞くという行為が見るという行為と出会い、話すことと書くこと、書くことと聞くこと、視覚が音と、響きの体験が実験と、アーティストがデザイナーと、展覧会デザイナーがグラフィックデザイナーと、ドルトムントの学生がデュッセルドルフの学生と、日本人とドイツ人が、東と西が、アナログとデジタルが、論争が結びつきと、そして好奇心が専門知識と出会う。このような様々な出会いが、phono/graph展を通じて繰り広げられました。
また同時に、今回のプロジェクトを通じて私たちは創造のための、普段とは異なる知的体験をし、異なる文化的背景と視点を体感することもできました。この展覧会は、1年間にわたる日本とドイツのアーティスト、デザイナー、建築家の共同作業によって作り上げられています。ドルトムント応用科学大学とデュッセルドルフ応用科学大学では、合わせて4つの研究室が2学期にわたって、企画コンセプト、展示作品、展示空間の設計、編集と告知物のデザイン、ワークショップなどのプロジェクトに取り組みました。

主催：デュッセルドルフ応用科学大学、ドルトムント応用科学大学、ドルトムントU、The Centre for Cultural Education
会場：ドルトムントU
協賛：ルフトハンザ、ルフトハンザカーゴ、国際交流基金
協力：財団法人DNP文化振興財団
出展デザイナー：ニコール・シュミット、softpad、intext、八木良太、藤本由紀夫
ドイツ側展示（学生）：Merlin Baum & Sarah Watta, Juan Castro, Josua Dunst, Holger Müller and Konrad Laurids Pesch, Lisa Spielmann, Roman Tönjes , Edi Winarni
プロジェクトリーダー：Prof. Philipp Teufel, Christian Jendreiko, Prof. Sabine an Huef

“phono/graph” ddd gallery’s 178th exhibition, featured works by Yukio Fujimoto and four groups of artists and designers who lightheartedly created sounds, letters and graphics outside the constraints of such genres as visual or aural expression. The exhibition, which had been enthusiastically received in Japan, caught the attention of two universities in Germany, and they decided to study “phono/graph” as part of their teaching curriculum. For this exhibition at Dortmund U, local students and artists from the Japanese side collaborated beautifully in planning the displays, designing publicity materials, holding workshops, etc. The diverse workshops especially attracted notice, resulting in some 8,000 visitors to the exhibition, an event that deepened the cultural ties between Japan and Germany.

Prof.Philipp Teufel,
University of Applied Sciences Düsseldorf

This project promotes creative and cultural exchange between artists and designers from Japan and Germany and is the continuation of the fruitful collaboration such as “design is attitude” exhibition and “Helvetica Forever” exhibition between the University of Applied Sciences Düsseldorf and the DNP Foundation for Cultural Promotion.
The project aims to transcend boundaries in all possible directions: hearing meets seeing, speaking meets writing, writing meets hearing, visual meets sound, acoustic experience meets experiment, artists meet designers, exhibition designers meet graphic designers, students from Dortmund meet students from Düsseldorf, Japanese meet Germans, East meets West, analog meets digital, controversy meets collaboration, curiosity meets expertise.
The project brings together different creative disciplines, cultural backgrounds, and viewpoints. The exhibition and its content were developed jointly by artists, designers, and architects from Germany and Japan over the course of a year. Students at the Dortmund and Düsseldorf University of Applied Sciences worked on the project in a total of four seminars over two semesters. The following focal points were developed: curatorial concepts, exhibits, exhibition architecture, editorial work and visual identity as well as workshops for further study.

Organizer: University of Applied Sciences Düsseldorf, University of Applied Sciences and Arts Dortmund, Dortmund U, The Centre for Cultural Education
Venue: Dortmund U
Support: Lufthansa, Lufthansa Cargo, Japan Foundation
In cooperation with DNP Foundation for Cultural Promotion
Designers and Artists from Japan: Nicole Schmid, softpad, intext, Iyota yagi, Yukio Fujimoto
Works by students in Germany: Merlin Baum & Sarah Watta, Juan Castro, Josua Dunst, Holger Müller and Konrad Laurids Pesch, Lisa Spielmann, Roman Tönjes, Edi Winarni.
Project leader: Prof.Philipp Teufel, Christian Jendreiko, Prof. Sabine an Huef

Photos : 1 Philipp Teufel / 2 Clemens Müller / 3-7 竹内 創

“Katsumi Asaba and the Bauhaus Posters Exhibition” at Bauhaus Dessau

July 8 – 31, 2012

デッサウ・バウハウス校舎における浅葉克己とバウハウス・ポスター展

デッサウ・バウハウス財団では、2012年7月を「ミサワ・バウハウス・コレクションとデッサウ月間」と定め、バウハウス校舎内にて「浅葉克己とバウハウス・ポスター展」が開催された。浅葉氏は2006年より、ミサワホームが所有するバウハウス・コレクションをテーマとしたバウハウス・ポスターを制作してきた。今回の展覧会では、これらのポスター42点に加え、当財団が所蔵する氏の代表作20数点が展示された。これは、日本とバウハウスとの史上初の交流事業であり、会期中には世界中から16,000人もの来場者（観光客）を記録した。

＊バウハウス校舎は、1925－26年に初代バウハウス学長ヴァルター・グロピウスの設計で建てられたモダニズム作品の記念碑的作品。

The Bauhaus Dessau Foundation declared July 2012 as “Misawa Bauhaus Collection and Dessau month,” and in conjunction with this event an exhibition of Bauhaus posters by Katsumi Asaba was held at the Bauhaus Building*. Since 2006 Mr. Asaba has been creating Bauhaus-themed posters for the Bauhaus Collection owned by Misawa Homes, and the exhibition included those 42 posters as well as 20 representative works by Mr. Asaba in the Foundation’s permanent collection. The event was the first joint project between Japan and the Bauhaus, and it attracted more than 16,000 visitors (tourists) from all over the world.

* The Bauhaus Building is a monumental work of modernism built in 1925-26 to the design of Walter Gropius, the Bauhaus’s founder.

“Tokyo ADC Award 2011” at Gestalten Space

April 26 – June 3, 2012

Tokyo ADC Award 2011 ゲシュタルテン・スペース巡回

Photo : Gestalten

ggg、クリエイションギャラリーG8、dddギャラリーで開催された「2011 ADC展」は、2012年2月のフランクフルト市立応用芸術博物館巡回後、「東京ADC賞：日本のコミュニケーションデザインの最高峰」展と題し、ドイツ・ベルリンの出版社ゲシュタルテンの「ゲシュタルテン・スペース」へ巡回された。

ゲシュタルテン社は、1995年の創立以来、最新のグラフィックデザインを始め、ファッションやイラストレーション、世界中のアーティストの作品集など、ユニークな出版物を刊行し続けている。ゲシュタルテン・スペースは、ショップにギャラリーを併設しており、ゲシュタルテンの本とその作家たちの最新のタイトルを紹介。デザイン、ファッション、アートや建築に関する本をゆっくりと見ることが出来るクリエイティブ・スペースになっている。

オープニングも含め36日間の開催で6,093人（一日平均170人）の集客。日本の活気あふれるダイナミックなデザインシーンの水準の高さに対し、感度の高いベルリンの人々の賞賛の声も多く好評だった。

In February 2012 the “2011 ADC Exhibition” that was held at ggg, CREATION GALLERY G8 and ddd Gallery traveled to Frankfurt’s Museum of Applied Art (Museum für Angewandte Kunst), and then, under the new title “Exhibition of the Tokyo Art Directors Club Award 2011” it proceeded to Gestalten Space operated in Berlin by the publishing company Gestalten. Since its founding in 1995, Gestalten has continued to publish unique works about the latest trends in graphic design, fashion and illustration, anthologies of works by artists from all over the world, etc. Gestalten Space, which is part gallery and part shop, introduces the company’s publications as well as the latest titles by its featured artists. It is a creative space where the visitor can leisurely browse books about design, fashion, art and architecture. During the exhibition’s 36-day run (including the opening day), a total of 6,093 visitors attended (average per day: 170). The show won enthusiastic accolades from Berliners in appreciation of the high level of Japan’s vibrant and dynamic design scene.

5

研究助成事業

Research Support

2012-2013 Financial Support Activities

2012−2013年度助成実績

1

対象	第24回すかがわ国際短編映画祭	Target	The 24th Sukagawa International Short Film Festival
主催	すかがわ国際短編映画祭実行委員会／須賀川市教育委員会	Organizers	Sukagawa International Short Film Festival Executive Committee, Sukagawa Board of Education
年月	2012/9	Date	September, 2012
金額	30,000円	Amount	JPY30,000
備考	短編映画フェスティバルおよびコンペ	Remarks	Short film festival and competition

---

2

対象	第24回田善顕彰版画展への協賛	Target	“The 24th Denzen Print Award Exhibition”
主催	須賀川商工会議所青年部／須賀川市教育委員会後援	Organizers	Sukagawa Chamber of Commerce Youth Division, Sukagawa Board of Education
年月	2013/2	Date	February, 2013
金額	30,000円	Amount	JPY30,000
備考	須賀川出身の江戸期の銅版画家、亜欧堂田善（あおうどうでんぜん）顕彰を目的とする市内小中学生対象の版画コンクール	Remarks	Print contest for Sukagawa elementary and junior high school students aimed at spreading recognition of copper plate print artist and Sukagawa native Aodo Denzen (1748-1822).

Reveiw of ggg 2012-2013

ggg 展覧会概要

TDC展 2012

会期＝2012年4月2日―25日
受賞作家＝○グランプリ＝ホワイ・ノット・アソシエイツ＋ゴードン・ヤング　○TDC賞＝M/M（Paris）、川村真司＋清水幹太＋Saqoosha＋森本友理、リック・バンクス、マルティン・ボルスト、大日本印刷秀英体開発室　○特別賞＝祖父江慎＋吉岡秀典　○TDC RGB賞＝いすたえこ＋伊藤ガビン＋林洋介＋宮本拓馬　○ブックデザイン賞＝アレクサンダー・ゲルマン　○タイプデザイン賞＝アンダーウェア
展示概要＝先端的なタイポグラフィ作品が一堂に会する国際コンペティション「東京TDC賞」（東京タイプディレクターズクラブ主催）の成果を紹介するTDC展。2011年秋の公募に寄せられた3,289作品（国内2,265、海外1,024）の応募作から厳正な審査によって選ばれた「東京TDC賞2012」。この受賞10作品をはじめ、ノミネート作品、優秀作品を合わせた132作品を展覧。毎年、先鋭的かつ実験的な作品が選定されるが、本年度も2,200平方メートルにおよぶ巨大タイポグラフィック・パブリックアートから、コンマ1mmの世界を追求するフォントデザインまで、多彩でエネルギッシュにして繊細な作品群が会場を埋めた。

キギ展 植原亮輔と渡邉良重

会期＝2012年5月8日―30日
作家略歴＝植原亮輔：北海道生まれ。多摩美術大学卒業。渡邉良重：山口県生まれ。山口大学卒業。2012年、共に長年勤めていたDRAFTを退職し、キギを設立。二人はアートディレクション、D-BROSのプロダクトデザイン、作品制作等で共同制作を多く手がける。2003年に二人が手がけたD-BROSのビニール製のフラワーベース「hope forever blossoming」は、世界の主要ミュージアムショップ等で販売されている。
展示概要＝木というものをクリエイティブの象徴とし、やがて森にしていきたいという願いをこめた新会社名でもある「キギ」をタイトルに、新しいプロダクトのあり方を探るD-BROSのディレクション、une nana coolやPASS THE BATON、caslonのブランディングなど、これまで手がけてきた数々のプロジェクトを一堂に紹介。たくさんのショーケースや大型の木製什器を使用したユニークな展示も注目を集め、あらゆるジャンルを横断しながら、真にグラフィックの新しいあり方を探し、生み出し続けている二人の世界を存分に楽しめる空間となった。

ジャンピン・ヘ　フラッシュバック

会期＝2012年6月5日―28日
作家略歴＝1973年、中国に生まれる。現在はベルリンに在住し、グラフィックデザイナーおよび大学教授として活動するかたわら、出版業にも携わる。中国美術学院でデザインを学んだのち、ベルリン芸術大学で美術を専攻、2011年にベルリン自由大学で博士号を取得。ベルリン芸術大学で教えたのち、現在は香港理工大学、杭州の中国美術学院で客員教授を務める。2002年には、ベルリンに自らのデザインスタジオ兼出版社「hesign」を設立、2008年からは杭州にも支社をおいている。
展示概要＝1階は壁も床も白一色、地階は黒一色。なにか東洋的で墨絵を連想させるような静謐な空間には、「フラッシュバック（ふと振り返ると）」をキーワードに、この15年間の仕事から厳選された、40点のポスター作品とブックデザインの数々が並んだ。東洋と西洋で学んだ新しい世代を代表する中国系デザイナーである氏の作品は、近年さまざまな国際コンペティションでも注目を浴びているが、本展会期中に展示された作品の一つ「キース・ゴダード」が、世界ポスタートリエンナーレトヤマで金賞を受賞したことも大きな話題となった。

2012 ADC展

会期＝2012年7月4日―28日
受賞作家＝○ADC会員賞＝佐々木宏＋前田良輔＋福里真一＋東畑幸多＋瀧本幹也、佐藤卓＋上田義彦、澁谷克彦　○原弘賞＝中島英樹
＜以下G8にて展示＞○グランプリ＝河合雄流＋牧鉄馬＋藤本宗将＋内田将二　○ADC賞＝小松洋一＋井口弘一、八木秀人、新村則人＋マイケル・フェザー、権田雅彦＋磯島拓矢＋瀧本幹也、小栗卓巳、富田光浩＋牧野伊三夫、榮良太＋小林幹也、河合雄流、目時綾子、色部義昭
展示概要＝ADC（東京アートディレクターズクラブ）は、1952年の創立以来日本の広告・デザインを牽引する活動を続けており、会員により選出されるADC賞は、その年の日本の広告・デザイン界の最も名誉あるものの一つとして注目を集める。2012年度ADC賞は、11年5月から12年4月までの1年間に発表された多ジャンルにおよぶ約8,500点の応募作品の中から、77名の会員によって厳正な審査が行われ選出された。本展ではこの審査会で選ばれた受賞作品と優秀作品を、ggg［会員作品］、G8［一般作品］の2会場で紹介。グラフィック、広告の最高峰に輝く作品の数々が勢ぞろいした。

Tokyo Type Directors Club Exhibition 2012

Dates = April 2–25, 2012
Award Winners = Grand Prix: Why Not Associates+ Gordon Young TDC Prize: M/M(Paris), Masashi Kawamura + Qanta Shimizu + Saqoosha + Yuri Morimoto, Rick Banks, Martin Borst, Dai Nippon Printing Co., Ltd. Shueitai Development Department Special Prize: Shin Sobue + Hidenori Yoshioka TDC RGB Prize: Taeko Isu + Gabin Ito + Yosuke Hayashi + Takuma Miyamoto Book Design Prize: Alexander Gelman Type Design Prize: Underware
Exhibition Overview = Tokyo Type Directors Club Exhibitions present the results of an open international design competition organized annually by the Tokyo Type Directors Club (TDC). The 2012 show featured a total of 132 works selected from among 3,289 entries (2,265 from Japan and 1,024 from overseas) submitted in autumn 2011. These included the 10 winners of the 2012 TDC Awards plus other nominated works and other outstanding entries. Every year the judges select works that are both cutting-edge and experimental, and this year again the exhibition space was filled with both energizing and finely wrought works of remarkable variety: from an enormous work of typographic public art 2,200 square meters in scale to font designs pursuing typographic beauty at the level of one tenth of a millimeter.

KIGI Exhibition: Ryosuke Uehara and Yoshie Watanabe

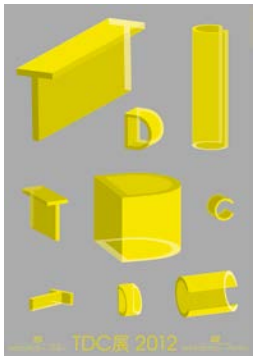
Dates = May 8–30, 2012
Artist Profile = Ryosuke Uehara: Born in Hokkaido. Graduate of Tama Art University.
Yoshie Watanabe: Born in Yamaguchi Prefecture. Graduate of Yamaguchi University.
After many years employed at DRAFT Co., Ltd., in January 2012 Mr. Uehara and Ms. Watanabe both left their positions and jointly established KIGI co., ltd. The two have worked on numerous projects together, including art direction as well as product design for D-BROS.
Exhibition Overview = “KIGI” means “trees,” and Ryosuke Uehara and Yoshie Watanabe chose the tree as their creative symbol – and as the name of their new company – with the hope that their “trees” of creation will eventually grow into a lush “forest.” This exhibition brought together many of the projects this pair has worked on until now: including direction work at D-BROS and branding work for “une nana cool,” “PASS THE BATON” and “caslon.” The exhibition garnered much notice for its unique display method using numerous showcases and large wooden fixtures. And as it traversed across all genres, it pursued new approaches in graphic endeavor, comprising a space in which visitors could fully enjoy this pair’s ongoing creative output.

Jianping He Flashback

Dates = June 5–28, 2012
Artist Profile = Jianping He was born in 1973, China. He is now living in Berlin, working as a graphic designer, professor, and publisher. He studied graphic design at the China Academy of Art, Master of Fine Arts in Berlin University of Arts and had his PhD of cultural history in Free University of Berlin in 2011. He has been teaching in Berlin University of the Arts, employed as a guest professor by Hong Kong Polytechnic University, and China Academy of Arts in Hangzhou. In 2002 he established his own design studio and publishing house, hesign, based in Berlin with the other branch in Hangzhou since 2008.
Exhibition Overview = On the ground floor, the walls and floor were completely white; on the underground level, everything was black. In this serene setting suggestive of an Oriental ink painting were set out 40 posters and book designs gleaned from the works of Jianping He from the past 15 years, with “flashback” serving as the key word. Works by He, a Chinese designer representative of the new generation who has studied in both the East and West, have been garnering attention in various international competitions in recent years, and one of his works displayed at this exhibition – titled “Keith Godard” – won a Gold Prize at the International Poster Triennial in Toyama, an event that received much notice.

2012 Tokyo Art Directors Club Exhibition

Dates = July 4–28, 2012
Award Winners = ADC Members’ Award: Hiroshi Sasaki + Ryosuke Maeda + Shinichi Fukusato + Kota Tohata + Mikiya Takimoto, Taku Satoh + Yoshihiko Ueda, Katsuhiko Shibuya Hara Hiromu Award: Hideki Nakajima Grand Prix (shown at Creation Gallery G8): Takeru Kawai + Tetsuma Maki + Muneyuki Fujimoto + Shoji Uchida ADC Award: Yoichi Komatsu + Koichi Iguchi, Hideto Yagi, Norito Shinmura + Michael Feather, Masahiko Gonda + Takuya Isozima + Mikiya Takimoto, Takumi Oguri, Mitsuhiro Tomita + Isao Makino, Ryota Sakae + Mikiya Kobayashi, Takeru Kawai, Ayako Metoki, Yoshiaki Irobe
Exhibition Overview = Since its founding in 1952, the Tokyo ADC has continuously undertaken activities to promote advertising and design in Japan. The Tokyo ADC Awards garner attention as one of the highest honors presented in Japan’s advertising and design fields each year. The 2012 award winners were chosen by 77 members, from roughly 8,500 entries in numerous genres released between May 2011 and April 2012. The award-winning and other outstanding works were shown at two venues: ggg (works by ADC members) and G8 (works by non-members). Together they offered visitors a rich panorama of the year’s most brilliant achievements in these fields.



Design: Tomoko Yamashita

Design: KIGI

Design: Jianping He

Design: Kenjiro Sano

THE POSTERS 1983-2012
世界ポスタートリエンナーレトヤマ受賞作品展

会期＝2012年8月2日―28日
共催＝富山県立近代美術館
監修＝永井一正
展示概要＝世界ポスタートリエンナーレトヤマ（IPT）は日本で唯一の本格的な国際ポスターコンペティションとして1985年に始まり、2012年には第10回を迎えた。第1回は1,567点だった応募総数も年々増加し、第10回は世界53の国と地域より4,622点と、今や世界最大規模のポスター展となった。本展はこれを記念して、富山県立近代美術館の収蔵作品の中から、それぞれの時代を反映した各回の受賞作（グランプリ、金賞、銀賞、亀倉雄策国際賞）を第10回から過去へさかのぼる形で展示、審査風景などをおさめた貴重な映像も合わせて紹介し、IPT30年の歴史を振り返った。また、富山県立近代美術館の開館時から一貫して展覧会ポスターを手がける永井一正氏による、今までのIPT公募ポスターやIPT展ポスターも紹介した。

寄藤文平の夏の一研究

会期＝2012年9月3日―29日
作家略歴＝1973年長野県生まれ。武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科中退。1998年ヨリフジデザイン事務所、2000年文平銀座設立。近年は広告アートディレクションとブックデザインを中心に活動。イラストレーターとして挿画の連載や、著作も行う。
展示概要＝1階では、寄藤氏が手がける広範囲におよぶ仕事の根底にあるアイデアの源泉、独自のデザイン論とその展開例を、カラフルな黒板を使い寄藤氏ならではの手法で表現。合わせて開発に携わった紙「ブンペル」各種も展示した。地階は赤瀬川原平『千利休 無言の前衛』をテーマに、装丁の考え方やその制作プロセスを紹介する33の装丁デザインが並び、来場者が気に入った装丁デザインに投票するという試みも行われた。チョークで直接黒板に手描きされたイラストレーションと文章により、オリジナリティ溢れる作品を生み出し続ける寄藤氏の頭の中をのぞいて見ているような、自由研究らしい展示風景となった。

AGI展

会期＝2012年10月4日―27日
監修＝浅葉克己
展示構成＝杉崎真之助
参加作家＝永井一正、五十嵐威暢、勝井三雄、中村誠、浅葉克己、佐藤晃一、松永真、サイトウマコト、松井桂三、佐藤卓、中島英樹、新島実、三木健、U.G.サトー、蝦名龍郎、北川一成、澤田泰廣、杉崎真之助、長友啓典、原研哉、松下計、葛西薫、立花文穂、佐藤可士和、永井一史、服部一成、平野敬子、グンター・ランボー、シーモア・クワスト、オルガー・マチス、アイヴァン・チャマイエフ、ヤン・ライリッヒ、ピエール・ベルナール、ウーヴェ・レシュ、ニクラウス・トロックスラー、キット・ヒンリック、ラース・ミュラー、ボーラ・シェア、ラルフ・シュライフォーゲル、カン・タイクン、カリ・ピッポ、ミシェル・ブーヴェ、フィリップ・アペロワ、デイヴィッド・タルタコーバ、ステファン・サグマイスター、ウラジーミル・チャイカ、シアン、レオナルド・ソノリ、ワン・シュ、フリーマン・ラウ、イストヴァン・オロス、スタンリー・ウォン、トミー・リー、ワン・ミン、ジヤンビン・ヘ、マジド・アバッシ
展示概要＝AGI（国際グラフィック連盟）は、1952年にフランスで創立された国際的なグラフィックデザイナーの団体で、毎年の総会や展覧会など、国境や文化を超えて幅広い活動を行っている。本展ではAGIの日本会員27名および日本会員の推薦による海外会員29名の自選作品を紹介。1階には日本会員、地階には海外会員の作品を展示、国際色豊かな内容となった。

横尾忠則 初のブックデザイン展

会期＝2012年11月1日―27日
展示構成＝中沢仁美
作家略歴＝1936年兵庫県生まれ。美術家。1960年代よりグラフィックデザイナーとして活躍し、72年にはニューヨーク近代美術館で個展を開催するなど国際的に活躍。81年に画家に転向し、その後もパリ、ベネチア、サンパウロなど世界各国で招待出品。国内外の美術館で多数の個展を開催し、海外でも高い評価を得ている。2000年ニューヨークADC殿堂入り、紫綬褒章、朝日賞など受賞多数。
展示概要＝国内外のアート、カルチャーシーンに大きな影響を与え続けてきた横尾忠則氏の初めてのブックデザイン展。寺山修司、柴田錬三郎、瀬戸内寂聴など著者別、その他の単行本や文庫、雑誌類、自著本などをコーナー別に展示。確固たるグラフィックデザインやタイポグラフィの礎の上に成り立ちつつも、横尾ワールドとしか言いようのない自由奔放なデザイン。本の中身を強烈に印象づける装丁や、書き文字が躍る雑誌表紙など、一点一点の持つ力はもちろん、会場を埋める作品群の量のエネルギーにも圧倒される展示となった。貴重な原画、スケッチ、版下なども紹介。

THE POSTERS 1983-2012
–The Prize- Winning Works from
The International Poster Triennial in Toyama–

Dates = August 2–28, 2012
Support = The Museum of Modern Art, Toyama
Supervision = Kazumasa Nagai
Exhibition Overview = The International Poster Triennial in Toyama (IPT) was launched in 1985 as Japan's only full-fledged international poster competition, and the 2012 event marked the 10th to date. The number of entries has grown steadily through the years – from 1,567 for the first triennial to 4,622, from 53 countries and regions, in 2012 – with the result that today IPT ranks among the world's largest-scale poster exhibitions. To celebrate the 10th show, award-winning works (Grand Prix, Gold and Silver Prizes, Yusaku Kamekura International Design Award) from all previous exhibitions, each reflective of their times, were gleaned from the Museum of Modern Art, Toyama's collection and placed on display, arranged starting with the newest and tracing back to the first competition. Rare video coverage of the judging sessions, etc. was also on display, rounding out a retrospective of the IPT's 30-year history. An introduction was also presented to the IPT posters calling for entries and promoting the triennial, created through the years since the museum's opening by Kazumasa Nagai.

Bunpei Yorifuji's
Summer Homework Project

Dates = September 3–29, 2012
Artist Profile = Bunpei Yorifuji was born in 1973. He attended Musashino Art University with a concentration in Visual Communication Design. In 1998 he established Yorifuji Design Office, followed in 2000 with his founding of Bunpei Ginza Ltd. In recent years he has focused on advertising art direction and book design.
Exhibition Overview = The first floor was dedicated to showing the sources of the ideas underlying Mr. Yorifuji's highly diversified works, his unique design philosophy and examples of how he has applied it, all expressed through an unusual method using colorful blackboards. Also on display were different varieties of "Bunpel," paper he helped to develop. The basement level showed 33 of Mr. Yorifuji's book designs, introducing the philosophy behind their creation and his production processes under the overall theme of Genpei Akasegawa's *Sen no Rikyu: The Silent Avant-Garde*. Visitors were invited to vote for the book design they liked best. The exhibition landscape was befitting of a free study, using illustrations and passages handwritten in chalk directly on the blackboards to give a sense of what it would be like to peer inside the head of this designer who has continuously produced works brimming over with originality.

AGI (Alliance Graphique Internationale)
Exhibition

Dates = October 4–27, 2012
Supervision = Katsumi Asaba
Exhibition Design = Shinnoske Sugisaki
Featured Artists = Kazumasa Nagai, Takenobu Igarashi, Mitsuo Katsui, Makoto Nakamura, Katsumi Asaba, Koichi Sato, Shin Matsunaga, Makoto Saito, Keizo Matsui, Taku Satoh, Hideki Nakajima, Minoru Niijima, Ken Miki, U.G.Sato, Tatsuo Ebina, Issey Kitagawa, Yasuhiro Sawada, Shinnoske Sugisaki, Keisuke Nagatomo, Kenya Hara, Kei Matsushita, Kaoru Kasai, Fumio Tachibana, Kashiwa Sato, Kazufumi Nagai, Kazunari Hattori, Keiko Hirano, Gunter Rambow, Seymour Chwast, Holger Matthies, Ivan Chermayeff, Jan Rajlich sen. , Pierre Bernard, Uwe Loesch, Niklaus Troxler, Kit Hinrichs, Lars Müller, Paula Scher, Ralph Schraivogel, Kan Tai-Keung, Kari Piippo, Michel Bouvet, Philippe Apeloig, David Tartakover, Stefan Sagmeister, Vladimir Chaïka, Cyan, Leonardo Sonnoli, Wang Xu, Freeman Lau, István Orosz, Stanley Wong, Tommy Li, Wang Min, Jianping He, Majid Abbasi
Exhibition Overview = Alliance Graphique Internationale (AGI) is an international group of designers, founded in France in 1952, that engages in a broad range of activities – an annual congress, exhibitions, etc. – transcending national borders and cultural boundaries. This exhibition displayed works by the 27 Japanese members of AGI as well as works, self-picked, by 29 overseas members recommended by the Japanese delegation. The ground floor of the gallery was dedicated to the works of the Japanese members, and the underground exhibition space to the works by the overseas participants. All in all, it was an exhibition highly international in content.

Tadanori Yokoo
The First Book Design Exhibition

Dates = November 1–27, 2012
Exhibition Design = Hitomi Nakazawa
Artist Profile = Artist. Born in Hyogo Prefecture in 1936. Active as a graphic designer since the 1960s, his international career included a solo exhibition at the Museum of Modern Art in New York in 1972. After switching to painting in 1981, he continued to be invited to show his work at biennials around the world. His numerous awards and honors include election to the New York Art Directors Club Hall of Fame in 2000, the Japanese Medal of Honor with Purple Ribbon, and the Asahi Prize.
Exhibition Overview = This was the first exhibition of book designs by the celebrated designer / artist Tadanori Yokoo. The exhibits were arranged by author, book type, magazine type, Mr. Yokoo's own books, etc. While his designs have a solid basis in established graphic design and typography, at the same time they are free and unfettered by convention, creating a world uniquely his own. The exhibition not only demonstrated the power of each individual work – whether it be a book design that powerfully conveys the book's content or a magazine cover on which hand lettering dances freely about; the energy palpable from the sheer volume of works filling the exhibition space was also overwhelming.

Design: Kazumasa Nagai

Design: Bunpei Yorifuji

Design: Katsumi Asaba

Design: Tadanori Yokoo

テセウス・チャン：ヴェルク No.20 銀座
THE EXTREMITIES OF THE PRINTED MATTER

会期＝2012年12月3日―25日
後援＝シンガポール共和国大使館
協賛＝alsoDOMINE
協力＝亜洲中西屋
作家略歴＝国際的な広告代理店の仕事を何年も続けた後、1996年、自分の理想を実現するためデザイン会社WORKを設立し、ジャンルの垣根を越え、挑発的でありながら、その場にふさわしいデザインを、チームと共に創作している。主なクライアントに、ルイ・ヴィトン ジャパン（日本）、ユニクロ（日本）、ペダー・グループ（香港）、ヴァンダーキンド（ドイツ）など。これまで数々の賞を世界各国で受賞。展覧会やインスタレーションなどを多数手がけている。
展示概要＝タイトルの「EXTREMITIES」とは「極限」「極端な手法」「身体の先端部分（四肢、指先、つま先、鼻、耳）」の意味で、テセウス氏の手法を一語で表現している。代表作である独創性あふれる雑誌『WERK』は破いたり、擦ったり、切り抜いたりして、一冊ずつ表情が異なるほど手が込んでいる。展覧会に合わせ発行された最新の20号を始め、会場では映像なども駆使して、五感を刺激する彼の雑誌デザインの世界を紹介した。

松永真ポスター100展

会期＝2013年1月9日―31日
作家略歴＝1940年東京生まれ。東京藝術大学美術学部デザイン科卒業。資生堂宣伝部を経て、1971年松永真デザイン事務所設立。一連の平和ポスター、スコッティやカンチューハイ、ウーノ、国際指名デザインコンペ優勝のフランスのたばこジダンのパッケージデザイン、大ベストセラーとなった『日本国憲法』のブックデザインや、ISSEY MIYAKE、国立西洋美術館、ベネッセのCI計画など、その仕事は幅広い。国内外での個展も多く、世界85ヶ所の美術館などに作品が永久保存。国内外の受賞多数。AGI会員、東京ADC委員、JAGDA理事、日本デザインコミッティー理事。
展示概要＝パッケージデザインやシンボルマークなど松永真氏の多彩な活動の中から、敢えて“ポスター”に焦点を当てた展覧会。歴史的名作「PEACE」「JAPAN」「HIROSHIMA APPEALS」をはじめ、100種（127点）を自選。時代を鋭く捉えた静謐で鮮烈なメッセージをたたえたポスター作品の数々は、松永氏の思想と哲学を反映し、美しく、シンプルで力強い。ぶれない氏の言葉「シンプルは単純ではない」を体現する展示となった。

カリ・ピッポ　ポスターとドローイング
シンプル・ストロング・シャープ

会期＝2013年2月6日―28日
後援＝フィンランド大使館（東京）
作家略歴＝1945年フィンランド生まれ。67年ヘルシンキ・スクール・オブ・インダストリアルアート卒業。87年に自身のスタジオ設立。イラストレーションとポスターデザインを専門とする。富山、ワルシャワ、ラハティ、ブルノ、メキシコ等国際ポスター賞の審査員を多く務める。世界中で展覧会やレクチャー、ワークショップを開催。AGI会員。
展示概要＝「作品に不必要なものは何も含んでいない。しかし必須のものはすべて取り込んでいる」。今回の展覧会タイトルである“シンプルで、力強くて、シャープ”をデザイン哲学とするカリ・ピッポ氏の、ポスター作品の数々が展覧会場を彩った。必要最小限の色数とタイポグラフィで、極限までそぎ落とされた造形だからこそ、観る者に強く、深く、多くを語りかける。合わせて日頃から描きためているドローイングも展示した。

DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展V
LIFE 永井一正ポスター展

会期＝2013年3月6日―30日
作家略歴＝1929年大阪生まれ。1951年東京藝術大学彫刻科中退。1960年日本デザインセンター創立に参加、現在最高顧問。札幌冬季オリンピックをはじめ、沖縄海洋博、アサヒビール、三菱東京UFJフィナンシャル・グループなど、多くのシンボルマークを制作。ポスターは企業広告、演奏会、展覧会など幅広く手がけ、国内外での受賞多数。東京ADC会員、JAGDA特別顧問、AGI会員。
展示概要＝半世紀以上にわたり日本のグラフィックデザイン界の最前線で活躍する永井一正氏の膨大な作品群の中から、本展では主に動植物をモチーフに“LIFE”をテーマにしたポスター作品139点を厳選して紹介した。暗闇の中に浮かび上がるポスターから生命の静かな息遣いが聞こえてきそうな1階の展示、そして対照的に白く明るい地階の展示。かけがえのない命や自然への強いメッセージとともに、まさにあふれ出るような豊かな生命力を感じられる会場となった。

Theseus Chan: WERK No.20 GINZA
THE EXTREMITIES OF THE PRINTED MATTER

Dates = December 3–25, 2012
Support = Embassy of the Republic of Singapore
Cooperation = alsoDOMINIE Pre Ltd, ASHU NAKANISHIYA Co., Ltd
Artist Profile = After years of working with international advertising agencies, Theseus set out to epitomize his ideals by setting up WORK in 1996. WORK is a multi-disciplinary design agency where Theseus and his team create designs that are provocative yet relevant. His portfolio includes clients such as Louis Vuitton Japan Company (Japan), UNIQLO Co., Ltd. (Japan), Pedder Group (Hong Kong) and Wunderkind GmbH & Co. KG (Germany), and has worked on many exhibitions, collaborations and installations to date.
Exhibition Overview = The word “extremities” in the title – referring simultaneously to extreme limits and physical appendages – sums up Theseus Chan’s creative style in a nutshell. Each individual copy of “WERK,” his highly original magazine for which he is most famous, is elaborately processed to make it look different, through random tearing, rubbing, and use of cut-outs. The exhibition not only featured “WERK” itself, including the new No.20 published to coincide with this event, but also used video presentations and the like to introduce the world of Mr. Chan’s magazine designs that stimulate the reader’s five senses.

Shin Matsunaga Poster 100 Exhibition

Dates = January 9–31, 2013
Artist Profile = Mr. Matsunaga was born in Tokyo in 1940. After completing the design course at Tokyo University of Fine Arts and Music, he initially worked in the advertising division of Shiseido before founding Shin Matsunaga Design Inc. in 1971. His works, extremely broad in variety, include: a series of peace posters; package designs for Scottie tissues, Can Chu-Hi beverage and Shiseido’s “uno” men’s cosmetics; CI planning for Issey Miyake, The National Museum of Western Art and Benesse Corporation; and much more. He has held numerous solo exhibitions both in Japan and overseas, and has also won many prizes all over the world. He is a member of AGI, a committee member of Tokyo ADC, and a director of both JAGDA and Japan Design Committee.
Exhibition Overview = Among the diverse range of Mr. Matsunaga’s creative output, including package designs and symbols, this exhibition focused exclusively on his poster works. On display were 100 poster types (127 items in all), selected by Mr. Matsunaga himself, including such historic masterpieces as “Peace,” “Japan” and “Hiroshima Appeals.” The many works on exhibit possess beauty, simplicity and persuasive appeal vividly reflecting his philosophy and approach to his art. It was an exhibition truly embodying his unwavering creed that “there is nothing simple in simplicity.”

Kari Piippo Posters & Drawings
–Simple, Strong and Sharp–

Dates = February 6–28, 2013
Support = Embassy of Finland, Tokyo
Artist Profile = Born in Finland in 1945. Graduated in ’67 from the School of Industrial Arts in Helsinki. Founded his own studio in ’87. Specialized in illustration and poster design. Kari Piippo has been a jury member in many national and international competitions of poster design e.g. in Toyama, Warsaw, Lahti, Brno and Mexico. Exhibitions, lectures and workshops around the world. He is a member of AGI.
Exhibition Overview = The subtitle of this exhibition – “Simple, Strong and Sharp” – encapsulates the design philosophy of Kari Piippo. In describing his works, he says that “nothing unnecessary is included and nothing essential left out.” Using the minimal number of colors “necessary” and typography, he creates forms that are pared down to the extreme degree, and it is this extreme trimming down that speaks volumes, with strength and depth, to the viewer. Also on exhibit was a selection of Mr. Piippo’s drawings made and saved over the course of time.

DNP Graphic Design Archives Collection V
LIFE–Kazumasa Nagai Poster Exhibition

Dates = March 6–30, 2013
Artist Profile = Born in 1929, Mr. Nagai attended Tokyo National University of Fine Arts and Music until withdrawing in 1951. In 1960 he participated in the founding of Nippon Design Center, where he currently serves as Senior Executive Advisor. Mr. He has created numerous symbols through the years, including for the 1972 Sapporo Winter Olympics, Expo ’75 in Okinawa and Asahi Breweries. He has also designed a broad range of posters for corporate advertising, musical performances, exhibitions, etc., and has won many prizes both in Japan and overseas. Mr. Nagai is a member of Tokyo ADC and AGI.
Exhibition Overview = Out of the vast bulk of works created by Kazumasa Nagai, a leading force in Japan’s graphic design realm for more than half a century, this exhibition focused on 139 of his posters featuring animal and plant motifs in his “LIFE” series. On the ground floor, his posters seemed to float out of the intentionally darkened space and their life forms could practically be heard breathing; by contrast, on the basement level his posters were displayed in bright, white light. Together the exhibition spaces conveyed a strong message about the irreplaceable importance of life and nature, while simultaneously enabling visitors to feel the overflowing abundance of life’s energy.

Design: WORK

Design: Shin Matsunaga

Design: Kari Piippo

Design: Kazumasa Nagai

Reveiw of ddd 2012-2013

ddd 展覧会概要

GRAPHIC WEST 5
type trip to Osaka typographics ti: 270

会期＝2013年1月18日―3月2日
参加デザイナー＝クリス・リー（シンガポール）、ジェイヴィン・モ（香港）、サンティ・ロウラチャウィ（バンコク）、スルキ＆ミン（ソウル）、ヘイ・イーヤン（深圳）、アーロン・ニエ（台北）、シャオマグ＆チャンズ（北京）
展示概要＝日本タイポグラフィ協会の機関紙『typographics ti』では「アジアのタイポグラフィの今」を探る "type trip（文字を巡る旅）" を特集。ソウル、香港、シンガポール、台北、深圳、バンコク、そして北京に赴き、メンバー自身が現地のデザイナーたちと直接対話することで誌面を創り上げました。
"type trip" の最終目的地は「Osaka ／大阪」。取材したデザイナーの作品展示と同時に、制作プロセスやデザイナーの思考プロセスをギャラリー空間に再構成しました。機関紙の表紙モチーフでもある「八卦」をテーマに八台の展示台を八角形にレイアウトし、各棚をそれぞれの都市のデザイナーが「仕事」と「街の状況」をテーマに編集したほか、各都市の若手～中堅デザイナーたちを紹介する棚も設置し、最新のデザインシーンを伝えました。

GRAPHIC WEST 5
type trip to Osaka typographics ti: 270

Date = January 18–March 2, 2013
Participating Designers = Sulki Choi and Min Choi (Sulki & Min; Seoul), Hei Yiyang (Sense Team; Shenzhen), Santi Lawrachawee (Practical Design Studio; Bangkok), Chris Lee (Asylum; Singapore), Javin Mo (Milkxhake; Hong Kong), Aaron Nieh (Aaron Nieh Workshop; Taipei), Xiao Mage & Chengzi (Beijing)
Exhibition Overview = "typographics ti:" – a public-relations magazine published by the Japan Typography Association – ran a series of special features called "type trip" examining contemporary Asian typography. In preparing those articles, JTA members personally traveled to Seoul, Hong Kong, Singapore, Taipei, Shenzhen, Bangkok and Beijing and spoke directly with local designers. The final destination of this "trip" was Osaka. Here, in addition to exhibiting works by designers in each city that had been visited, the gallery space recreated the processes whereby Japanese members and Asian designers collaborated on "type trip to Osaka," extending to the designers' thought processes. The chosen theme was divination using the "eight trigrams" – the Oriental philosophy of fortune telling. Eight display stands were arranged in an octagonal configuration and on each shelf, the designers from the eight cities put together content on the themes of "work" and "city situation."

Design: Tetsuya Goto

DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅳ
没後10周年記念企画：
田中一光ポスター 1980-2002

DNP Graphic Design Archives Collection Ⅳ
The 10th Memorial to Ikko Tanaka: Ikko Tanaka Posters 1980–2002

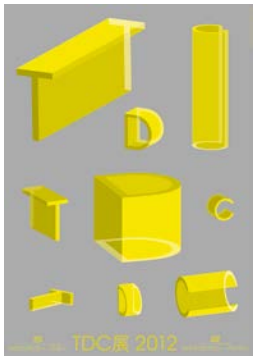
会期＝2012年3月21日―5月11日
Dates = March 21 – May 11, 2012

Design: Kazumasa Nagai

TDC展 2012

Tokyo Type Directors Club Exhibition 2012

会期＝2012年5月22日―7月6日
Dates = May 22–July 6, 2012



Design: Tomoko Yamashita

立花文穂展

Fumio Tachibana Exhibition

会期＝2012年7月17日―9月5日
Dates = July 17–September 5, 2012

Design: Fumio Tachibana

2012 ADC展

2012 Tokyo Art Directors Club Exhibition

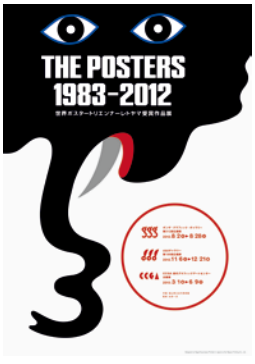
会期＝2012年9月13日―10月26日
Dates = September 13 – October 26, 2012

Design: Kenjiro Sano

THE POSTERS 1983-2012
世界ポスタートリエンナーレトヤマ受賞作品展

THE POSTERS 1983-2012 –The Prize-Winning Works from The International Poster Triennial in Toyama–

会期＝2012年11月6日―12月21日
Dates = November 6 – December 21, 2012



Design: Kazumasa Nagai

CCGA 展覧会概要

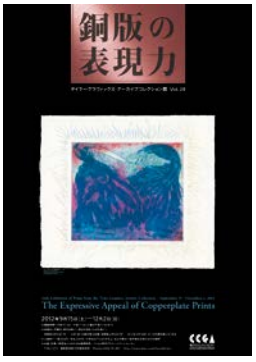
版で発信する作家たち：after 3.11
The Artists Who Express through Prints: after 3.11

会期＝2012年3月1日―6月3日
Dates = March 1–June 3, 2012

Design: Shinji Kamei (W.O.DESIGN)

銅版の表現力：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展Vol.24
The Expressive Appeal of Copperplate Prints: 24th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection

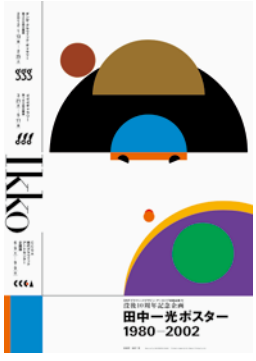
会期＝2012年9月15日―12月2日
Dates = September 15–December 2, 2012



Design: Ryuzo Nakata (3pts.design)

DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅳ
没後10周年記念企画：
田中一光ポスター1980-2002
DNP Graphic Design Archives Collection Ⅳ
The 10th Memorial to Ikko Tanaka: Ikko Tanaka Posters 1980–2002

会期＝2012年6月9日―9月9日
Dates = June 9 – September 9, 2012



Design: Kazumasa Nagai

第24回田善顕彰版画展
The 24th Denzen Print Award Exhibition

会期＝2013年2月10日―2月16日
Dates = February 10–16, 2013

ggg

1986-2013

1986
3月 1回 大橋正展 野菜のイラストレーション
4月 2回 福田繁雄展 Illustric412
5月 3回 奥村靫正展 燦々彩譜
6月 4回 秋山育展 ピクチャーレリーフ
7月 5回 '86 Tokyo ADC展
8月 6回 アートワークス展Ⅰ
9月 7回 佐藤晃一展 箱について−2
10月 8回 栗津潔展 エノタメノジブンカクメイ
11月 9回 追悼・ハーバート・バイヤー展
12月 10回 K2 Live!展

1987
1月 11回 辻修平 いろはの絵展
2月 12回 花の万博＋博覧会のシンボルマーク展
3月 13回 藤幡正樹展 geometric love
4月 14回 松永真 毎日デザイン賞受賞記念展
5月 15回 安西水丸 二色展
6月 16回 ルウ・ドーフスマンとCBSの
クリエイティブワークス展
7月 17回 '87 Tokyo ADC展
8月 18回 アートワークス展Ⅱ
9月 19回 五十嵐威暢の立体数字展
10月 20回 青葉益輝プリンティングアート展
11月 21回 オルガー・マチスのポスター展
12月 22回 ミルトン・グレイザー展

1988
1月 23回 木村勝·パッケージングディレクション展
2月 24回 谷口広樹展 猿の記憶
3月 25回 銀座百点 表紙原画展
4月 26回 吉田カツ展 描き下し刷り下し
5月 27回 AGI '88 Tokyo展
6月 28回 イッセイ・ミヤケのポスター展
7月 29回 '88 Tokyo ADC展
8月 30回 アートワークス展Ⅲ
9月 31回 情報ポスター・リクルート展
10月 32回 早川良雄「女」原画展
11月 33回 仲條正義展 NAKAJOISH
12月 34回 スタシスのポスターとイラストレーション展

1989
1月 35回 ショッピングバッグ・デザイン展
2月 36回 矢萩喜従郎展
3月 37回 Texture展
皆川魔鬼子＋田原桂一＋山岡茂
4月 38回 タナカノリユキ展 Gokan-都市の表層
5月 39回 オトル・アイヒャー展
6月 40回 操上和美展 Photographies
7月 41回 若尾真一郎展 Wakao Collection
8月 42回 アートワークス展Ⅳ
9月 43回 永井一正展
10月 44回 Europalia '89 Japan
新作ポスター 12人展
11月 45回 チャールズ・アンダーソン展
12月 46回 清原悦志の仕事展 Hommage

1990
1月 47回 秋月繁展 遊びの箱
2月 48回 菊地信義展 装幀の本「棚」
3月 49回 原田維夫展 木版画「馬」
4月 50回 田中一光展 グラフィックアート植物園
5月 51回 山城隆一展 猫のいないイラスト
6月 52回 松井桂三展 3D
7月 53回 寺門孝之展 遺伝子導入天使
8月 54回 アートワークス展Ⅴ
9月 55回 田原桂一展 光の香り
10月 56回 浅葉克己の新作展 アジアの文字
11月 57回 伊勢克也展 イメージのマカロニ
12月 58回 篷田やすひろ展 ピープル

1991
1月 59回 舟橋全二展
2月 60回 太田徹也展 ダイヤグラム
3月 61回 ペア・アーノルディ展
4月 62回 澤田泰廣展 P2(Painting×Printing)
5月 63回 新井苑子展 インスピレーションを描く
6月 64回 Communication & Print
新作ポスター 10人展
7月 65回 中垣信夫＋中垣デザイン事務所展
8月 66回 アートワークス展Ⅵ
10月 67回 Trans-Art 91展
12月 68回 '91 Tokyo ADC展

1992
1月 69回 アイヴァン·チャマイエフ展 コラージュ
2月 70回 立花ハジメ初の個展
3月 71回 第4回東京TDC展
4月 72回 ヘンリク・トマシェフスキ展
5月 73回 シーモア・クワスト展 メタル彫刻
6月 74回 鹿目尚志展 BOX・XX
7月 75回 中村誠 個展
8月 76回 リック・パリセンティ展
9月 77回 葛西薫展 'AERO'
10月 78回 灘本唯人、宇野亜喜良、和田誠、
山口はるみ展
11月 79回 ポール・ランド展
12月 80回 フロシキ展

1993
1月 81回 小島良平展 Tropica Grafica
2月 82回 稲越功一展 アウト・オブ・シーズン
3月 83回 '92 Tokyo ADC展
4月 84回 第5回東京TDC展
5月 85回 U.G.サトーのポスター展 "Treedom"
6月 86回 オマージュ 向秀男展
7月 87回 文字からのイマジネーション展
8月 88回 現代香港のデザイン8人展
9月 89回 勝井三雄展 光の国
10月 90回 河村要助、矢吹申彦、湯村輝彦、
安西水丸展
11月 91回 ソール・バス展
12月 92回 グリーティング・ポップアップ13人展

1994
1月 93回 栗津潔展 H^2O Earthman
2月 94回 第6回東京TDC展
3月 95回 上條喬久展 Windscape Mindscape
4月 96回 片山利弘展
5月 97回 永井一正展
6月 98回 オランダのグラフィックデザイン100年展
7月 99回 '94 Tokyo ADC展
8月 100回 グラフィック・グッズ展
10月 101回 平野甲賀「文字の力」展
10月 九州の九人の九つの個性展
11月 102回 亀倉雄策ポスター新作展
12月 103回 原研哉展
12月 土橋とし子、中村幸子、メグ·ホソキ3人展

1995
1月 104回 ブルーノ・ムナーリ展
2月 105回 日本のブックデザイン展1946-95
3月 106回 第7回東京TDC展
4月 107回 ピーター・ブラッティンガ展
5月 108回 田中一光展 人間と文字
6月 109回 ニクラウス·トロックスラーポスター展
7月 110回 '95 Tokyo ADC展
8月 111回 リズム&ヒューズの
コンピュータグラフィックス展
9月 112回 八木保展 自然観
9月 特別展 世界のグラフィック20人展
ggg Books 20冊刊行記念
10月 113回 モダン・タイポグラフィの流れ展−1
11月 114回 戸田正寿・イヤイヤランド展
12月 115回 日本のイラストレーション50年展

1996
1月 116回 篷田やすひろ展 お江戸で、ゆらゆら
2月 117回 モダン・タイポグラフィの流れ展−2
3月 118回 ポスター 23人展 イン・サンパウロ
4月 119回 第8回東京TDC展
5月 120回 現代ハンガリーのグラフィック4人展
6月 121回 勝岡重夫タイポグラフィックアート展
7月 122回 '96 Tokyo ADC展
8月 123回 前田ジョン「かみとコンピュータ」展
9月 124回 K2-黒田征太郎／長友啓典「二脚の椅子」展
10月 125回 チェコ·アヴァンギャルド·ブックデザイン
1920s-'30s
11月 126回 Graphic Wave 1996
青木克憲＋佐藤卓＋山形季央
12月 127回 アラン・ル・ケルネ展

1997
1月 128回 下谷二助展 人じん
1月 特別展 (CCGA)ジョセフ・アルバース展
2月 129回 大橋正展 体温をもつ野菜たち
3月 130回 東京TDC展
4月 131回 仲條正義○○○展
5月 132回 今日の雑誌8誌による·特集エコロジー展
6月 133回 横尾忠則ポスター展
吉祥招福繁昌描き下ろし!!
7月 134回 '97 Tokyo ADC展
8月 135回 河原敏文とボリゴン・ピクチュアズ展
9月 136回 メキシコ10人展
10月 137回 Graphic Wave 1997
秋田寛＋井上里枝＋福島治
10月 特別展「勝見勝賞」10周年記念展
11月 138回 福田繁雄のポスター〈SUPPORTER〉
12月 139回 GLOBAL展 世界33人の
デザイナーによるデュオポスター

1998
1月 140回 鈴木八朗展 8RO ART & AD
2月 141回 オーデルマット＋ティッシ展
3月 142回 スタシス・エイドゥリゲヴィチウス展
4月 143回 東京TDC展'98
5月 144回 スタジオ・ドゥンバー展
6月 145回 山本容子展 オペラレッスン
7月 146回 '98 Tokyo ADC展
8月 147回 河口洋一郎展 電脳宇宙への旅
9月 148回 Graphic Wave 1998
蝦名龍郎＋平野敬子＋三木健
10月 149回 グンター・ランボー展
11月 150回 フィリップ・アペロー展
12月 151回 ヘルベルト・ロイピン展

1999
1月 152回 海外作家によるFuroshiki Graphics展
2月 153回 日本のタイポグラフィック1946-95展
3月 154回 木村恒久構成フォト・グラフィックス展
3月 特別展 堀内誠一の仕事展雑誌づくりの決定的瞬間
4月 155回 '99 TDC展
5月 156回 現代ブルガリアのグラフィックデザイン展
6月 157回 日比野克彦展 誘拐したい
7月 158回 '99 ADC展
7月 特別展 前田ジョン One-line.com
8月 159回 矢萩喜従郎展
9月 160回 Graphic Wave 1999
鈴木守＋松下計＋米村浩
10月 161回 FUSE展
11月 162回 松井桂三展
12月 163回 ポール・デイヴィスのポスター展
12月 特別展 アーヴィング・ペン
三宅一生の仕事への視点

2000
1月 164回 Graphic Message for Ecology展
1月 特別展 篠山紀信&マニュエル・ルグリ展
2月 165回 ブルーノ・モングッツィ展
形と機能の詩人
3月 166回 伊藤憲治展 医学誌「ステトスコープ」の
表紙デザイン半世紀
4月 167回 '00 TDC展
5月 168回 Poster Works Nagoya 12
岡本滋夫＋11人のデザイナーたち
6月 169回 なにわの、ここてこグラフィック展
7月 170回 2000 ADC展
8月 171回 日宣美の時代
日本のグラフィックデザイン1951-70展
9月 172回 Graphic Wave 2000
秋山具義＋Tycoon Graphics＋中島英樹
10月 173回 D-ZONE／戸田ツトム展
11月 174回 ピエール・ベルナール展
12月 175回 本とコンピュータ展

2001
1月 176回 二〇〇一年木田安彦展
2月 177回 イタロ・ルピ展
3月 178回 "Spring has come"
松永真、ディテールの競演。
4月 179回 01 TDC展
5月 180回 コントラプンクト展
6月 181回 原弘のタイポグラフィ展
7月 182回 2001 ADC展
8月 183回 灘本唯人展 にんげんもよう
9月 184回 Graphic Wave 2001
澁谷克彦＋永井一史＋ひびのこづえ
10月 185回 ハングルポスター展
11月 186回 サイトウマコト展
12月 187回 チップ・キッド展

2002
1月 188回 ウーヴェ・レシュ展
2月 189回 宇野亜喜良展
3月 190回 デザイン教育の現場から：
セント・ジュースト大学院の新手法
4月 191回 02 TDC展
5月 192回 DRAFT展
6月 193回 アラン・チャン展 東情西韻
6月 特別展 花森安治と暮しの手帖展
7月 194回 2002 ADC展
8月 195回 タナカノリユキ展 OUT OF DESIGN
9月 196回 Graphic Wave 2002
左合ひとみ＋澤田泰廣＋新村則人
10月 197回 SUN-AD人展
11月 198回 ブラジルのグラフィックデザイン展
ブックデザインにみる今日のブラジル
12月 199回 ハーブ・ルバリン展

2003

1月 200回 田中一光　ポスターとグラフィックアート展
2月 201回 サディク・カラムスターファ展
3月 202回 現代中国平面設計展
4月 203回 03 TDC展
5月 204回 ファブリカ展 1994-03 混沌から秩序へ
6月 205回 空山基展
7月 206回 2003 ADC展
8月 207回 新島実展　色彩とフォントの相互作用
9月 208回 Graphic Wave 2003
佐野研二郎＋野田凪＋服部一成
10月 209回 副田高行「広告の告白」展
11月 210回 ステファン・サグマイスター展
12月 211回 河野鷹思展

2004

1月 212回 永井一正ポスター展
2月 213回 伊藤桂司・谷口広樹・ヒロ杉山展
3月 214回 雑誌をデザインする集団キャップ展
4月 215回 04 TDC展
5月 216回 佐藤卓展　PLASTICITY
6月 217回 現代デンマークポスターの10年
7月 218回 2004 ADC展
8月 219回 バーンブルック・デザイン展
Friendly Fire
9月 220回 Graphic Wave 2004
工藤青石＋GRAPH＋生意気
10月 221回 杉浦康平雑誌デザインの半世紀展
11月 222回 佐藤可士和展　BEYOND
12月 223回 もう一人の山名文夫展　1920s－70s

2005

1月 224回 七つの顔のアサバ展
2月 225回 バラリンジ・デザイン展
3月 226回 青木克憲XX展
4月 227回 05 TDC展
5月 228回 和田誠のグラフィックデザイン
6月 229回 チャマイエフ&ガイスマー展
7月 230回 2005 ADC展
8月 231回 佐藤雅彦研究室展
9月 232回 Graphic Wave 2005
谷田一郎＋東泉一郎＋森本千絵
10月 233回 CCCP研究所展
11月 234回 祖父江慎＋cozfish展
12月 235回 スイスポスター 100年展

2006

1月 236回 亀倉雄策1915-1997展
2月 237回 野田凪展
3月 238回 シアン展
4月 239回 06 TDC展
5月 240回 永井一史／HAKUHODO DESIGN
6月 241回 田名網敬一主義展
7月 242回 2006 ADC展
8月 243回 アレクサンダー・ゲルマン展
9月 244回 Graphic Wave 2006: School of Design
古平正義＋平林奈緒美＋水野学＋山田英二
9月 特別展 AGI日本デザイン総会開催記念：掛け軸展
10月 245回 勝手に広告展（中村至男＋佐藤雅彦）
11月 246回 中島英樹展　CLEAR in the FOG
12月 247回 早川良雄展　日本のデザイン黎明期の証人

2007

1月 248回 EXHIBITIONS（Part Ⅰ）
2月 EXHIBITIONS（Part Ⅱ）
3月 249回 キムラカツ展：問いボックス店
4月 250回 07 TDC展
5月 251回 ヘルムート・シュミット：
デザイン イズ アティテュード
6月 252回 廣村正彰：2D⇔3D
7月 253回 2007 ADC展
8月 254回 ワルシャワの風 1966-2006
9月 255回 佐野研二郎：ギンザ・サローネ
10月 256回 中島信也CM展：
中島信也と29人のアートディレクター
11月 257回 Welcome to Magazine Pool：
雑誌デザイン10人の越境者たち
12月 258回 Aoba Show：
青葉益輝ワン・マン・ショー

2008

1月 259回 アーットダ！戸田正寿ポスターアート展
2月 260回 グラフィックデザインの時代を築いた
20人の証言　Interviews by 柏木博
3月 261回 TEXTASY:
プロディ・ノイエンシュヴァンダー展
4月 262回 08 TDC展
5月 263回 アラン・フレッチャー：
英国グラフィックデザインの父
6月 264回 がんばれニッポン、を広告してきたんだ
そう言えば、俺。応援団長佐々木●宏
7月 265回 2008 ADC展
8月 266回 Now Updating… THA／
中村勇吾のインタラクティブデザイン
9月 267回 平野敬子「デザインの起点と終点と起点」
10月 268回 「白」原研哉展
11月 269回 M/M(Paris) The Theatre Posters
12月 270回 OYKOT Wieden+Kennedy Tokyo:
10 Years of Fusion

2009

1月 271回 きらめくデザイナーたちの競演―
DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展
2月 272回 Helvetica forever: Story of a Typeface
ヘルベチカ展
3月 273回 DRAFT Branding & Art Director
4月 274回 09 TDC展
5月 275回 矢萩喜従郎展
［Magnetic Vision／新作100点］
6月 276回 マックス・フーバー展
7月 277回 2009 ADC展
8月 278回 ［ラストショウ］細谷巖アートディレクション展
9月 279回 銀座界隈隈ガヤガヤ青春ショー
～言い出しっぺ 横尾忠則～
灘本唯人・宇野亜喜良・和田誠・横尾忠則4人展
10月 280回 山形季央展
11月 281回 北川一成
12月 282回 広告批評展 ひとつの時代の終わりと始まり

2010

1-2月 283回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅱ
田中一光ポスター 1953―1979
3月 284回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅲ
福田繁雄のヴィジュアル・ジャンピング
4月 285回 TDC展 2010
5月 286回 TALKING THE DRAGON 井上嗣也展
6月 287回 NB@ggg ネヴィル・ブロディ 2010
7月 288回 2010 ADC展
8月 289回 ラルフ・シュライフォーゲル展
9月 290回 プッシュピン・パラダイム
シーモア・クワスト｜ポール・デイヴィス｜
ミルトン・グレイザー｜ジェームズ・マクミラン
10月 291回 海と山と新村則人
11月 292回 服部一成二千十年十一月
12月 293回 EUPHRATES ユーフラテス展
～研究から表現へ～

2011

1月 294回 秀英体100
2月 295回 イアン・アンダーソン／ザ・デザイナーズ・
リパブリックがトーキョーに帰ってきた。
3月 296回 デザイン　立花文穂
4月 297回 TDC展 2011
5月 298回 佐藤晃一ポスター
6月 299回 レイモン・サヴィニャック展：
41歳、「牛乳石鹸モンサヴォン」のポスターで
生まれた巨匠
7月 300回 2011 ADC展
8月 301回 ［ジー ジー ジー ジー］グルーヴィジョンズ展
9月 302回 工藤青石展「形と色と構造の感情」
10月 303回 100 ggg Books 100 Graphic Designers
11月 304回 イデオポリス東京：
スクール・オブ・ヴィジュアルアーツ／
美術学修士課程卒業制作展
12月 305回 杉浦康平・マンダラ発光

2012

1-2月 306回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅳ
没後10周年記念企画
田中一光ポスター 1980―2002
3月 307回 ロトチェンコ
―彗星のごとく、ロシア・アヴァンギャルドの寵児―
4月 308回 TDC展 2012
5月 309回 キギ展 植原亮輔と渡邉良重
6月 310回 ジヤンピン・ヘ　フラッシュバック
7月 311回 2012 ADC展
8月 312回 THE POSTERS 1983-2012
世界ポスタートリエンナーレトヤマ受賞作品展
9月 313回 寄藤文平の夏の一研究
10月 314回 AGI展
11月 315回 横尾忠則 初のブックデザイン展
12月 316回 テセウス・チャン：ヴェルクNo.20銀座
THE EXTREMITIES OF THE PRINTED MATTER

2013

1月 317回 松永真ポスター 100展
2月 318回 カリ・ピッポ　ポスターとドローイング
シンプル・ストロング・シャープ
3月 319回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅴ
LIFE 永井一正ポスター展

ggg
1992-2013

1992
1月 1回 Trans-Art 91展
3月 2回 アイヴァン・チャマイエフ展　コラージュ
4月 3回 第4回東京TDC展
5月 4回 リック・バリセンティ展
6月 5回 シーモア・クワスト展　メタル彫刻
7月 6回 デザイン・プリント・ペーパー展
8月 7回 ヴァン・オリバー展
10月 8回 中村誠 個展
10月 9回 マイケル・メイヴリー展
11月 10回 灘本唯人、宇野亜喜良、和田誠、山口はるみ展

1993
1月 11回 フロシキ展
2月 12回 ホワイ・ノット・アソシエイツ展
3月 13回 アレン・ホリ+ロバート・ナカタ展
4月 14回 '92 Tokyo ADC展
5月 15回 ラッセル・ウォーレン−フィッシャー展
6月 16回 第5回東京TDC展
7月 17回 文字からのイマジネーション展
8月 18回 デザイン・プリント・ペーパー展　PartⅡ
9月 19回 ビル・ソーバーン展
10月 20回 U.G.サトーのポスター展 "Treedom"
11月 21回 勝井三雄展　光の国
12月 22回 現代香港のデザイン8人展

1994
1月 23回 ソール・バス展
2月 24回 グリーティング・ポップアップ13人展
3月 25回 リュディ・バウア／インテグラルコンセプト展
4月 26回 河村要助、矢吹申彦、湯村輝彦、安西水丸展
5月 27回 ジェニファ・モーラ展
6月 28回 永井一正展
7月 29回 ウーヴェ・レシュ展
8月 30回 '94 Tokyo ADC展
9月 31回 デザイン・プリント・ペーパー展　PartⅢ
10月 32回 デビッド・カーソン&ゲーリー・ケブキ展
12月 33回 亀倉雄策ポスター新作展

1995
1月 34回 ヘルマン・モンタルボ展
2月 35回 ブルーノ・ムナーリ展
3月 36回 グラッパ・デザイン展
4月 37回 第7回東京TDC展
5月 38回 ミシェル・ブーヴェ展
6月 39回 田中一光展　人間と文字
7月 40回 テレロング展
8月 41回 '95 Tokyo ADC展
9月 42回 デザイン・プリント・ペーパー展 Ⅳ
10月 43回 ペレ・トレント展
11月 44回 アジアのデザイナー 6人展

1996
1月 45回 日本のイラストレーション50年展
2月 46回 マーゴ・チェイス展
3月 47回 ヴェルネル・イェカー展
4月 48回 グンター・ランボー展
5月 49回 第8回東京TDC展
6月 50回 カリ・ピッポ展
7月 51回 現代ハンガリーのグラフィック4人展
8月 52回 '96 Tokyo ADC展
9月 53回 前田ジョン「かみとコンピュータ」展
10月 54回 アラン・ル・ケルネ展
11月 55回 ウッディ・パートル展

1997
1月 56回 ジョアン・マシャド展
2月 57回 K2オオサカ展　黒田征太郎+長友啓典
3月 58回 グラフィックデザイン・イン・チャイナ展
4月 59回 東京TDC展
5月 60回 メキシコ10人展
7月 61回 カトー・デザイン展　思考するデザイン
8月 62回 '97 Tokyo ADC展
9月 63回 ラルフ・シュライフォーゲル展
10月 64回 ジェームズ・ビクトル展
11月 65回 GLOBAL展　世界33人のデザイナーによるデュオポスター

1998
1月 66回 ファイトヘルベ／デ・ヴリンゲル展
2月 67回 ジャン・ベノア・レヴィ展
3月 68回 〈トロイカ〉ロシア3人展
4月 69回 フィリップ・アペローグ展
6月 70回 東京TDC展'98
7月 71回 スタジオ・ドゥンバー展
8月 72回 '98 Tokyo ADC展
9月 73回 ザフリキ展
10月 74回 デビッド・タルタコーバ展
11月 75回 台湾四人展

1999
1月 76回 海外作家によるFuroshiki Graphics展
2月 77回 ピエール・ニューマン展
3月 78回 ボーラ・シェアのグラフィックデザイン展
5月 79回 ハンブルクのグラフィックデザイン展
6月 80回 '99 TDC展
7月 81回 ヤン・ライリッヒJr.展
8月 82回 '99 ADC展
9月 83回 スコット・マケラ［WIDE OPEN］展
10月 84回 チャズ・マヴィヤネ−デイヴィースの世界展
11月 85回 マカオ2人展

2000
1月 86回 Graphic Message for Ecology展
2月 87回 松井桂三展
3月 88回 ポール・デイヴィス展
4月 89回 なにわの、こてこてグラフィック展
5月 90回 '00 TDC展
6月 91回 アントン・ベイク展
7月 92回 ピエール・ベルナール展
9月 93回 2000 ADC展
10月 94回 イタロ・ルビ展
11月 95回 デザイン教育の現場から：ベルリン芸術大学オルガー・マチス教室によるアプローチ

2001
1月 96回 二〇〇一年木田安彦展
2月 97回 コントラプンクト展
3月 98回 ザルツブルク音楽祭ポスター展
5月 99回 01 TDC展
6月 100回 チップ・キッド展
7月 101回 ハングルポスター展
8月 102回 2001 ADC展
9月 103回 ウォルフガング・ワインガルト展
10月 104回 "Spring has come"松永真、ディテールの競演。
11月 105回 デザイン教育の現場からⅡ：セント・ジュースト大学院の新手法

2002
1月 106回 灘本唯人展　にんげんもよう
2月 107回 サイトウマコト展
3月 108回 オット+シュタイン展
4月 109回 タピロ展
5月 110回 02 TDC展
7月 111回 ウィーンのポスター展：ウィーン市立図書館アーカイブ1883-2002
7月 112回 三木健展
9月 113回 2002 ADC展
10月 114回 サディク・カラムスターファ展
11月 115回 中国グラフィックデザイン展

2003
1月 116回 SUN-AD人展
2月 117回 田中一光　ポスターとグラフィックアート展
3月 118回 ファブリカ展 1994-03 混沌から秩序へ
4月 119回 カン・タイキョン+フリーマン・ラウ展
6月 120回 03 TDC展
7月 121回 ルーバ・ルコーバ展
8月 122回 2003 ADC展
9月 123回 ステファン・サグマイスター展
10月 124回 ヨーロッパの文化ポスター展：ノイエ・ザムルング・ミュンヘンの収蔵作品より
11月 125回 空山基展

2004
1月 126回 副田高行「広告の告白」展
2月 127回 永井一正ポスター展
3月 128回 現代デンマークポスターの10年
4月 129回 雑誌をデザインする集団キャップ展
5月 130回 04 TDC展
6月 131回 ピエール・メンデル展
8月 132回 2004 ADC展
9月 133回 バーンブルック・デザイン展　Friendly Fire
10月 134回 チェコのポスター展：プラハ美術工芸博物館コレクション1960-2003
11月 135回 バラリンジ・デザイン展

2005
1月 136回 杉浦康平の雑誌デザイン半世紀展
2月 137回 シアン展　ベルリンでの13年
3月 138回 佐藤可士和展　BEYOND
4月 139回 メーフィス&ファン・デュールセン展
5月 140回 05 TDC展
7月 141回 CCCP研究所展
8月 142回 2005 ADC展
9月 143回 青木克憲XX展
10月 144回 ドイツAGIグラフィックデザイン展
11月 145回 和田誠のグラフィックデザイン

2006
1月 146回 スイスポスター 100年展
2月 147回 グラフィック・ソート・ファシリティ展
3月 148回 野田凪展
4月 149回 ブルーノ・オルダーニ展
5月 150回 06 TDC展
6月 151回 ブラック&ホワイトポスター展
8月 152回 2006 ADC展

2007
5月 153回 EXHIBITIONS
7月 154回 07 TDC展
8月 155回 ヘルムート・シュミット：デザイン イズ アティテュード
10月 156回 2007 ADC展
11月 157回 キムラカツ展：問いボックス店

2008
1月 158回 Welcome to Magazine Pool：雑誌デザイン10人の越境者たち
2月 159回 佐野研二郎：ギンザ・サローネ・オーサカ
4月 160回 中島信也CM展：中島信也と29人のアートディレクター
6月 161回 08 TDC展
8月 162回 Now Updating… THA／中村勇吾のインタラクティブデザイン
9月 163回 2008 ADC展
10月 164回 Aoba Show：青葉益輝ワン・マン・ショー
11月 165回 真 and / or 善　杉崎真之助と高橋善丸のグラフィックデザイン

2009
1月 166回 Helvetica forever: Story of a Typeface ヘルベチカ展
3月 167回 きらめくデザイナーたちの競演―DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展
4月 168回 DRAFT: Branding & Art Director
6月 169回 09 TDC展
8月 170回 2009 ADC展
10月 171回 矢萩喜従郎展［Magnetic Vision　新作60/100点］

2010
1月 172回 感じる箱展 grafの考えるグラフィックデザインの実験と検証
3月 173回 北川一成
5月 174回 TDC展 2010
7月 175回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅱ 福田繁雄のヴィジュアル・ジャンピング
9月 176回 2010 ADC展
11月 177回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅱ 田中一光ポスター 1953−1979

2011
1月 178回 GRAPHIC WEST 3 phono/graph―音・文字・グラフィック―
3月 179回 秀英体100
5月 180回 TDC展 2011
7月 181回 服部一成二千十一年夏大阪
9月 182回 2011 ADC展
11月 183回 100 ggg Books 100 Graphic Designers

2012
1月 184回 GRAPHIC WEST 4「奥村昭夫と仕事」展
3月 185回 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅳ 没後10周年記念企画 田中一光ポスター 1980-2002
5月 186回 TDC展 2012
7月 187回 立花文穂展
9月 188回 2012 ADC展
11月 189回 THE POSTERS 1983-2012 世界ポスタートリエンナーレトヤマ受賞作品展

2013
1月 190回 GRAPHIC WEST 5 type trip to Osaka typographics ti: 270

CCGA

1995-2013

1995
4-7月 グラフィック・ビジョン：
ケネス・タイラーとアメリカ現代版画の30年
8-10月 ロイ・リキテンスタイン：
エンタブラチュア→ヌード
11-1月 一瞬の刻印：ロバート・マザウェル展

1996
3-4月 アメリカ版画の現在地点：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.1
4-7月 デイヴィッド・ホックニー展
7-10月 ジョセフ・アルバース展
10-1月 スタイルを越えて：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.2

1997
3-6月 ジェームズ・ローゼンクイスト展
6-9月 版画における抽象：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.3
10-11月 大竹伸朗：Printing / Painting展
12-1月 線／色彩／イメージ：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.4

1998
3-5月 フランク・ステラ／ケネス・タイラー
構築する版画：
アーティストとプリンター、30年の軌跡
5-9月 主張する黒：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.5
9-12月 形象としての紙：アラン・シールズ展

1999
3-5月 福田美蘭展
6-9月 かたる かたち：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.6
9-12月 版画の話展

2000
3-6月 New Works 1998-1999：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.7
6-9月 太田三郎：存在と日常
9-12月 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ設立展：
ポスターグラフィックス 1950-2000

2001
3-5月 版画集への招待：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.8
5-7月 折元立身：1972-2000
8-10月 藤本由紀夫：四次元の読書
10-12月 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ展 Vol.2：
グラフィックデザインの時代

2002
3-6月 空間に躍りでた版画たち：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.9
6-9月 矢萩喜従郎：視触、視弾、そして眼差しの記憶
9-12月 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ展 Vol.3：
個性の時代

2003
3-4月 絵画－永遠の現在を求めて：
リチャード・ゴーマン展
4-6月 色彩としての紙：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.10
6-9月 ヘレン・フランケンサーラー木版画展
9-12月 タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション 新収蔵作品展

2004
3-6月 イラストレーションの黄金時代
6-9月 パスワード：日本とデンマークの
アーティストによる対話
9-12月 版で発信する作家たち2004

2005
3-6月 アメリカ現代木版画の世界：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.12
6-9月 Breathing Light：吉田重信
10-12月 decade―CCGAと6人の作家たち

2006
3-6月 版に描く：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.13
6-9月 藤幡正樹：不完全さの克服
イメージとメディアによって創り出される、
新たな現実感。
9-12月 野田哲也：日記

2007
3-6月 凹版表現の魅力：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.14
6-9月 再生する版画：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.15
9-12月 ユニーク・インプレッション：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.16

2008
3-6月 厚い色：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.17
6-9月 大きな版画、小さな版画：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.18
9-11月 黒のモノローグ：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.19

2009
2-6月 作品と題名：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.20
6-9月 きらめくデザイナーたちの競演―
DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展
9-12月 赤のちから：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.21

2010
3-6月 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅱ
田中一光ポスター 1953－1979
6-9月 ロイ・リキテンスタイン展：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.22
9-12月 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅲ
福田繁雄のヴィジュアル・ジャンピング

2011
6-9月 秀英体100
9-12月 幾何学的抽象の世界：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.23

2012
3-6月 日本ポルトガル交流
版で発信する作家たち：after 3.11
6-9月 DNPグラフィックデザイン・アーカイブ収蔵品展Ⅳ
没後10周年記念企画
田中一光ポスター 1980-2002
9-12月 銅版の表現力：
タイラーグラフィックス・
アーカイブコレクション展 Vol.24

2013
2月 特別展 第24回田善顕彰版画展

ggg

1986-2013

1986

Mar. 1 Tadashi Ohashi Exhibition
Apr. 2 Shigeo Fukuda Exhibition
May 3 Yukimasa Okumura Exhibition
Jun. 4 Iku Akiyama Exhibition
Jul. 5 '86 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 6 Art Works Exhibition Ⅰ
Sep. 7 Koichi Sato Exhibition
Oct. 8 Kiyoshi Awazu Exhibition
Nov. 9 Herbert Bayer Exhibition
Dec. 10 K2 Live! Exhibition

1987

Jan. 11 Shuhei Tsuji Iroha Exhibition
Feb. 12 Flower Expo + Expo Logo Exhibition
Mar. 13 Masaki Fujihata Exhibition
Apr. 14 Shin Matsunaga Exhibition
May 15 Mizumaru Anzai Exhibition
Jun. 16 Lou Dorfsman and CBS's Creative Works Exhibition
Jul. 17 '87 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 18 Art Works Exhibition Ⅱ
Sep. 19 Takenobu Igarashi Exhibition
Oct. 20 Masuteru Aoba Exhibition
Nov. 21 Holger Matthies Exhibition
Dec. 22 Milton Glaser Exhibition

1988

Jan. 23 Katsu Kimura Exhibition
Feb. 24 Hiroki Taniguchi Exhibition
Mar. 25 Ginza Hyakuten Original Pictures for Cover Exhibition
Apr. 26 Katsu Yoshida Exhibition
May 27 AGI '88 Tokyo Exhibition
Jun. 28 Issey Miyake Poster Exhibition
Jul. 29 '88 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 30 Art Works Exhibition Ⅲ
Sep. 31 Information Posters Recruit Exhibition
Oct. 32 Yoshio Hayakawa Exhibition
Nov. 33 Masayoshi Nakajo Exhibition
Dec. 34 Stasys Eidrigevičius Exhibitionn

1989

Jan. 35 Shopping Bag Design Exhibition
Feb. 36 Kijuro Yahagi Exhibition
Mar. 37 Texture Exhibition
Apr. 38 Noriyuki Tanaka Exhibition
May 39 Otl Aicher Exhibition
Jun. 40 Kazumi Kurigami Exhibition
Jul. 41 Shinichiro Wakao Exhibition
Aug. 42 Art Works Exhibition Ⅳ
Sep. 43 Kazumasa Nagai Exhibition
Oct. 44 Europalia '89 Japan 12 Artists' Original Poster Exhibition
Nov. 45 Charles Anderson Exhibition
Dec. 46 Etsushi Kiyohara Exhibition

1990

Jan. 47 Shigeru Akizuki Exhibition
Feb. 48 Nobuyoshi Kikuchi Exhibition
Mar. 49 Tsunao Harada Exhibition
Apr. 50 Ikko Tanaka Exhibition
May 51 Ryuichi Yamashiro Exhibition
Jun. 52 Keizo Matsui Exhibition
Jul. 53 Takayuki Terakado Exhibition
Aug. 54 Art Works Exhibition Ⅴ
Sep. 55 Keiichi Tahara Exhibition
Oct. 56 Katsumi Asaba Exhibition
Nov. 57 Katsuya Ise Exhibition
Dec. 58 Yasuhiro Yomogida Exhibition

1991

Jan. 59 Zenji Funabashi Exhibition
Feb. 60 Tetsuya Ohta Exhibition
Mar. 61 Per Arn oldi Exhibition
Apr. 62 Yasuhiro Sawada Exhibition
May 63 Sonoko Arai Exhibition
Jun. 64 Communication & Print Exhibition
Jul. 65 Nobuo Nakagaki Design Office Exhibition
Aug. 66 Art Works Exhibition
Oct. 67 Trans-Art '91 Exhibition
Dec. 68 '91 Tokyo ADC Exhibition

1992

Jan. 69 Ivan Chermayeff Exhibition
Feb. 70 Hajime Tachibana Exhibition
Mar. 71 The 4th Tokyo TDC Exhibition
Apr. 72 Henryk Tomaszewski Exhibition
May 73 Seymour Chwast Exhibition
Jun. 74 Takashi Kanome Exhibition
Jul. 75 Makoto Nakamura Exhibition
Aug. 76 Rick Valicenti Exhibition
Sep. 77 Kaoru Kasai Exhibition
Oct. 78 Tadahito Nadamoto, Akira Uno, Makoto Wada, Harumi Yamaguchi Exhibition
Nov. 79 Paul Rand Exhibition
Dec. 80 Furoshiki Exhibition

1993

Jan. 81 Ryohei Kojima Exhibition
Feb. 82 Koichi Inakoshi Exhibition
Mar. 83 '92 Tokyo ADC Exhibition
Apr. 84 The 5th Tokyo TDC Exhibition
May 85 U.G. Sato Exhibition
Jun. 86 Hideo Mukai Exhibition
Jul. 87 Imagination of Letters Exhibition
Aug. 88 8 Designers in Today's Hong Kong
Sep. 89 Mitsuo Katsui Exhibition
Oct. 90 Yosuke Kawamura, Nobuhiko Yabuki, Teruhiko Yumura, Mizumaru Anzai Exhibition
Nov. 91 Saul Bass Exhibition
Dec. 92 Pop-up Greetings Exhibition

1994

Jan. 93 Kiyoshi Awazu Exhibition
Feb. 94 The 6th Tokyo TDC Exhibition
Mar. 95 Takahisa Kamijyo Exhibition
Apr. 96 Toshihiro Katayama Exhibition
May 97 Kazumasa Nagai Exhibition
Jun. 98 Dutch Graphic Design A Century Exhibition
Jul. 99 '94 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 100 Graphic Goods Exhibition
Oct. 101 Koga Hirano Exhibition
Oct. Kyushu 9 Designers Exhibition
Nov. 102 Yusaku Kamekura Exhibition
Dec. 103 Kenya Hara Exhibition
Dec. Toshiko Tsuchihashi, Sachiko Nakamura, Meg Hosoki Exhibition

1995

Jan. 104 Bruno Munari Exhibition
Feb. 105 Book Design in Japan 1946-95 Exhibition
Mar. 106 The 7th Tokyo TDC Exhibition
Apr. 107 Pieter Brattinga Exhibition
May 108 Ikko Tanaka Exhibition
Jun. 109 Niklaus Troxler Exhibition
Jul. 110 '95 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 111 Rhythm & Hues Computer Graphics
Sep. 112 Tamotsu Yagi Exhibition
Sep. Special: 20 Graphic Designers of the World, 10th Anniversary of ggg
Oct. 113 Transition of Modern Typography-1 Exhibition
Nov. 114 Masatoshi Toda Exhibition
Dec. 115 50 Years in Japanese Illustrations Exhibition

1996

Jan. 116 Yasuhiro Yomogida Exhibition
Feb. 117 Transition of Modern Typography-2 Exhibition
Mar. 118 Mar. 118 Posters by 23 Artists in São Paulo Exhibition
Apr. 119 The 8th Tokyo TDC Exhibition
May 120 Contemporary Graphics in Hungary Exhibition
Jun. 121 Shigeo Katsuoka Exhibition
Jul. 122 '96 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 123 John Maeda Paper and Computers Exhibition
Sep. 124 K2−Seitaro Kuroda / Keisuke Nagatomo Exhibition
Oct. 125 Czech Avant-Garde Book Design 1920s-'30s Exhibition
Nov. 126 Graphic Wave 1996: Katsunori Aoki / Taku Satoh / Toshio Yamagata
Dec. 127 Alain Le Quernec Exhibition

1997

Jan. 128 Nisuke Shimotani Exhibition
Jan. Special: CCGA− The Prints of Josef Albers
Feb. 129 Tadashi Ohashi Exhibition
Mar. 130 The 10th of Tokyo TDC Exhibition
Apr. 131 Masayoshi Nakajo Exhibition
May 132 Magazines Today Exhibition
Jun. 133 Tadanori Yokoo's Poster Exhibition
Jul. 134 '97 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 135 Toshifumi Kawahara and Polygon Pictures Exhibition
Sep. 136 Mexican 10 Graphic Designers Exhibition
Oct. 137 Graphic Wave 1997: Kan Akita / Satoe Inoue / Osamu Fukushima
Oct. Special: The 10th Anniversary of Masaru Katsumi Award Exhibition
Nov. 138 Shigeo Fukuda Exhibition
Dec. 139 Global Exhibition

1998

Jan. 140 8ro Art & AD Exhibition
Feb. 141 Odermatt + Tissi Exhibition
Mar. 142 Stasys Eidrigevičius Exhibition
Apr. 143 Tokyo TDC '98 Exhibition
May 144 Studio Dumbar Exhibition
Jun. 145 Yoko Yamamoto Exhibition
Jul. 146 '98 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 147 Yoichiro Kawaguchi Exhibition
Sep. 148 Graphic Wave 1998: Tatsuo Ebina / Keiko Hirano / Ken Miki
Oct. 149 Gunter Rambow Exhibition
Nov. 150 Philippe Apeloig Exhibition
Dec. 151 Herbert Leupin Exhibition

1999

Jan. 152 Furoshiki Graphics by 18 Designers from around the World exhibition
Feb. 153 Transition of Modern Typography in Japan 1946-95 Exhibition
Mar. 154 Tsunehisa Kimura Exhibition
Mar. Special: The Works of Seiichi Horiuchi
Apr. 155 Tokyo TDC '99 Exhibition
May 156 Contemporary Bulgarian Graphic Design Exhibition
Jun. 157 Katsuhiko Hibino Exhibition
Jul. 158 '99 Tokyo ADC Exhibition
Jul. Special: John Maeda One-line.com
Aug. 159 Kijuro Yahagi Exhibition
Sep. 160 Graphic Wave 1999: Mamoru Suzuki / Kei Matsushita / Hiroshi Yonemura
Oct. 161 Fuse Posters and Fonts Exhibition
Nov. 162 Keizo Matsui Exhibition
Dec. 163 Paul Davis Posters Exhibition
Dec. Special: Irving Penn regards the works of Issey Miyake

2000

Jan. 164 Graphic Message for Ecology Exhibition
Jan. Special: Kishin Shinoyama & Manuel Legris
Feb. 165 Bruno Monguzzi Exhibition
Mar. 166 Kenji Itoh Exhibition
Apr. 167 Tokyo Type Directors Club 2000
May 168 Poster Works Nagoya 12 Exhibition
Jun. 169 Osaka Pop Exhibition
Jul. 170 2000 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 171 The Epoch of the JAAC Exhibition
Sep. 172 Graphic Wave 2000: Gugi Akiyama / Tycoon Graphics / Hideki Nakajima
Oct. 173 Tztom Toda Exhibition
Nov. 174 Pierre Bernard Exhibition
Dec. 175 The Book & The Computer Exhibition

2001

Jan. 176 2001 Yasuhiko Kida Exhibition
Feb. 177 Italo Lupi Exhibition
Mar. 178 Shin Matsunaga Exhibition
Apr. 179 Tokyo Type Directors Club 2001
May 180 Kontrapunkt Exhibition
Jun. 181 Typography of Hiromu Hara Exhibition
Jul. 182 2001 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 183 Tadahito Nadamoto Exhibition
Sep. 184 Graphic Wave 2001: Katsuhiko Shibuya / Kazufumi Nagai / Kozue Hibino
Oct. 185 Hangul Poster Exhibition
Nov. 186 Makoto Saito Exhibition
Dec. 187 Chip Kidd Exhibition

2002

Jan. 188 Uwe Loesch Exhibition
Feb. 189 Akira Uno Exhibition
Mar. 190 Design Education: Post-St.Joost's New Method
Apr. 191 Tokyo Type Directors Club 2002
May 192 Draft Exhibition
Jun. 193 Alan Chan Exhibition
Jun. Special: Yasuji Hanamori and Kurashi-no-Techo Exhibition
Jul. 194 2002 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 195 Noriyuki Tanaka Exhibition

Sep. 196 Graphic Wave 2002: Hitomi Sago / Yasuhiro Sawada / Norito Shinmura
Oct. 197 Sun-ad: The People Exhibition
Nov. 198 Graphic Shows Brazil Exhibition
Dec. 199 Herb Lubalin Exhibition

2003

Jan. 200 Ikko Tanaka Exhibition
Feb. 201 Sadik Karamustafa Exhibition
Mar. 202 Contemporary Chinese Graphic Design Exhibition
Apr. 203 Tokyo Type Directors Club 2003
May 204 Fabrica 1994-03 Exhibition
Jun. 205 Hajime Sorayama Exhibition
Jul. 206 2003 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 207 Minoru Niijima Exhibition
Sep. 208 Graphic Wave 2003: Kenjiro Sano / Nagi Noda / Kazunari Hattori
Oct. 209 Takayuki Soeda Exhibition
Nov. 210 Stefan Sagmeister Exhibition
Dec. 211 Takashi Kono Exhibition

2004

Jan. 212 Kazumasa Nagai Poster Exhibition
Feb. 213 Keiji Ito / Hiroki Taniguchi / Hiro Sugiyama Exhibition
Mar. 214 The Magazine Design Studio Cap Exhibition
Apr. 215 Tokyo Type Directors Club 2004
May 216 Taku Satoh Exhibition
Jun. 217 Danish Posters Over the Past 10 Years Exhibition
Jul. 218 2004 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 219 The Work of Barnbrook Design Exhibition
Sep. 220 Graphic Wave 2004: Aoshi Kudo / Graph / Namaiki
Oct. 221 A Half-Century of Magazine Design by Kohei Sugiura Exhibition
Nov. 222 Kashiwa Sato Exhibition: Beyond
Dec. 223 Another Side of Ayao Yamana Exhibition

2005

Jan. 224 The Seven Faces of Asaba Exhibition
Feb. 225 Balarinji Design Exhibition
Mar. 226 Katsunori Aoki XX Exhibition
Apr. 227 Tokyo Type Directors Club 2005
May 228 The Graphic Design of Makoto Wada
Jun. 229 Chermayeff & Geismar Inc. Exhibition
Jul. 230 2005 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 231 Masahiko Sato Laboratory Exhibition
Sep. 232 Graphic Wave 2005: Ichiro Tanida / Ichiro Higashiizumi / Chie Morimoto
Oct. 233 Laboratoires CCCP Exhibition
Nov. 234 Shin Sobue + Cozfish Exhibition
Dec. 235 Swiss Poster Art Exhibition

2006

Jan. 236 Yusaku Kamekura 1915-1997 Exhibition
Feb. 237 Nagi Noda Exhibition
Mar. 238 Cyan Exhibition
Apr. 239 Tokyo Type Directors Club 2006
May 240 Kazufumi Nagai Exhibition
Jun. 241 Keiichi Tanaami-ism Exhibition
Jul. 242 2006 Tokyo ADC Exhibition
Aug. 243 Alexander Gelman Exhibition
Sep. 244 Graphic Wave 2006: Masayoshi Kodaira/Naomi Hirabayashi/ Manabu Mizuno/Eiji Yamada
Sep. Special: AGI Congress 2006 in Japan, Kakejiku Exhibition
Oct. 245 Radical Advertisement Exhibition
Nov. 246 Hideki Nakajima Exhibition
Dec. 247 Yoshio Hayakawa Exhibition

2007

Jan. 248 Exhibitions (Part Ⅰ)
Feb. Exhibitions (Part Ⅱ)
Mar. 249 Katsu Kimura: Toi Boxes
Apr. 250 Tokyo Type Directors Club 2007
May 251 Helmut Schmid: Design is Attitude
Jun. 252 Masaaki Hiromura: 2D 3D
Jul. 253 2007 Tokyo Art Directors Club
Aug. 254 The Warsaw Wind 1966-2006
Sep. 255 Ginza Salone: Kenjiro Sano
Oct. 256 Shinya Nakajima TV Commercial Exhibition
Nov. 257 Welcome to Magazine Pool
Dec. 258 Aoba Show: Masuteru Aoba One-Man Show

2008

Jan. 259 Toda Today: Poster Art by Seiju Toda
Feb. 260 Testimonies from Twenty Pioneers of the Graphic Design Era: Interviews by Hiroshi Kashiwagi
Mar. 261 Textasy:Brody Neuenschwander
Apr. 262 Tokyo Type Directors Club 2008
May 263 Alan Fletcher:The Father of British Graphic Design
Jun. 264 Hiroshi Sasaki, Leader of a Cheering Squad for the Japanese Advertising World
Jul. 265 2008 Tokyo Art Directors Club
Aug. 266 Now Updating… The Interactive Design of THA/Yugo Nakamura
Sep. 267 The Design Cycle of Keiko Hirano: Origin, Terminus, Origin
Oct. 268 White: Kenya Hara Exhibition
Nov. 269 M/M(Paris) The Theatre Posters
Dec. 270 OYKOT Wieden + Kennedy Tokyo: 10 Years of Fusion

2009

Jan. 271 Brilliant Rivalry: Works by Outstanding Designers in the DNP Archives of Graphic Design
Feb. 272 Helvetica forever: Story of a typeface
Mar. 273 Draft: Branding and Art Directors
Apr. 274 Tokyo Type Directors Club 2009
May 275 Kijuro Yahagi: Magnetic Vision / 100 New Works
Jun. 276 Max Huber - a Graphic Designer
Jul. 277 2009 Tokyo Art Directors Club
Aug. 278 Hosoya Gan Last Show: Exhibition of an Art Director & Graphic Designer
Sep. 279 Tadahito Nadamoto, Akira Uno, Makoto Wada and Tadanori Yokoo Show
Oct. 280 Toshio Yamagata Exhibition
Nov. 281 Issay Kitagawa
Dec. 282 Kokoku Hihyo: End of One Era, Start of Another

2010

Jan.-Feb. 283 DNP Graphic Design Archives Collection Ⅱ Ikko Tanaka Posters 1953 -1979
Mar. 284 DNP Graphic Design Archives Collection Ⅲ Shigeo Fukuda's Visual Jumping
Apr. 285 Tokyo Type Directors Club 2010
May 286 Talking the Dragon: Tsuguya Inoue Exhibition
Jun. 287 NB@ggg: Neville Brody 2010
Jul. 288 2010 Tokyo Art Directors Club
Aug. 289 Ralph Schraivogel
Sep. 290 Push Pin Paradigm: Seymour Chwast | Paul Davis | Milton Glaser | James McMullan
Oct. 291 Seas and Mountains and Norito Shinmura
Nov. 292 Kazunari Hattori: November 2010
Dec. 293 The Euphrates Exhibition: From Research to Expression

2011

Jan. 294 Shueitai 100
Feb. 295 Ian Anderson / The Designers Republic C(H–)ōme (+81/3)
Mar. 296 Design | Fumio Tachibana
Apr. 297 Tokyo Type Directors Club 2011
May 298 Sato Koichi Poster Exhibition
Jun. 299 Raymond Savignac; at the age of 41, maestro born from poster [Monsavon au lait]
Jul. 300 2011 Tokyo Art Directors Club
Aug. 301 [gggg] Groovisions Exhibition
Sep. 302 Form, Color and Structure: The Sensual World of Aoshi Kudo
Oct. 303 100 ggg Books 100 Graphic Designers
Nov. 304 SVA MFA Design Ideopolis-Tokyo Exhibition
Dec. 305 Luminous Mandala: Book Designs of Kohei Sugiura

2012

Jan.-Feb. 306 DNP Graphic Design Archives Collection Ⅳ The 10th Memorial to Ikko Tanaka Ikko Tanaka Posters 1980-2002
Mar. 307 Rodchenko - Innovator of Russian Avant-Garde -
Apr. 308 Tokyo Type Directors Club 2012
May 309 KIGI Exhibition: Ryosuke Uehara and Yoshie Watanabe
Jun. 310 Jianping He Flashback
Jul. 311 2012 Tokyo Art Directors Club
Aug. 312 THE POSTERS 1983-2012 –The Prize-Winning Works from The International Poster Triennial in Toyama–
Sep. 313 Bunpei Yorifuji's Summer Homework Project
Oct. 314 AGI (Alliance Graphique Internationale) Exhibition
Nov. 315 Tadanori Yokoo The First Book Design Exhibition
Dec. 316 Theseus Chan: WERK No. 20 GINZA THE EXTREMITIES OF THE PRINTED MATTER

2013

Jan. 317 Shin Matsunaga Poster 100 Exhibition
Feb. 318 Kari Piippo Posters & Drawings – Simple, Strong and Sharp –
Mar. 319 DNP Graphic Design Archives Collection Ⅴ LIFE – Kazumasa Nagai Poster Exhibition

1992-2013

1992

Jan. 1 Trans-Art '91 Exhibition
Mar. 2 Ivan Chermayeff Exhibition
Apr. 3 The 4th Tokyo TDC Exhibition
May 4 Rick Valicenti Exhibition
Jun. 5 Seymour Chwast Exhibition
Jul. 6 Design Print & Paper Exhibition
Aug. 7 Vaughan Oliver Exhibition
Oct. 8 Makoto Nakamura Exhibition
Oct. 9 Michael Mabry Exhibition
Nov. 10 Tadahito Nadamoto, Akira Uno, Makoto Wada, Harumi Yamaguchi Exhibition

1993

Jan. 11 Furoshiki Exhibition
Feb. 12 Why Not Associates Exhibition
Mar. 13 Allen Hori + Robert Nakata Exhibition
Apr. 14 '92 Tokyo ADC Exhibition
May 15 Russell Warren-Fisher Exhibition
Jun. 16 The 5th Tokyo TDC Exhibition
Jul. 17 Imagination of Letters Exhibition
Aug. 18 Design, Prints, Paper Exhibition Part Ⅱ
Sep. 19 Bill Thorburn Exhibition
Oct. 20 U.G. Sato Exhibition
Nov. 21 Mitsuo Katsui Exhibition
Dec. 22 8 Designers in Today's Hong Kong

1994

Jan. 23 Saul Bass Exhibition
Feb. 24 Pop-up Greetings Exhibition
Mar. 25 Ruedi Baur/Integral Concept Exhibition
Apr. 26 Yosuke Kawamura, Nobuhiko Yabuki, Teruhiko Yumura, Mizumaru Anzai Exhibition
May 27 Jennifer Morla Exhibition
Jun. 28 Kazumasa Nagai Exhibition
Jul. 29 Uwe Loesch Exhibition
Aug. 30 '94 Tokyo ADC Exhibition
Sep. 31 Design, Print, Paper Exhibition Part Ⅲ
Oct. 32 David Carson + Gary Koepke Exhibition
Dec. 33 Yusaku Kamekura Exhibition

1995

Jan. 34 German Montalvo Exhibition
Feb. 35 Bruno Munari Exhibition
Mar. 36 Grappa Design Exhibition
Apr. 37 The 7th Tokyo TDC Exhibition
May 38 Michel Bouvet Exhibition
Jun. 39 Ikko Tanaka Exhibition
Jul. 40 Terrelonge Exhibition
Aug. 41 '95 Tokyo ADC Exhibition
Sep. 42 Design, Print, Paper Exhibition Ⅳ
Oct. 43 Peret Torrent Exhibition
Nov. 44 6 Designers in Asia Exhibition

1996

Jan. 45 Illustration in Japan 1946-1995 Exhibition
Feb. 46 Margo Chase Exhibition
Mar. 47 Werner Jeker Exhibition
Apr. 48 Gunter Rambow Exhibition
May 49 The 8th Tokyo TDC Exhibition
Jun. 50 Kari Piippo Exhibition
Jul. 51 Contemporary Graphics in Hungary Exhibition
Aug. 52 '96 Tokyo ADC Exhibition
Sep. 53 John Maeda Paper and Computers Exhibition
Oct. 54 Alain Le Quernec Exhibition
Nov. 55 Woody Pirtle Exhibition

1997

Jan. 56 João Machado Exhibition
Feb. 57 K2 Osaka Exhibition
Mar. 58 Graphic Design in China Exhibition
Apr. 59 '97 Tokyo TDC Exhibition
May 60 Mexican 10 Graphic Designers
Jul. 61 Cato Design Inc. Exhibition
Aug. 62 '97 Tokyo ADC Exhibition
Sep. 63 Ralph Schraivogel Exhibition
Oct. 64 James Victore Exhibition
Nov. 65 Global Exhibition

1998

Jan. 66 Faydherbe/De Vringer Exhibition
Feb. 67 Jean-BenoÎt Lévy Exhibition
Mar. 68 3 Dimensions of Russian Graphic Design Exhibition
Apr. 69 Philippe Apeloig Exhibition
Jun. 70 Tokyo TDC '98 Exhibition
Jul. 71 Studio Dumbar Exhibition
Aug. 72 '98 Tokyo ADC Exhibition
Sep. 73 Zafryki Exhibition
Oct. 74 David Tartakover Exhibition
Nov. 75 Taiwan 4 Exhibition

1999

Jan. 76 Furoshiki Graphics by 18 Designers from around the World Exhibition
Feb. 77 Pierre Neumann Exhibition
Mar. 78 Paula Scher Exhibition
May 79 Graphic Design from Hamburg Exhibition
Jun. 80 Tokyo TDC '99 Exhibition
Jul. 81 Jan Rajlich Jr.Exhibition
Aug. 82 '99 Tokyo ADC Exhibition
Sep. 83 Scott Makela Exhibition
Oct. 84 Chaz Maviyane-Davies Exhibition
Nov. 85 2 Men from Macau Exhibition Ung Vai Meng / Victor Hugo Marreiros

2000

Jan. 86 Graphic Message for Ecology Exhibition
Feb. 87 Keizo Matsui Exhibition
Mar. 88 Paul Davis Posters Exhibition
Apr. 89 Osaka Pop Exhibition
May 90 Tokyo Type Directors Club 2000
Jun. 91 Anthon Beeke Posters Exhibition
Jul. 92 Pierre Bernard Exhibition
Sep. 93 2000 Tokyo ADC Exhibition
Oct. 94 Italo Lupi Exhibition
Nov. 95 Design Education: The Classroom Approach of Holger Matthies, Berlin University of the Arts

2001

Jan. 96 2001 Yasuhiko Kida Exhibition
Feb. 97 Kontrapunkt Exhibition
Mar. 98 Poster of Salzburg Festival Exhibition
May 99 Tokyo Type Directors Club 2001
Jun. 100 Chip Kidd Exhibition
Jul. 101 Hangul Poster Exhibition
Aug. 102 2001 Tokyo ADC Exhibition
Sep. 103 Wolfgang Weingart Exhibition
Oct. 104 Shin Matsunaga Exhibition
Nov. 105 Design Education Ⅱ : Post-St.Joost's New Method

2002

Jan. 106 Tadahito Nadamoto Exhibition
Feb. 107 Makoto Saito Exhibition
Mar. 108 Ott + Stein Exhibition
Apr. 109 Studio Tapiro Exhibition
May 110 Tokyo Type Directors Club 2002
Jul. 111 Posters from the Vienna Municipal Library Archive Exhibition
Jul. 112 Ken Miki Exhibition
Sep. 113 2002 Tokyo ADC Exhibition
Oct. 114 Sadik Karamustafa Exhibition
Nov. 115 Chinese Graphic Design Exhibition

2003

Jan. 116 San-ad: The People Exhibitionn
Feb. 117 Ikko Tanaka Exhibition
Mar. 118 Fabrica 1994-03 Exhibition
Apr. 119 Kan Tai-Keung and Freeman Lau Exhibition
Jun. 120 Tokyo Type Directors Club 2003
Jul. 121 Luba Lukova Exhibition
Aug. 122 2003 Tokyo ADC Exhibition
Sep. 123 Stefan Sagmeister Exhibition
Oct. 124 Cultural Posters from the Collection of Die Neue Sammulung München Exhibition
Nov. 125 Hajime Sorayama Exhibition

2004

Jan. 126 Takayuki Soeda Exhibition
Feb. 127 Kazumasa Nagai Poster Exhibition
Mar. 128 Danish Posters Over the Past 10 Years Exhibition
Apr. 129 The Magazine Design Studio CAP Exhibition
May 130 Tokyo Type Directors Club 2004
Jun. 131 Pierre Mendell Exhibition
Aug. 132 2004 Tokyo ADC Exhibition
Sep. 133 The Work of Barnbrook Design Exhibition
Oct. 134 Posters from the Museum of Decorative Arts in Prague Exhibition
Nov. 135 Balarinji Design Exhibition

2005

Jun. 136 A Half-Century of Magazine Design by Kohei Sugiura Exhibition
Feb. 137 Cyan Exhibition 13 Years in Berlin
Mar. 138 Kashiwa Sato Exhibition: Beyond
Apr. 139 Mevis & Van Deursen Exhibition
May 140 Tokyo Type Directors Club 2005
Jun. 141 Laboratoires CCCP Exhibition
Aug. 142 2005 Tokyo ADC Exhibition
Sep. 143 Katsunori Aoki XX Exhibition
Oct. 144 German AGI Graphic Design Exhibition
Nov. 145 The Graphic Design of Makoto Wada

2006

Jan. 146 Swiss Poster Art Exhibition
Feb. 147 Graphic Thought Facility Exhibition
Mar. 148 Nagi Noda Exhibition
Apr. 149 Bruno Oldani Exhibition
May 150 Tokyo Type Directors Club 2006
Jun. 151 Black and White Posters Exhibition
Aug. 152 2006 Tokyo ADC Exhibition

2007

May 153 Exhibitions
Jun. 154 Tokyo Type Directors Club 2007
Aug. 155 Helmut Schmid: Design is Attitude
Oct. 156 2007 Tokyo Art Directors Club
Nov. 157 Katsu Kimura: Toi Boxes

2008

Jan. 158 Welcome to Magazine Pool
Feb. 159 Ginza Salone Osaka: Kenjiro Sano
Apr. 160 Shinya Nakajima TV Commercial Exhibition
Jun. 161 Tokyo Type Directors Club 2008
Aug. 162 Now Updating… The Interactive Design of THA/Yugo Nakamura
Sep. 163 2008 Tokyo Art Directors Club
Oct. 164 Aoba Show: Masuteru Aoba One-Man Show
Nov. 165 Truth And / Or Virtue: Graphic Designs by Shinnoske Sugisaki and Yoshimaru Takahashi

2009

Jan. 166 Helvetica forever: Story of a Typeface
Mar. 167 Brilliant Rivalry: Works by Outstanding Designers in the DNP Archives of Graphic Design
Apr. 168 Draft: Branding and Art Directors
Jun. 169 Tokyo Type Directors Club 2009
Aug. 170 2009 Tokyo Art Directors Club
Oct. 171 Kijuro Yahagi: Magnetic Vision 60/100 New Works

2010

Jan. 172 Graphic West 2: Sensory Boxes
Mar. 173 Issay Kitagawa
May 174 Tokyo Type Directors Club 2010
Jul. 175 DNP Graphic Design Archives Collection Ⅲ Shigeo Fukuda's Visual Jumping
Sep. 176 2010 Tokyo Art Directors Club
Nov. 177 DNP Graphic Design Archives Collection Ⅱ Ikko Tanaka Posters 1953-1979

2011

Jan. 178 GRAPHIC WEST 3 phono/graph–sound·letters·graphics–
Mar. 179 Shueitai 100
May 180 Tokyo Type Directors Club 2011
Jul. 181 Kazunari Hattori Summer 2011 in Osaka
Sep. 182 2011 Tokyo Art Directors Club
Nov. 183 100 ggg Books 100 Graphic Designers

2012

Jan. 184 GRAPHIC WEST 4 "Okumura Akio and Works" Exhibition
Mar. 185 DNP Graphic Design Archives Collection Ⅳ The 10th Memorial to Ikko Tanaka Ikko Tanaka Posters 1980-2002
May 186 Tokyo Type Directors Club 2012
Jul. 187 Fumio Tachibana Exhibition
Sep. 188 2012 Tokyo Art Directors Club
Nov. 189 THE POSTERS 1983-2012 –The Prize-Winning Works from The International Poster Triennial in Toyama–

2013

Jan. 190 GRAPHIC WEST 5 type trip to Osaka typographics ti: 270

CCGA

1995-2013

1995

Apr.-Jul. Graphic Vision Kenneth Tyler Retrospective Exhibition: Thirty Years of Contemporary American Prints
Aug.-Oct. Lichtenstein: Entablature→Nudes
Nov.-Jan. The Prints of Robert Motherwell

1996

Mar.-Apr. American Prints Today: 1st Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Apr.-Jul. The Prints of David Hockney
Jul.-Oct. Autonomous Color: Josef Albers
Oct.-Jan. Transcending Style: 2nd Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection

1997

Mar.-Jun. The Graphics of James Rosenquist
Jun.-Sep. Printed Abstraction: 3rd Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Oct.-Nov. Shinro Ohtake: Printing / Painting
Dec.-Jan. Line-Color-Image: 4th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection

1998

Mar.-May Frank Stella and Kenneth Tyler: A Unique 30-Year Collaboration
May-Sep. Statements in Black: 5th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Sep.-Dec. Alan Shields: Images in Paper

1999

Mar.-May Miran Fukuda New Works: Prints
Jun.-Sep. Forms That Speak: 6th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Sep.-Dec. The Story of Prints

2000

Mar.-May New Works 1998-1999: 7th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Saburo Ota: Existence and Everyday
Sep.-Dec. DNP Archives of Graphic Design Inaugural Exhibition: Poster Graphics 1950-2000

2001

Mar.-May Invitation to Print Portfolios: 8th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
May-Jul. Tatsumi Orimoto: 1972-2000
Aug.-Oct. Yukio Fujimoto: Reading to Another Dimension
Oct.-Dec. 2nd Exhibition of DNP Archives of Graphic Design: The Era of Graphic Design

2002

Mar.-Jun. Prints Leaping Into Space: 9th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Kijuro Yahagi: Touching, Piercing, and Tracing with Vision
Sep.-Dec. 3rd Exhibition of DNP Archives of Graphic Design: The Age of Individ-uality

2003

Mar.-Apr. Richard Gorman: Paintings and Paper Works
Apr.-Jun. Paper as Color: 10th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Frankenthaler: The Woodcuts
Sep.-Dec. 11th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection

2004

Mar.-Jun. The Golden Age of Illustration
Jun.-Sep. Password: A Danish / Japanese Dialogue
Sep.-Dec. Print Art of Today in Fukushima

2005

Mar.-Jun. The World of Contemporary American Woodcuts: 12th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Breathing Light: Shigenobu Yoshida
Oct.-Dec. decade – CCGA and Six artists

2006

Mar.-Jun. Painting on Stone: 13th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Masaki Fujihata: The Conquest of Imperfection- New Realities Created with Images and Media
Sep.-Dec. Tetsuya Noda: Diary

2007

Mar.-Jun. The Wonder of Intaglio: 14th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Prints Given New Life: 15th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Sep.-Dec. Unique Impressions: 16th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection

2008

Mar.-Jun. Thick with Color: 17th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Big Prints, Small Prints: 18th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Sep.-Nov. Monologues in Black: 19th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection

2009

Feb.-Jun. Prints and Titles: 20th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Jun.-Sep. Brilliant Rivalry: Works by Outstanding Designers in the DNP Archives of Graphic Design
Sep.-Dec. The Power of Red: 21st Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection

2010

Mar.-Jun. DNP Graphic Design Archives Collection Ⅱ Ikko Tanaka Posters 1953-1979
Jun.-Sep. Roy Lichtenstein: 22nd Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection
Sep.-Dec. DNP Graphic Design Archives Collection Ⅲ Shigeo Fukuda's Visual Jumping

2011

Jun.-Sep. Shueitai 100
Sep.-Dec. The World of Geometric Abstraction: 23rd Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection

2012

Mar.-Jun. The Artists Who Express through Prints: after 3.11
Jun.-Sep. DNP Graphic Design Archives Collection Ⅳ The 10th Memorial to Ikko Tanaka Ikko Tanaka Posters 1980-2002
Sep.-Dec. The Expressive Appeal of Copperplate Prints: 24th Exhibition of Prints from the Tyler Graphics Archive Collection

2013

Feb. The 24th Denzen Print Award Exhibition

DNP Foundation for Cultural Promotion

ギンザ・グラフィック・ギャラリー

開　設　1986年3月4日
名　称　ギンザ・グラフィック・ギャラリー（略称／ggg）
所在地　〒104-0061
東京都中央区銀座7丁目7番2号 DNP銀座ビル
Phone:03-3571-5206
Fax:03-3289-1389
開館時間　午前11時～午後7時（土曜午後6時まで）
休　館　日曜日、祝日
監　修　永井一正

ginza graphic gallery

Establishment: March 4, 1986
Name: ginza graphic gallery (ggg)
Location: DNP Ginza Building, 7-2 Ginza 7-chome,
Chuo-ku, Tokyo 104-0061
Phone: +81 3 3571 5206
Fax: +81 3 3289 1389
Opening Hours: 11:00am to 7:00pm (Until 6:00pm on Saturdays)
Closed on Sundays and Holidays
Adviser: Kazumasa Nagai

dddギャラリー

開　設　1991年11月5日
名　称　dddギャラリー
所在地　〒550-8508
大阪府大阪市西区南堀江1丁目17−28 なんばSSビル
Phone:06-6110-4635
Fax:06-6110-4639
開館時間　午前11時～午後7時（土曜午後6時まで）
休　館　日曜日、月曜日、祝日
監　修　永井一正

ddd gallery

Establishment: November 5, 1991
Name: ddd gallery
Location: Namba SS Building, 17-28 Minami-horie 1-chome,
Nishi-ku, Osaka 550-8508
Phone: +81 6 6110 4635
Fax: +81 6 6110 4639
Opening Hours: 11:00am to 7:00pm (Until 6:00pm on Saturdays)
Closed on Sundays, Mondays and Holidays
Adviser: Kazumasa Nagai

CCGA 現代グラフィックアートセンター

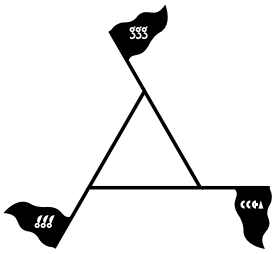
開　設　1995年4月20日
名　称　CCGA現代グラフィックアートセンター
所在地　〒962-0711
福島県須賀川市塩田宮田1
Phone:0248-79-4811
Fax:0248-79-4816
開館時間　午前10時～午後5時（入館は午後4時45分まで）
休　館　月曜日（祝日・振替休日の場合はその翌日）、
祝日の翌日（土・日にあたる場合は開館）、
展示替え期間中、冬期（12月下旬～2月末）
入場料　一般＝300円、学生＝200円、
小学生以下と65歳以上および障がい者手帳をお持ちの方は無料。
サロン利用料　200円

Center for Contemporary Graphic Art

Establishment: April 20, 1995
Name: Center for Contemporary Graphic Art (CCGA)
Location: Miyata 1, Shiota, Sukagawa-shi,
Fukushima 962-0711
Phone: +81 248 79 4811
Fax: +81 248 79 4816
Opening Hours: 10:00am to 5:00pm (Admission until 4:45pm)
Closed on Mondays (Tuesday if Monday is a public holiday),
the day immediately after a public holiday (except Saturday and Sunday),
between exhibitions and during winter (late December through February)
Admission: Adults=￥300, Students=￥200,
Free for young children (through elementary school), senior citizens (65 and over) and the disabled.
Salon Utilization Fee: ￥200

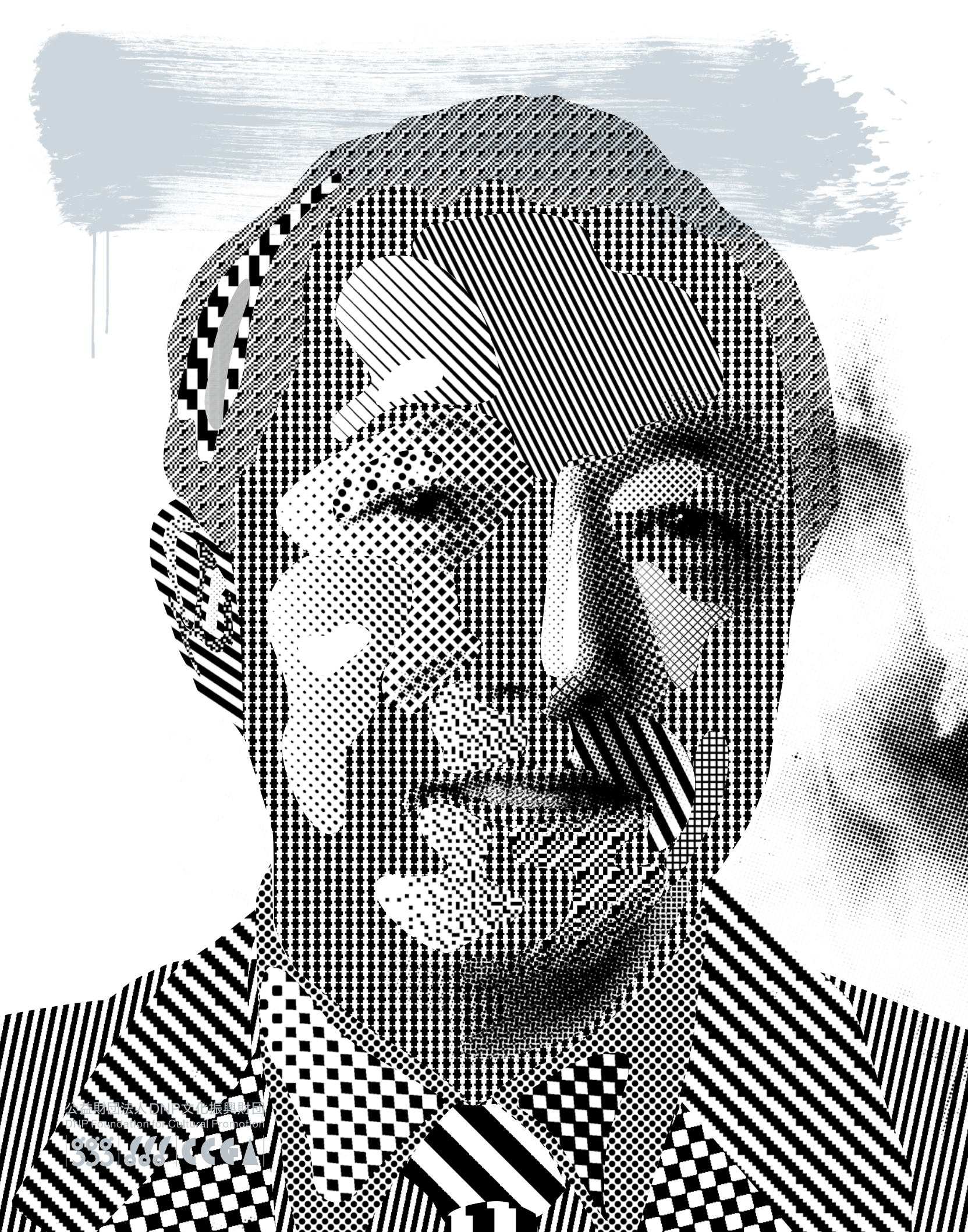
企画・運営　公益財団法人DNP文化振興財団
http://www.dnp.co.jp/foundation

Planning and Operation: DNP Foundation for Cultural Promotion
http://www.dnp.co.jp/foundation



Graphic Art & Design Annual 12-13
ggg ddd CCGA

発行	公益財団法人DNP文化振興財団 〒104-0061 東京都中央区銀座7-7-2 DNP銀座ビル Phone: 03-5568-8224
企画・編集	ギンザ・グラフィック・ギャラリー
アートディレクション	松永 真
デザイン	松永 真次郎、清川 萌未
撮影	藤塚 光政（ggg会場写真） 堺 亮太、高梨 光司（gggギャラリートーク）
翻訳	室生寺 玲、株式会社サイマル・インターナショナル
協力	臼田 捷治、河尻 亨一
印刷・製本	大日本印刷株式会社


公益財団法人DNP文化振興財団
DNP Foundation for Cultural Promotion